081. 5-Sa45ウ
1200500724729

152

省務内
10.1.11
(版出通普)

普通書
神4.53
永久保存

081.5
SA45

訂增

象山全集

卷二

上海圖書館藏書

書簡

少年時代（松代）天保四年十一月江戸遊學以前

一齋塾時代（江戸）天保四年十一月より同七年二月迄

浦町時代（松代）天保七年二月より同十年二月迄

玉池時代（江戸）天保十年二月より弘化三年閏五月迄

御使者屋時代（松代）弘化三年閏五月より嘉永四年四月迄

藏。

本部分三九四頁より三七二頁の抜

き取り複製したもの。

原本は縦六尺六寸横六尺九寸の

屏風貼交ぜ屏風。

昭和十年四月に縮印刷。

昭和十年四月二十日發行

定價金壹圓

發行所　信濃教育會出版部

感應公墓誌銘

嘉永五年四十二歲の筆蹟にして、全文第一卷象山淨稿に出づ。書體は、石門頌と孔廟禮器碑とを兼ねたる漢隸なり。

原本は縱六尺六寸四分、横三尺三寸二分の紙本にて、眞田伯爵家所藏。

故侍從眞田公墓誌銘

故侍從眞田公葬於江戶櫻田新橋之第。以異月戊申歸葬於信濃松代。

公諱韜。眞田氏。世爲松代城主。世襲侍從。十五傳。以疾辭職。嘉永五年夏益病篤。朝廷仕歸邊第。令公舉現二月叙四品。十二年六月攝爲加判列。夫人本姓松平氏。故東照神祖八世孫也。光君奉專公乳養爲嗣。以女配之。文化十三年十二月。期令公命里叟爲之誌。里叟久聞叟名。擇并書。

少將白河城主定信君第二子。而叙從五位任豐後守。文政六年家督改伊豆守。後又更信濃守。天保二年十二月叙四品。十二年六月攝爲加判列。夫人本姓松平氏。故東照神祖八世孫也。光君奉專公乳養爲嗣。以女配之。文化十三年十二月。期令公命里叟爲之誌。里叟久聞叟名。擇并書。

侍從十五傳。以疾辭職。嘉永五年夏益病篤。朝廷仕歸邊第。令公舉現二月叙四品。十二年六月攝爲加判列。夫人本姓松平氏。故東照神祖八世孫也。光君奉專公乳養爲嗣。以女配之。文化十三年十二月。期令公命里叟爲之誌。里叟久聞叟名。擇并書。

人。原姓井上氏。故濱松城主河內守正甫君之女。以異真田氏生也。

一女。適隱岐向井木君和乙。爲東城主松平君忠馮第八子章忠君定信君第二子。而

彥子也。任豐後守。又先卒。令公時年十歲。稱世子。令信濃守。

遠鍾少好文武學。猶未泊弱冠。名聲顯于遠邇。異

卒之際。人未及思議。而 公則從容出心之妙合至理。使人

有政庶而有制。嚴而不刻。洗垢易敝。以新鄙怡。益篤儉素。

也。異自奉之至薄。人或以爲嗇。然至於備海警。鑄巨砲。電

頻如者。談雖有不悌。未嘗見聲氣及。通中率適容。益粹溫

各謁輸。異嶠人有過失。含容隱匿。唯恐異或宣人有一善。

聽 公之言。莫不意阻氣消。而遷稱。異贊是。以大小諸侯。

朝政事新。賢能驟進。一旦立 朝。殆將仲舅美。志。以大異

下至布衣。諸出。莫不痛惜而傷。腕曰。吁命矣夫。 公善御

然。常馭。轡晦不輕。以自試。故雖近侍左右。莫之能窺。嘗在

中 公。執小弓。教一矢。隨手擲地。異諮之。猶大率類此。然

之。淺乎異。爲言矣。詔曰。

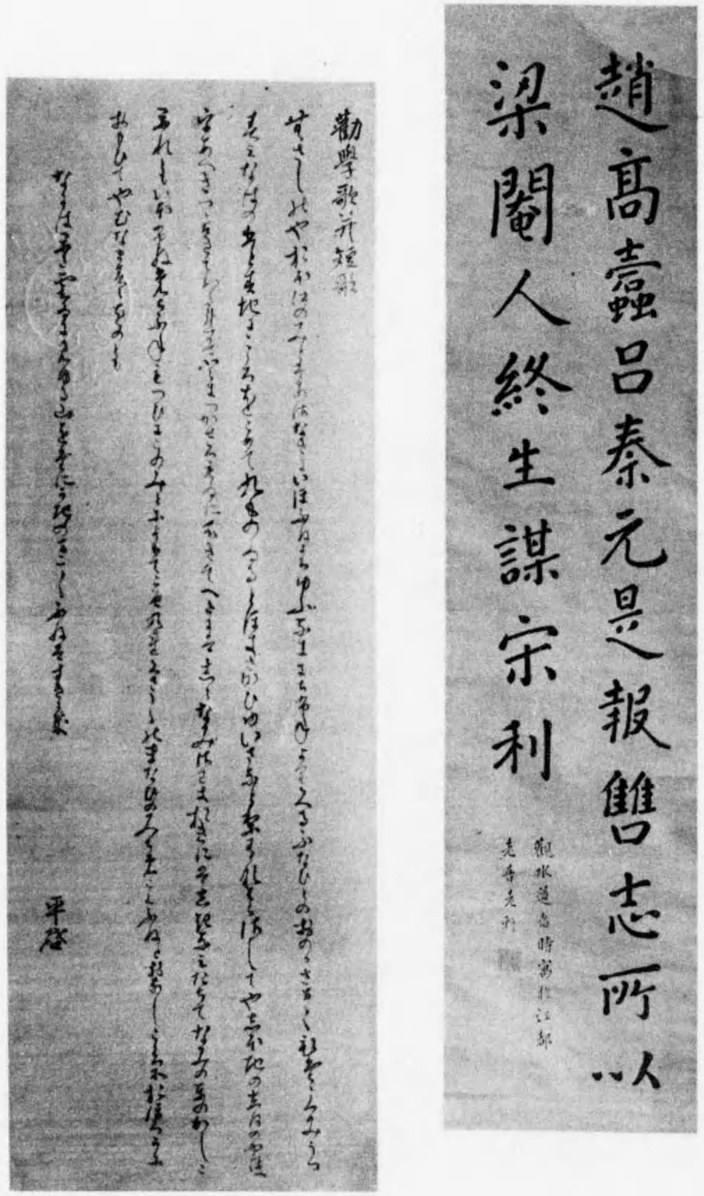
既孝且仁。又儉。以勤。均異貴也。莫與之儉。山爲台。海殤慶。張之人視諸斯文。

山水畫

城中沽(ウテヲ)醉眼生(ズヲ)花。吟步踹跚帽子斜(ナリ)。
山雨初晴(メテレ)溪路滑(ナリ)。石橋殘日未歸(ズ)レ家(ラ)(ニ)。
予屏居嘗作(デル)此圖(ヲ)。八田子靜復強(メ)レ予(ヒテニ)爲(ラシムヲ)之。

象山樵夫

安政四年の筆、紙本縱六尺壹寸、橫三尺二寸五分、松代町八田彥次郎氏所藏。


趙高蠢呂秦元是報讎志所以梁闇人終生謀宋利

勸學歌并短歌

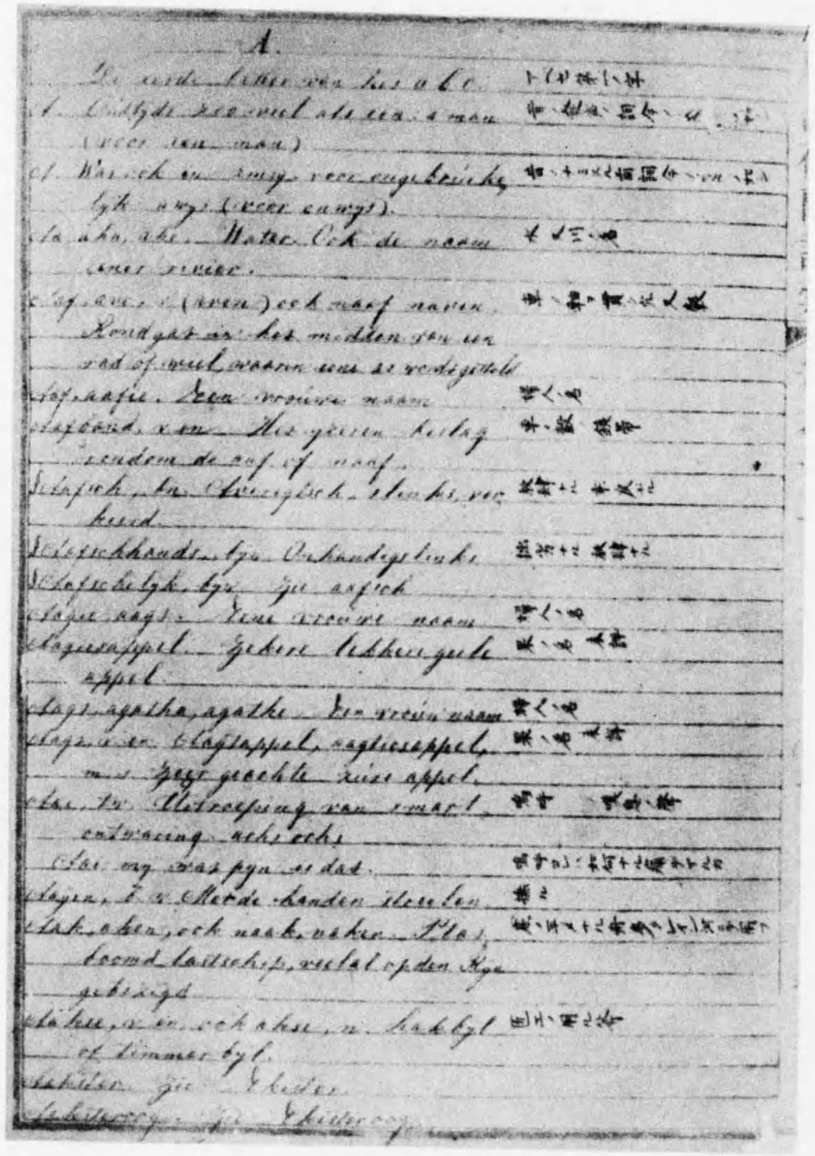
平啓

趙高蠢二呂秦一。元是報讎レ志。所三以梁ノ闇人。終生謀二宋利一ヲ

一齋塾時代の筆なり。原本は、縦四尺五寸四分、横一尺〇三分の紙本にして、松代町高田壽三郎氏所藏。

勸學歌

聚遠樓時代の筆なり。全文第二卷和歌雜の部に出づ。原本は、縦四尺横一尺四寸の絹本にして、眞田伯爵家所藏。


A.

De eerste letter van het A.B.C.
A. Lidtyde te vuur het aarde, 4 maan
(vuur zon maan)
Al. Water en zuig vuur ongebrieke
lyk zuig (vuur zuigt).
Ala, aha, ahe. Water Ook de naam
voor rivier.
Ag. ags, s (zeven) ook naar zeven
Koudgat in het midden van een
rad of wiel waarin een as rondgedraait
Aap, aapje. Een mannie naam
Aapjond. Een Het geven Verlag
random de oof of naaf.
Abgeloh, be. Overgloh. Stomb, voc
keed
Abkondands. bgv. Ordandgetuide
Abgeloelyk. bgv. zie afgeloh
Abje, aapje. Een vrouwe naam
Abjesappel. Zekere lekkere geele
appel
Abt, agatha, agathe. Een vrouw naam
Abjes of Abtappel, abjesappel,
m. v. Zeer goedde rijpe appel.
Abw. te. Verkeering van vuur!
ontvlaming ashe ecke
Abr. my was pyn is dat.
Abyen, v. a. Rende Landen ploegen
Ach, ache, och naak, naken. Plat
boomd Lastschip, vuilal open Kyn
gebruyd
Achse, n. of. schakse, n. Lukbyl
of timmer byl.
Achtbar. zie Achtbaar.
Achtbaarheyd. zie Achtbaarheyd.

増訂荷蘭語彙

其の第一頁にて、嘉永二年先生の編する所のものなり。原本は現在所在不明なれども、往年は勝伯爵家所藏にて、大正の初年、これを保管せる東京市南葵文庫に就き撮影したるものなり。

985
2

書簡少年時代

天保四年十一月
江戸遊學以前

特に所有者の氏名を掲げたるものは、直接原本につき
謄寫せるものにて、助辭送り假名等は嚴に原本に從ひ、
其の面目を存することに注意したり。所有者を掲げざ
るものは他書より轉載或は寫本に據りたるものなる
を以て此の例により難し。又手簡中注意すべき點はこ
れを欄外に掲出し閲讀に便ならしめたり。

天保四年か

先君御墓碑之義段々難有

〔一〕 山寺源大夫外一人に贈る

松代町 赤澤光太郎氏藏

彌御障無御座奉欣然候然ば先君墓碑之義段々難有感謝不一奉存候右付石工ゟ代金中借願出候是も石碑立上げ致候上にて代料可申受之所種々物入等御座候に付無餘岐相願候と申義ニ御座候則其御方へ差上候間乍御厄介宜樣奉希候萬所祈御座候頓首

十三日

源大夫樣

藤助樣

天保四年十月十五日

〔二〕 綿貫新兵衞に贈る

令郎之御縁談占筮の義

追日霜氣相加候得共愈御平善欣然仕候令郎之御縁談占筮の義太致遲緩恐入候便占候處至極宜御座候此方にて動先方順候卦候得者御相談可調事何之疑も無之候乍去萬端敦厚に宜御座候併此卦一陽來復之時にて候得者能々養候上にて

書簡　少年時代　〔一〕山寺源大夫外一人宛　〔二〕綿貫新兵衞宛

書簡一齋塾時代

自天保四年十一月
至天保七年二月

御婚禮は三年御待可被成候

事を爲候方宜御座候左候得者御相談早速相調其御婚禮は三年御待可被成候若是に背候時者陽陰を制する事不能却て敗を取候事可有之候間御愼可被成候餘委敷者拜眉之節可申盡候不具

十月望　　啓之助

新兵衛樣

癸巳十月望爲綿貫氏筮令子之婚其卦得復

下震
上坤

斷曰可成宜敦備必俟三年

養性子

天保四年十一月

〔三〕藩老矢澤監物宛借用金證書

覺

金七兩也

右は私義江戸へ罷出文學修行仕度奉願候所早速被仰付候得共從來勝手向不如意に付入料にも差支候義にて御座候を以無餘儀御無心申上候所早速御聞濟被成候て殊に無利息に被成下金子慥落手仕千萬難有深感銘仕候義にて御座候併私修行之爲之故に箇樣之御深惠をも被成下候義にて御座候得ば自然私修行半途に怠惰を生じ學術成就不仕候義も御座候ば右之金子に利分御疊込み被成下私頂戴物之內を以嚴敷御取立被成下候樣奉希候爲念如是に御座候以上

天保四年癸巳十一月

佐久間啓之助㊞

矢澤監物樣

天保五年四月廿五日

〔四〕伊木億右衞門に贈る

東京市　宮本仲氏藏

久々書簡をも不相進御無音之段御海函可被下候皆様絶て御障無之御座候や奉
伺候扨宮本君御不幸何共申様も無之次第嘸々御氣之毒に可被思召致推察候こ
とに御座候誠に私も爲御知を得驚駭致候且別來碌々書問も不申折々書狀は頂
候て病様も次第に快方唯未だ出勤には不及こと〻存彌不沙汰而已打過候所此
度のことにて誠に殘念至極に存候書物等のたのまれ物追々見出候品も有之其
内そろへ送り申度存候處摘様のことにて不堪悲痛存候摘様のこと〻存候ば一
二部も早く送り可申に左様も不致後悔のみ致候先達而は龜事も鬼錄に加り又
今度宮本氏も同様にて二良友を失ひ誠に歎息致候こと〻に御座候併市兵衞君は
慎增の二俊童御座候て實に不幸中の幸と存候申迄には無之候得共能々御敎育
御座候て始終全才に相成候様乍陰所祈に御座候御老人ふたり誠に察入候義に
御座候此間早々に悔而已申遣候御序に又々宜希候御姉様へもよろしく願候先
早々申上候兩尊大人へは別て宜敷願候時氣向溫折角御自重所希御座候頓首

啓拜

朱櫻園君

四月廿五日

（慎增は宮本慎助田中增治兩兄弟のこと）

宮本君御不幸

小白本文之義故そこ所にも有之間敷候得共先日珍墨手に入申候その形す
り母の方迄遣し御目にかけ候様申遣候御覽被下候や
別啓宮本氏にても日增に御淋敷と致遠察候先達て御遺品被下候御挨拶は致
候心得に候得共無覺束候間又々申上候御序に宜希候新助增治兩童は如何候
耶稽古事彌出精御座候や隨時御敎勵御座候様所祈に御座候書物の義も小宮
山より承知致候得ば子供衆も未幼年にて入用も無之候得共調候分は小子之
迷惑之筋にもと申御心配にて差上候様被仰越候御様子之由一向左様の筋に
は無之候故別段不及御懸念私手元にて夫々に取扱候間左様思召可被下候併
右の書物も是市兵衞兄の志の存する所に候得ば小供衆必用之品は小子歸鄉
の節持參可致候其他儀象□成等之書は大金而已にて差掛り入用之物にも無
之又子供衆の生長の後若入用候はゞ其節兎も角も致候方可然存候此段も御
序に宮本御老人へお噺可被下候此義も早速可申上之處誠胸之惡き事故乍思
及延引候扨七月中は東福寺の南嘯も致病故引續良友を失ひ候事實不堪悲傷
候兎角つまらぬ人物は世に多く善良之人は却て短命等にて不得其終天意果

七月中は東福寺の南嘯も致病故へ南嘯は宮尾溫卿）

して奈何をしらず兄は何と思召候や

天保五年五月一日

〔五〕　矢澤監物に贈る

東京市　宮本仲氏藏

其後は御機嫌も不相伺久々御無音申上奉恐入候近日溫氣に相向候得共彌尊體御清福被爲入候乎相伺候時氣之遷轉に付候ても令郎君之御事思召可被出奉遠察候隨て私義も無異勤學罷在候間乍憚御降心可被成下候此節は日夜專ら文章に精力を盡罷在候然る處鰲駘之質故乎兎角業も進み兼每々愧入候義に御座候人之申候には歩を進め候所相分候樣に申候得共自ら省候には尙只今迄早く出來候文も早く出來かね容易に筆之立候所も容易に筆之不立樣に相成候師翁之申候には右の所を致出精推拔候て後文道に悟入仕候と申候文章に箇樣骨折候義定て思召には入申間敷候得共文章に暗候ては經義も不明其上文學修行之願にて出都乍仕文章一ッ人並に出來不仕候ては恥辱至極と奉存候右故費工夫罷在候此に一件御座候甚申上兼候義に候得共兼々厚御內意も相伺候義に付申上候先兼て申候通修行在府中之入用等別之手談も無之其內には何とか計策も付

極て御內密に御手元よりり年々少々ヶ可宛御下被置段蒙仰

可申存出都之義而已差急ぎ御內々相願候筋にて出立に相成冬中は右之御厚情にて相凌難有奉感謝候是は極密之義にて口外難仕候得共不申上候ては事不相分候故不得已事申上候御內々にて御聞可被成下候當春御目通相願候節勝手向困窮にて費用等差支候趣申上候處深御憐察被成下置極御內密にて御手元より年々少々宛御下ヶ可被下置段蒙仰難有仕合奉存候併私御直頂戴仕候樣にては事體にも相障可申且泰順初より萬端世話仕呉約束候故貨財之義は是を以申上候御上之御趣意にも平日は御都合不宜歳末に何れ御下ヶ可被成下置泰順は御內用も承居手元も自由に候得ば是より折々受取候樣に被仰下候よし泰順申候其後は月々壹圓計宛受取申候最宅より遣候分も少々預置候此間先月今月之飯料一同外に無據調物仕候て二圓餘遣呉候樣申遣候所只今迄三圓餘之取替に相成候上又箇樣にては迷惑之由にて別帋之通申越候此表之樣子承候に御在所とは相違仕高利にても能廻り候よし左候得ば自身之子乎兄弟にても無之候て數箇月之間多分之取替仕候事迷惑之筋は最至極被存候然る所宅も兼て申上候仕合東福寺恆三郎義も當春八十五郎妻死去等にて入增も過分に御座候所へ申遣

候義も難仕候此表にて近付之者も追々出來商家にて手廻りも宜敷者抔時々相
尋用向等無遠慮申候樣申候得共始終は兎も角も出府後一年も不立候て右樣之
義御屋舖へ對候ても難申出泰順わは強て相賴候はば何とか致呉可申候得共向
之申候所も無理には無御座候得ば強ても申にくゝ奉存候右に付色々計慮仕候
所御上ゟ御下被成下候分は來春に廻し當冬迄之所何とか仕候外術無御座候就
候ては恐入候得共又々十金御惠借被成下候樣奉賴候平日成候丈誠に節儉相用
ひ無用之他出等一切不仕萬端省略仕候ても初め積候ゟは費用多く右故書籍類
之調度品も每度堪忍不調罷在候此度適樣相願候とて調物等仕候には無御座候
當座之窮を相救且中元之用意をも仕度奉存候右之仕合故早速六圓相願度奉存
候餘は盆後にて宜御座候乍恐入候義後便早速六圓許御送被成下候樣千萬奉希
候課業中用事而已早々先申上候此間御沙汰相伺候に御出府之期も未だ御知れ
不被成候由惟折角爲國御自愛御座候樣所祈御座候頓首再拜

五月一日

覺

金十兩也

右は文學修行中差困候義御座候付御無心申上候所以厚御情誼御惠借被成下千
萬難有奉感謝候萬一修行怠惰仕放恣に流候義も御座候ば早速嚴重に御取立被
下候樣願上候爲後日如斯御座候以上

天保甲午五月日

矢澤監物樣

佐久間啓之助㊞

（印文國善とあり）

天保五年五月廿日

又々十金御惠借被成下候樣奉賴候

〔六〕佐藤一齋に贈る

一齋先生言志後錄に付存念申述候案

言志後錄御淨寫に相成候とて拜見被仰付且存寄も御座候はゞ無腹藏可申上旨
仰を蒙り不知所謝難有奉存候篤と拜見仕候所いづれも高妙の御事にて淺見の
屆き候はぬ義のみに御座候乍去度々反覆仕候內追々疑惑之筋も出來仕候に付
最初は漢字にて書付可奉伺存候得ども右にては唯文字をもてあそび候爲に仕
候樣にて如何敷も奉存候故只存付候儘を俗語に相認め申候抑先生平日の御文

字僅かなるものとても再三御推敲御座候て御命意は勿論御造語之末迄も必ず
至當を御究め被成其後に御淨寫御座候事に候得ば別して此度の御著述は定め
て何程歟之御精思を御費被成候御事と奉存候得ば例令仰を蒙り候にも仕れ淺
學之拙者底兎角申上候は憲外千萬に御座候得ごも禮にも無隱無犯は師に事ふ
るの道共有之且又先生之御道學御文章當時天下之山斗に被爲入候得ば御言行
ともに衆人の則を取り候所に御座候右之場に御座候得ば御一言を御發し被成
候も實以御容易に無御座候殊に今度御著述御座候類は當時本邦に行はれ候の
みに無之後世へも傳り且外國へ流傳も仕可申候へば御精錬御座候樣仕度奉存
候右に付聊にても愚意御座候場所をば不韜申上候尙又御門下の高足へも御示
し銘々之存寄をも夫々御聞屆之上尙再四御商量御座候て其上にて世上にも御
行ひ被成候樣仕度畢竟右之存念にて申上候故成程と感服仕候義は別段書付に
不仕唯乍憚如何と奉存候所のみ申上候拙者義元來不文に罷在候故言語之間我
不知突冒に罷成心にも無之失禮之義も可有御座候其段は幾重にも御赦免被成
下度候

第一頁表

堯舜之上善無盡此語一體餘姚に起り候樣奉存候へごも畢竟道理に於ては如何
可有御座や果して堯舜之上に善盡る事なくんば堯舜の善は未だ盡きざるの善
に御座候べくもし未だ盡きざるの善に御座候はゞ是を至善とは申難かるべし
萬一至善に無之候はゞ又何を以て堯舜は至聖也と申べきや論語中堯舜其猶病
諸等の詞よく善盡ることなきの說に似寄候得ごも是は只その充積の物に及び
候所より申候迄にて二聖心德上に增益の御座候べき事にては無之樣奉存候愚
見右之如く御座候故に夫子踰耄至期其神明不測云々の御語も何とやらん聖人
の上に又神人と申もの御座候樣に被窺乍恐如何と奉存候

二頁裏

如到鬼神前祈請一般と申所御譬喩甚妙とも奉存候乍然恐多く候得ごも氣志如
神の字につき餘りに御深說すぎ候て却て本意を失ひ候樣には御座候はずやと
被存候故奉伺候

三頁表

都是習氣爲之也と御座候得ば上に御座候數件之弊病不殘後天に御屬し御說被成候樣被存候金谿姚江は總て此見識に御座候得共身に體し平心に思察仕候得ば人之上許多之弊病悉皆先天之氣稟と後天の物欲と相因て其拘蔽を成候事にて必しも後天の果のみに無之樣奉存候且御說には能達其靈光則習氣消滅すと御座候得共却て多分は習氣の消し候程ならでは靈光は達し候はぬ樣に奉存候但し天理人欲互に消長を爲し候得ば太陽出て百惡跡を遁るゝの類も有之又雲霧を開いて天日を見候事も有之就れ一偏に相成候てはつまり義理全備は不仕候やに奉存候御發蒙可被成下候

五丁表

心爲靈其條理云々此理と被仰候は卽性の事にて御座候や左樣解し候節は下文に差詰り候樣奉存候又心直に條理をもち候ものと解し候節は心卽理也とて心を師と致し候の大弊を引出し候樣にも相成可申や御本意の所未審候間篤と御提誨奉願候

五丁裏

心存中和則云々如此敬を御說被成候ては乍恐餘り向上に過ぎて學者手を下し候に無處樣に罷成候成程被仰候廣胖申天之類所謂敬にも有御座べく候得ども學者の敬を學び候にいかでか最初より其地位に到り得候べき萬一心得違ひにてかの整齊嚴肅主一無適之方を外にし只管中和安舒の邊より敬に入らんと欲し候はゞ恐らくは序を失ひ等を踰へ候て遂に其成功を見る事難かるべしと奉存候且又人として整齊嚴肅主一無適にさへ御座候はゞ何にても柱梏徽纆之患も有御座間じく被存候事に御座候

同

人一生所遭云々人果して聖賢に御座候はゞ如仰所遭の險阻坦夷安流驚瀾皆其正命とも可申候得共見渡し候所凡人之上にては多分我と我身を險阻に驅り驚瀾に陷れ候事世の常のことに候得ばやはり平日凶を避け吉に趨るの方を示し申度ものと奉存候愚意には其凶をさけ吉に趨る卽是易道と奉存候先生之被仰候氣數自然竟不能免にてはなにさま術數に落候樣乍恐被窺申候

六丁表

人物何曾有生死如此にては全く不生不滅之意に相成可申や尤御下文消息盈虚之御字面も御座候得共愚眼拝見仕候處にては但右之四字を以て不生不滅之義を御粧飾御座候のみの様に拝見仕候申上候は實恐惶之至御座候得共是は必御弊の御座候御詞之様奉存候

同　裏

中字の最認めがたく候は人の氣魄の強弱に不拘只是平日格物窮理之實功無之故に御座候歟

七　頁　表

克己工夫在一呼吸間此御主意は克己工夫はいつも〳〵一呼吸の間にありて事濟候と申義に御座候や又は一呼吸の間にもこの工夫は有之と申御事に候や孰れに仕候ても下句の五字は乍恐急劇促迫に過ぎ候かにも被存候尚御明喩奉伺度奉冀候

同　裏

人生於地而死於地畢竟不能離於地と被仰候得共凡そ地ならざる所皆天にて御座候得ば足心下の空所も亦是天と奉存候左様に候得ば人は地に生るとこそ申候へ生より死に至る迄何れの時か天中に呼吸し候はぬ事の御座候べき去れば聖賢之學に於ては天地と其德を合する共申候事と奉存候唯高說の通りのみにては地德をさへ執り候得ば天德は執り候はずして可也と申様相聞へ憚多く候得共如何かと奉存候事に御座候

八　頁　表

養生之道只從自然爲得誠に御尤千萬と奉存候乍去有意於養生則不得養生と申を蘭香の嗅げば不成嗅ざれば成ると申に御譬へ被成候事は乍憚御愚論かと奉存候抑養生之事自私自利の心よりそれのみ專らと致し倫理綱常を廢し候節は假令千萬世金石の壽を保ち候共君子の所不爲勿論に候得ごも養生に意ある時は養生になり候はぬと申事は恐らくは有御座まじく候程子に修養永年の說竝爐火の譬等御座候にても但君子の是を不爲耳天地間おのづから此一種の小術有之候事は明白のことゝ奉存候

同　裏

易以天云云愚意には天と人と本無二理ものに候得ば成程古來聖賢の被仰候事にも或は天もて人を說き又人もて天を被明候義も御座候得共易書の別必しも此に於て如此判然仕候義共不被存候併是には定めて御明解の御座候御事と奉存候何分御敎示可被成下候

十頁　表

人一身之條竝面背之條申上候迄も無之妙理と奉存候併如仰陰陽を升降收移仕候に如何其功を用ひ候義や分曉仕かね候自然此外に工夫無之此處卽是工夫に御座候はゞ乍憚精神を皷弄致し候の弊を不免候樣奉存候雖然旣に長背之御工夫より御自得御座候御事と承り候得ば必ず定めて愚存とは相違仕候義と奉存候何分通曉仕兼候間偏に御敎喩奉仰候

同　裏

先天而天不違を廓然大公未發之中と御解し被成候事乍恐如何御座候半や愚意には先天後天共皆已發之事と奉存候蓋先天不違と申事聖人意の所爲道と默契するを申候迄と承り及び候事に御座候

十二頁　裏

人當自思察在母胎中之我心意果如何乍憚此義は佛氏識心之工夫に似寄候て聖學盡心知性之修行と相違仕候樣奉存候かつ胎胞中心意必是渾然純氣專一無善無惡只有一點靈光耳と被仰候得共愚意には人の母胎中にある時只是渾然と理を存する而已未だ一點靈光は生じ候はぬ樣に奉存候洪範五事思を最後に列し候處にてもよく相分候事と奉存候

十三頁　表

孔子在齊條世之學者に遠遊艱難之際に於て力を得候事のありと申義を御喩し被成度まゝかく被仰候事とは奉存候得共乍然夫子實に宋に微服し陳蔡に厄し衞に適き鄭楚に走り皆意を不被爲得候故に力を多分に被爲得候と申にては乍憚聖德に害ある樣奉存候凡そ艱難辛苦にて其能せざる所を增益する事は總て地位卑きものゝ事にて生知の聖人にはあるまじき筋と奉存候たとひ夫子最初より志を魯に被得遠遊艱難之事無之候とも聖德に於ては一毫の損益有御座まじく被存候愚意如此不知畢竟如何候半や

十四頁表

主宰之靈卽性也是にては憚多き事ながら禪佛の申候性にもや候べく奉存候愚意にてはごこ迄も主宰之靈をば心と解し申度候是は學術の大頭腦に御座候得ば何分にも精敷御趣意相伺度奉願候

同　裏

道心性也人心情也是又只今迄心得罷在候義と甚相違仕候事にて只今迄心得罷在候には人生れて靜なる以上氣いまだ事を用ひず候故道と人との分別は未だ無之感而動き候に及び始めて人心道心之分立候事に候得ば未發之性と已發之情とを以て道と人とに分配は出來かね候樣奉存候甚疑惑仕候義幾重にも御提耳可被成下候

十五頁表

一念發動上反觀自性覓未發時景象以挽回之則情之所感純以性動無不中節也乍恐御詞之上餘り快決に御過ぎ被成候やに奉存候尤も引つゞき工夫甚難し云々とも御座候得共愚意を申上候得ば純字無不の字尙太快のやうに乍憚奉存候又

常に戒愼之於未發之時と被仰候が愚意には未發之時未だ戒愼を言ふべからず纔かに戒愼すれば既に是已發と奉存候

同　裏

近則狎之則狎之の間或の字有之度候歟

十六頁裏

美質恃むべからずして聖賢も亦學ぶべし天を以て得る者未だ必しも固からず人を以て得るもの未だ必しも脆からずと奉存候が畢竟如何候半や御誨諭奉願候

同

赤子之知好惡候事心之靈光に勿論相違も有御座間敷候得共其然る所以はすなはち性善に候得ば心之靈光を性之善と御作り被成候方乍憚可然哉兎に角學者には心と性とをいかにも了然と致分別忘れても禪見に陷らざる樣仕らせ度ものと奉存候事に御座候

十七頁表

天地未嘗增一物天地未嘗減一氣是又乍恐不生不滅に相聞え可申や尤も最初古往今來生々不息とは御座候得共何か御弊の御座候樣に存上候凡そ小は大の影に御座候得ば一年の數も一元之數に替りは無之一身の理も天地之理と同樣の事にて一年の春夏秋冬一身の少壯老死皆是生々之易には御座候得共一向物に增減なく氣にも增減なしと申ものには無之樣被存候されば天地も亦如此と奉存候

十七頁裏

儒者於經解釘牢繩縛幷道與學幾死と申御事當時崎學之徒考據家者流抔之弊病に於ては誠に頂門上之一針と難有事に奉存候雖然近代以來習俗苟偸に相成學に家法宗主と申もの一向に無之右に付經を治め候者往々折衷と唱へ第一經之本文にも不熟先儒の傳註にも不涉只管彼此を扭捏し候て妄に主張を成し候事も不少候得ば萬一是等の徒抜釘解縛之御說に據依致し其猖狂を肆に仕候はゞ其害も亦不淺々と奉存候左候得ば可相成は可也と申下に今一くだり右之大弊を御反說御座候樣に仕度候也

同

人當自認我軀有主宰云々呼做道心拙者に於ては既に十四葉裏に略申上候通の見に御座候故恐多くは候得共此處但心と被申候のみ未だ道の字はつき申まじくと奉存候將又最初當自認我軀有主宰と被仰候其認むるは何者が認候義や甚不審仕候果して外にこゝの御座候はゞ是にては主宰が貳つになり候て濟かね申べく又壹箇の主宰が主宰を認候と申にては全く佛家の觀心にて先輩之議論之通り目を以て目を視口を以て口を齕み候類に當り申べき歟乍憚是義は尤も如何かと奉存候義に付無腹藏申上候

十八頁表

耳有天性之聰目有天性之明この聰明は矢張御下文の臭味運動と御一例に聽視の字に有御座度ものかと奉存候

同

心非有二此御一條も是不審之筋に奉存候乍去既に前にて申上候義に付別段書付不仕候

二十頁表

至於得力處則宜任其所自得これ又乍憚御造語御太快やと奉存候其自得之所果して孔孟程朱之道に大同小異に御座候はゞ成程子細も有御座間敷候得共既に其自得に任せ候と相成候はゞ或は小同大異にも成かねまじく又は一向に異端邪説に流れ候事のある間敷きものにも無之候得ば是は甚無心元義と奉存候事に御座候

二十一頁裏

收斂精神云々精神の字金谿抔の毎度好んで説出し候字面に御座候得共何かと修錬家めき候事の様に被存候申上候は如何に候得共此二字を放逸の字に御取換被成候ては如何候や謹で奉伺候

二十四頁表

草木の崩芽云々甚だ手近き事故人の結句氣のつき候はぬ事に御座候が乍憚如何にも面白き御道理と奉存候但し併し其移植之土地をば必ずよく〳〵吟味致し候へと申御事結尾に今御一言有御座度ものかと奉存候

二十五頁裏

前に不易變化者土氣と御座候得ば易くは無之候得共千百弗措之功を加へ候はば終には變化も出來候事の様被存候然る處後に至り土氣止順導之去其過不及耳と御座候是にては土氣は畢竟變化の出來ぬものと片付き候様相聞え何か前後相應不仕やにも乍憚奉存候右にても妨は無御座候や奉窺度候

同

草木の寒溫酸辛諸毒の不同候を皆土氣也人の氣質も亦然りと被仰候得ばこの前の條に土不可變と御座候も矢張こゝと同様の御趣意と被存候右にては乍憚物の既に形氣の偏塞に梏せられて其本體の全きを充て候事の不能品と人の生れて氣の正しく且通じ候を得候ものと何も差別無之様に相成先哲氣質變化の説にも戻り候かに奉存候且中庸雖愚必明雖柔必強の愚案も高論を推して申候得ば是も土氣に片付可申候然る處修行次第明強に相成候と御座候得ば土氣といへども其終に變化の出來候事又何の疑か候べきと奉存候尚御示教被成下度奉願候

二十六頁表

邦俗喪祭云々在吾輩則自當用儒禮と御座候が申上候も恐多く候得共在吾以下の九字なにさま不平穩の筋も聞え可申や拙者迚も喪祭佛に依り候がよしと申所存には勿論無御座候得共是も當時は天下御大政の第一にもなり候て御互に七年に一度は寺證文へ印形も致し候義兎に角此節と相成候ては親の大事を送り候にも佛を逃れ候事此邦に在るが最後出來かね候勢に候得ば假令吾輩に御座候て儒禮を斟酌致し竊に是を用ふるにも仕れ押出し自當用儒禮とは少々申兼候義かと奉存候扨又冠婚之禮笠勢二家に遵ひ候事此義は喪祭佛に依り候とは相違にて當今武家に於ては誠に相當之筋と奉存候尤も其間動もすれば道理を盡さゞる所も御座候得ば其段は聖賢之思召に隨ひ時宜を斟酌仕候事は勿論可有御座候得共第一當節大朝を奉始御取用ひに相成候禮儀を廢し別段一家の儀注を創制致し候事は恐らく聖賢の御趣意にも御座あるまじく存候兎に角愚に於ては邵子之今人敢て古衣を服せずと申され候が難有事に奉存候

同

邦俗養子後を承くるの事拙者主家始めも既に左樣に御座候得ば只今口より出しよしともあしとも申候事は出來かね申候乍然祭法有虞氏祖顓頊而宗堯の文を御引被成全然與養子承後相類すと申御說は乍憚決して左樣とは不奉存候祭法の義は全體に緯書之詞も雜り諸經に見る所なき事共多分に候得ば先儒も多く疑之候事に御座候先其義は姑差置き試に御一思可被遊候舜の天下を被受候事全く養子の後を承くるの類にて無之候得ばこそ堯の陶唐氏をなのられずして本姓の有虞氏を稱せられ候此一事にて最早論は片付可申と奉存候

二十七頁裏

爲其所蠱の四字疑らくは羨文かと奉存候

二十八頁表

王政只是平穩平天下之平字可味乍憚珍敷御說と奉存候愚意にては此二つの平の字從來頓と別樣と奉存候平穩の平は洪範の蕩々平々の意味にも可有御座候又平天下之平は齊家治國之治と一例之字面にて朱註均齊方正の四字全く之に貼し候樣奉存候尙御示敎奉願候

三十頁表

小饑荒大凶歉是にても可然候得共穀梁傳にも一穀不升謂之歉二穀不升謂之饑三穀不升謂之饉四穀不升謂之荒共御座候得ば小歉饑大凶荒と御座候方か共被存候猶御勘辨奉希候

三十四頁表

知識在外識量在内愚意には總て内に在りと奉存候若果して知識が外に御座候はゞ格物窮理之功を積み候て致推極候知識も又外に御座候半歟

三十六頁裏

學果して濂洛關閩の説に原本仕候得ば漢唐陋劣之訓詁は決して用ひ難き所に御座候樣に覺え申候又其申分無之説は程朱といへども固より是に依られ申候授古今無訓孝字爲逆親訓忠字爲叛君者と被仰候得共是は何か爲にするの御説にても御座候や外々之御立論共大に相違仕候乍恐餘りあら過ぎ候御詞の樣に拜見仕候蓋一孝字を守り夫のみにて孝子にはなられ不申一忠字を守り夫ばかりにて忠臣とは成りがたく必其精微之蘊を究めて篤く是を行ひ然る後始めて忠臣とも孝子ともなる事を得候事にて但逆親叛君にてさへ無之候得ば最早忠孝と申には御座あるまじく且又毫釐千里之譬精義入神以致用之教も御座候得ば大いなる間違だに無之候得ば何にても事濟み候と申義は一圓合點參りかね候事に御座候

四十頁表

自察夜氣存否如何一體孟子之本意は夜氣が仁義之良心を存し候事と奉存候を只今夜氣存否と被仰候にてはすぐさま夜氣の存否に相成候樣聞え申候從來右之思召に御座候御事にや若孟子を其儘の尊意に御座候はゞ存否を清濁に御作り被成候ては如何候半や此段奉伺候

同　裏

不縱不束從容以養天和卽便敬也至極可然御事にも可有御座候得共拙者底拜見仕候所にては兎にも角にも高すぎ候て手の下し所に苅々困り果申候夫と申畢竟は學問の淺き故共可申候得共前に申上候程子の方に御座候得ば乍不及手も下され少々宛も力を得候樣奉存候抑高説之儘手の被下候所御座候はゞ何分に

も御提誨奉仰候

同

邦俗途遇柩時云々邦俗と御座候はゞ吾邦不殘の事に相成外國へ聞え候ても擧邦押竝て尾籠の風俗と被察如何と奉存候夫迚も實に左樣に候はゞ是も又餘岐も無き事に候得共先拙者の鄕里抔は一向右樣之事無御座候左候得ば是は此都下の風俗にも可有御座候やに奉存候乍去足跡關西に及ばぬ拙者之義に候得ば他國之義は委しくも不奉存候但邦俗の御字面は乍憚廣過ぎ候樣奉存候得ば只都下之俗の樣仰せなされ候て可然や奉伺候義に御座候

四十二頁裏

孟子之後千四百年にて周程その不傳の統を續がれ朱子に至りて其道始めて昭晰仕候事に候得ば功を以て論じ候節は朱子はいかにも周程にまさる事遠しと奉存候しかるを只今紫陽金谿及張呂雖有異同而其實皆純全道學と御稱し被成候得ば朱子と三子と全く同班の樣に聞え申候右にては乍憚朱子を被成御覽候事極めて卑く三子を御尊び被成候事極めて高しと申ものには無御座候や且皆

皆純全道學と被仰候事尤も不審

純全道學と被仰候事尤も不審に不堪奉存候凡そ天地之間兩是兩非は無之ものと承候朱子終身陸を排せられ張呂を惜まれ候事文集語類中一にして足らず候その排せられ惜まれ候が是に御座候はゞ三子は必ず非に極り候べく三子是に御座候はゞ朱子が亦非となり可申候然るを今皆純全の字を以て被仰候節は啻兩是兩非のみにあらずと奉存候猶奉伺度筋も御座候得ども一時に筆紙に申上盡し難く候得ば孰れ御閑暇を窺ひ候て委細は口上にて申上可否共に質問仕度奉願候扨右之通存念書付申上候事誠に以慊惕之次第には御座候得共仰を蒙り候義且紙端に申上候通り之所存に御座候故憚を不顧申上候無禮之段は何分にも御容恕被成下尙御誨敎被成下候はゞ千萬難有かるべく奉存候以上

五月二十日

天保五年十月十九日

〔七〕山寺源大夫に贈る

久々御疎濶經度霜氣日增相加候得共尊家大孺人奉初彌御淸福之御樣子常々北澤氏ゟ致承知欣喜仕候然ば先頃は御役替愛度奉存候右之御悅も早速可申陳之

藤田虎之助と申生に面會候所

南嘯物故誠に不勝悲痛

所兎角課業繁多意外之遅緩汗顔之至御座候乍去心中無他事義は御恕諒可被下候其後は委曲之御様子も不相伺定而實事上之御修業益々御進可被成と存候貴兄之義は一齋翁とも毎度致談話候翁も貴兄には致感心居候此間水戸藩藤田虎之助と申生に面會候所是も兼て貴兄之英名をば承知にて餘程之人才にて御出之由何か致拜顔度とて致渇仰居候是藤田生は彼勸農或問を書候人の子にて豪士に御座候小生先達而ゟ知面に相成折々致出會及經濟之談話候所大に面白御座候貴兄にも御目に掛度存居候扨兼ての料見には都下には定て人才も澤山可有之存候所存知之外尠き物に御座候因而は吾藩貴兄等之御座候をば大幸至極と存候益々御勉勵被成追々國家之大用に御當被成候様致期望候所に御座候將又秋間南嘯物故も承誠に不勝悲痛ことに御座候御同様□□に致往來共々助斯道終には□濟可有之存候所半途にて夭折致候事實に遺恨之極に御座候貴兄は未だ御許成されざる所も有之候得共亦南嘯如人物も無之候右故訃聞を承候より哀念兎角散兼候其砌祭文相認貴兄に御頼申南嘯之墓へ成共牌へ成共告申度文をば認候所其頃繁劇之校合物有之致清書且相願候も亦恐入候こと故致延引候所熟々考見候に共に知己之間に候へば苦も有之間敷且は南嘯も滿足可致小生之情を盡候にも相成候半と此度祭文清書仕御手元迄差上候間牌へ成とも墓成共乍御迷惑被枉玉趾御傳告被成下候様偏に奉希候兎ても只今迄及延引候事故何日にても宜候間何分共奉願候儀右衞門老人へ御逢被成候事も御座候はゞ乍憚小生云々申來候趣も御話被成下宜敷御慰被遣可被下候誠に老人夫婦氣之毒至極之事春中竹内之事と申又南嘯之事と申切に可憫之至極に御座候屬爲人作文倉卒申上候亂毫御海涵可被下候□寒爲國御多愛所禱に御座候以下不明

啓頓首

常山大兄几下

初冬十九日

〔八〕立田樂水に贈る

天保五年十月二十八日

秋來琴師を求得仁木三岳と申人

寒威酷敷御座候得共老先生御始闔府御壹是に御清福奉扑賀候小生不相替健在勤修仕候間幸に御降心可被下候先頃者接華簡殊に御次韻之佳作御示及被下乍毎度感吟不已候扨秋來琴師を求得時々往來仕候師者大朝塵下之致仕人にて仁

木三岳と申人に御座候心越禪師五世嫡傳之由尤活文師と同師にて倶に兒玉空
空と申人之門人之由甚奇緣に御座候此老小生之志篤に感じ何卒皆傳致度と申
事に而來春は大抵其訣を受可申候亦餘程名曲も多く以前學び候とは懸絶に御
座候唯恨不使君聽耳易者近頃如何定而御得所可多奉存候何分も眞實之見を以
御觀察御座候樣奉存候畢竟聞見之識者得處少き樣被存候一齋翁抔も仍聞見之
識に御座候右故乎聞々偏枯を覺申候翁さへ其病御座候得者其餘者實に不足論
被存候此聞彼占筮書補正校訂致居候何卒當年中に卒業致度候序者此度桐山先
生へも上申候御序も御座候者御覽可被下候乾海苔乍些少懸御目候御莞存被下
候者榮幸御座候先乍寒中御見舞早々申上候增寒御自玉專一と奉存候萬縷期春
便不具

來春は大抵其訣を受可申

易は眞實の見を以て觀察

古筮書補正校訂

天保六年二月七日

靜山君足下

臘月十八日　　啓再拜

〔九〕李左衛門に贈る　鳥羽氏なりと云

長野市　秋野太郎氏藏

絶て久敷無沙汰にて愧入申候春寒冤角退兼候得共御家內總て御障無之候や此
方幸に無事候間御安心可被下候扨舊臘も無盡の事に付段々御厄介被下候趣毋
方ゟ委曲申遣候乍毎度去年は別ても御苦勞被下千萬辱次第存候近日之內再會
合致候樣毋ゟ申遣候乍御大儀兩八田傳五郎共御相談被下宜樣に御取計賴入存
候吳々も賴入候去年中は又度々何ゟ之品共被下不淺辱存候先は此度賴之次第
旁早々申遣候餘寒折角御多愛候樣存候不具

無盡の事に付段々御厄介被下

兩八田傳五郎共御相談被下

二月七日　　啓之助

李左衛門殿

猶々此表用事之義も御座候はゞ無御遠慮御申被遣度候以上

書簡　浦町時代

自天保七年二月
至同　十年二月

天保七年四月五日

〔一〇〕八田嘉助に贈る

松代町　八田彦次郎氏藏

快晴には御座候得共兎角冷氣迷惑仕候昨日も烏渡相伺候所不奉得拜顏殘念奉存候此節書せんし二枚計入用御座候付町中所々詮義仕候得共御城下中には無之樣に御座候もし御手元に御所持被成御座候はゞ可相成は一枚にても宜候間御惠與被成下度奉願候何れ兩三日に登館萬可申上候先此段本公に囑し相願候不謹

初夏五日　　啓之助

嘉助樣

別紙烏渡申上度事御座候今日元之助殿御出御座候右は兼て辰三郎樣かも御賴有之又先頃義三郎殿も御出元殿素讀之義御賴御座候に付則致承知候處今日より元殿何分と申御出御座候然る處禮服にも無之又束脩之儀も無御座候尤今日は近思錄を御持參御座候右之錄者塾法にて素讀は不爲致候故其趣を申左氏傳を詮議被成若御藏書に無之候者明日より本をば御借し可申と申先

書簡　浦町時代（一〇）八田嘉助宛

今日は只御返し申候御宅之義者世之常ならず従來之御間に御座候故外人と違ひ枉て御取扱も致度存候得ごも第一禮法を學候初に一向禮式無御座熨斗一つ差出し候事も出來兼候樣にては甚迷惑仕候事に御座候何卒最初には禮服にて御出扇子一本にても態と賜候樣に仕度候御通家之間にて右を直に辰樣へ申候も憚候間何分貴兄ゟ元殿へ斯樣々々致候が世の禮法と申事を品能御訓導御座候樣に願度奉存候併右等之義尊大人の御耳に入候ては不宜候間御手一つにて可然御計可被成下候此も誠に申上兼候事には御座候得共不得已事申上候何分宜敷奉頼上候以上

天保七年四月九日か

菅逸太郎殿　其提灯を被蹴上

〔一一〕　○

長野市　新井義雄氏藏

朦々敷天氣御座候得共彌御安泰奉賀候然ば昨晩澤佳三郎北山安世宅へ參り夫ゟ荒町藥師へ致參詣候跡同人宅ゟ奴に提灯を爲持遣候其途中にて菅逸太郎殿其提灯を被蹴上げ夫から如何の譯に御座候や奴に提灯見せろと申奴の手をねぢり提灯を取り揚げ振回し柄を折損し被戻候よし餘り理不盡の次第と申勇記老人殊の外致立腹佳三郎に月番ゟ届に及べ抔申候樣今朝耳に入愚案には菅氏も昨日は藥師の緣日抔にて一杯たべ被過候故右之過失も御座候やと存候乍然士分之上に於ては酒興の申譯は立不申候間何とか手を入澤氏のなごみ候樣の手談有之度内々立田氏へ右之義申遣候所又内々別紙之趣挨拶御座候右に付無餘岐入御耳候御合印も御座候物を足にかけ候と申ては表向ては濟兼候義と奉存候私も承候義なれば何とか内々にて事濟候樣仕度候故此段申上候尤立田ゟ別紙申遣候と申事は不申上筈の義に候得ば此は御沙汰なしに願度候先用向而已草々以上

内々にて事濟候樣仕度

四月九日

天保七年十一月十八日の一

〔一二〕　八田嘉右衞門に贈る

松代町　八田彦次郎氏藏

過時者屢拜顏歡喜之至扨御勝手方ゟ御勇斷御取計御座候樣に申候處委細承知にて先無巨細先日職方にて取しらべ候分ゟり只今迄之通御賑粥御座候御樣子に御座候假令寺内等異存御座候ても此度は隨分存念被決候樣に見承申候併其

（寺内多宮）

なり。町奉行郡奉行兼帯）

內御家中長屋近在も御座候に付兎ても最初より純熟いたし立派の事は出來かね候義に付盥札の所も今度は町方職方無辨別總て御手一つにて粥被下場の盥札に致方可然と申事も被申候先其御心構も御座候樣奉存候御勝手方は明日なも直に始度樣にも被申候又何れ郡方より何とか申通可有御座候先爲御心得匆々申上候以上

十八日

（菅沼九兵衞なり職奉行）

猶々寺內にて大寄合御座候由承候何如之事評議いたし候や菅九も參候由何とか果敢々々敗方付候樣に仕度候乍去夫は如何共御勝手方之決斷不折候得ば夫にて事濟候義に御座候

伊勢街樣

天保七年十一月十八日の二

三八

（一三）八田嘉右衞門に贈る

松代町　八田彦次郎氏藏

啓　作

小白色々に相成大に御手數に相なり候やも難計奉察上候是と申も無據事御座候

座候

過刻盥札之義者御手元粥被下場之物に可相成樣に申上候所八時過に寺內寄合決果御家中長屋之分も不殘御目付演說有之姿之所立派に相成可申に付又職方町方之盥札可然に定候由菅沼之話に御座候先刻申上候付其御構御座候と不宜候間先此段申上候定而最早御承知にも可有御座候彌明日盥札相渡り明後日唯今迄之通御手にて粥被下に相成候先大慶不過之奉存候取込緊要のみ匆々

唯今迄の通御手にて粥被下に相成候

十八日

啓之助

天保七年十二月廿八日か

（一四）八田嘉助に贈る

松代町　八田彦次郎氏藏

夜前は大雪御座候處今日は少々暖氣春信を催候樣に被存候今日御殿にて昨日諏訪の宮の義も大略承知仕候處大群の由嘸々御手數と奉察上候扨申上兼候得共少々御無心御座候歲晩ちと氣力を引立度一杯の用意仕候所唯白水に少計酒氣御座候位にて一向つまらず迷惑仕候右に付餘り恐入候得ごも毎度致頂戴候

歲晩ちと氣力を引立度

生片白一升

彼水を不加生片白を一升被仰付被下度奉希候何分所祈御座候代銀壹朱差上候
爲御取納可被下候最早餘日も無御座候萬縷來陽目出度可申述候匆々頓首

臘月念八日

嘉助　様

啓之助

〔一五〕八田嘉助に贈る

天保七年か

集古帖何卒四五日拝借玩覧仕度

好快晴人意に協候事御座候此間は拝眉大慶奉存候其節爲御見可被成下被仰候
集古帖何卒四五日拝借玩覧仕度奉希候尤御珍藏之品に御座候間決而長留は不
仕候可相成は此者に御附可被成下候千萬望之

十三日

再白此間罷出候節第一に可相伺事を失念仕候先頃御近所に罷在候勘左衛門
女房之弟文平拙宅へ參り頼候には喜兵衛殿は御承知も可有之思召候やにも
存られ候乍然右御長屋は伊勢町様之御普請に御座候故何か私體にては萬端
粗相之栖居方も可致やと申御案じも御座候か伊勢町様にては御不承知御座
候右之所之御心元なく思召候て之義御座候ば夫をば如何様にも念を入栖荒
し候等之事は仕間敷候間何卒私に御内意を相伺呉候様に頼候私が何もしゐ
て願と申義には御座なく候得ごも被頼候事に付一應相伺候右も鳥渡貴答被
成下度候以上

八田　様

啓之助

〔一六〕八田嘉助に贈る

天保八年八月廿一日

今日上田より兩人客來

松代町　八田彦次郎氏藏

祭禮あやにく雨天散々御座候唯今尊大人に御目に懸り御話を申候今日上田よ
り兩人客來宅は御存じの手狹に付今夕御宅に御留被成下度奉願候兩人共讀書
生に御座候間萬端心安き人物に御座候尊大人も御承知候間馬濟次第同伴仕度
候何分所祈御座候

廿一日

嘉助　様

啓之助

天保八年九月十五日か

〔一七〕八田嘉助に贈る

松代町　八田彦次郎氏藏

無幻の草書

兎角轡陶敷天氣御不快者如何漸々御全快御座候也先日御話申候無幻草書見出し候間奉差上候貴意に協候者永御留置可被下候餘期面叙

九月望

嘉助様

啓之助

天保八年十月三十日

〔一八〕林修庵に贈る

秋中は態々御來訪被下

再白加藤竹内二君へも乍憚御致意奉希候以上

啓啓追日霜威相增候得共尊家倍御多祥被成御興居欣喜不過之候賤門如昨健在幸に御省慮被下度候扨秋中は態々御來訪被下候所貧家草□諸事失敬勝甚不堪悚恐候併寛々御清話是は大慶仕候爾後屢御手敎一々落手御懇謝愧入候次第御座候且拙生出都之樣子每度御尋被下多感奉謝候右行止相分次第御挨拶可申と存日を渉候內不覺數句疎慢之罪難逭恐入候漸近日來彌出都可致樣內意を受明

近日來彌出都可致樣內意を受

朔日表向願書差出候手順に相成候に付先此段爲御知申候併返々挨拶遲緩之處御海容蒙度候就右は願之通被申付次第來月末發軔も致度心得御座候何れ其節は鳥渡登門拜別致度奉存候御手敎中何か御用又々御來過も可被下と被仰下候得共拙生登館之節にて相辨候義に御座候はゞ其節承命可申候若又右にて不相辨候事に御座候はゞ來月中旬迄御一過可被下や近日御所見如何定て御新得も可有御座不勝企翹候拙生碌々每度愧入候乍去猶一二有可拜聞者萬拜面之上可悉所懷也忙中簡要のみ匆々申縮候惟冀千萬自重

天保八年十一月十二日

修庵　林君　足下

啓　頓首

陽月晦

小啓家母へも如命申聞候所宜敷生より致御挨拶候樣申出候立田氏同樣御座候是も又々得拜話度迄渴饑之樣子御座候以上

〔一九〕林修庵に贈る

先日呈書□□已達左右可申候時氣增寒候得共愈御清適被成御勤學候や前書云

書簡　浦町時代　（一八）林修庵宛

彼加藤生一條右之仕合故不得已事彌斷に及候と申義

云之通出都之願差出候處今以命も無之候得ごも不日允を得可申候右に付簡要之義を塵務に被攪前書に致失念候に付今便貴兄迄申上候彼加藤生一條右之仕合故不得已事彌斷に及候と申義を何分にも活文師へ御致意被下度候且加藤の方へも御序御座候はゞ不忘御申可被下候乍御煩聒千萬所冀御座候

御來過可被下と申御事は如何彌左樣の高意に御座候はゞ大雪等無之間に御一遊可被下候今度は兩三日も御話被成候樣仕度候是亦所冀御座候急便に付不能多書都留面悉不謹

大輝仁兄　梧右　　啓　頓首

復月十二日夜

小白近日立田子存之囑にて小詩を作候錄呈取唉

松

森々百丈松。惜是委二樵者一。若被二匠師知一。爲レ君負二大厦一。

竹

瀟洒宜二風月一。清齋耐二雪霜一。截爲二蕭史簡一。可レ以引二鸞鳳一。

梅

天下無雙品。含章未レ見レ珍。誰知冰雪際。已兆二後年春一。

〔二〇〕藩老に呈す

天保八年十二月二日

御學政無御座候所にては名世の大儒御座候ても格別之功は無覺束

東京市　宮本仲氏藏

御内々申上候口上書取

當五月中御學政之義申上候處書取差出候樣御座候に付大略認取奉入御覽尙又別帋に去春江戸表ゟ罷歸候以後晝夜無隙素讀會讀輪講等之世話仕候故自己の修行果敢取兼迷惑仕候得共御國家之御利益御家中の爲に多分相成候筋にも御座候者自身者此儘朽果候共聊怨無御座候所にては名世の大儒御座候ても格別之功は無覺束ましく共當時御學政無御座候所にては名世の大儒御座候ても格別之功は無覺束まし

て私底之淺陋にて御國家御治本之御爲抔申義存じも不寄事併只今にても御學政だに興り候者御法制に依て事を計ひ御上之御威德を奉仰先賢之規則に從ひ候はゞ不出數年御家中之風誼一變可仕に付御學政の愚計書取申上候併私之菲德固陋衆人之信向も無之所にては容易に御取用御學政之御用等難被仰付被思

九月中何れ修行出府之方御許容可被成下御内意被成下候に付

召候半も實以御尤至極奉存候右に付早速御學政御手始も無御座御様子被爲在候はゞ前條も申上候通當節之場私之微力を盡候迚益も不見へ又私無御座候迚御事も欠不申月並講釋素讀指南等は誰にても御問に合可申候候得者迚もの御厚恩を以又々出府仕此上五七年自己の修業專一に仕候義を御許容被成下修業も大抵成就仕年齢も長じ候上御取用被成下置候様奉願候然る處九月中何れ修行出府之方御許容可被成下御内意被成下候に付去月朔日願書差出し被仰付之程相待罷在候所外同日願書差出候面々は不殘被仰付兼て御内意迄をも被成下候私一人今以不被仰付候右之御様子如何之御義か不奉存候得共竊に心配仕候薄々世間之風説承候所此度啓之助之御家中子弟の世話を相停め修業出府奉願候義は全く一己の名利を求候爲に候得ば出府御差留に相成候様仕度と申立候族も御座候哉に承り及候其實否貞ならず候得共實に左様之義も有之萬一御上之御疑を蒙候義も御座候はゞ誠以恐入候義と奉存候又御内々奉申上候數代御厚恩を蒙り御奉公仕候者御國家之御爲を不奉存一己の利欲を貪候事は夷狄禽獸之所爲と申ものに御座候是等の義は無學無術之者と雖も少々見識御座候者は決て無之事と奉存候私義

淺學固陋には御座候得共日夜朝暮孔孟程朱之正學に志し少々宛も子弟へ教導仕候者此様之鄙心可有之筈も無御座候右を名利に志候と見受候者是は全私之心事を承知不仕故之義と奉存候私の心事別義にも無御座御學政之義は御國家之御治本にて一日も無之ては不叶御儀と申上候所御上之御趣意と相違仕候にも無御座又聖賢之遺法に依り申上候條々當今之世と不相當と申にも無御座候て修行の方之御内意被成下候義は申上候通全く私之菲德淺學衆人之信向も無御座候所にては御用も難被仰付行々老錬仕候上御學政之御用向も可被仰付と思召被下置候御儀と奉存候右に付候ては彌以宿願之通御厚恩を以五七年專ら修行を加へ度其内には天下之公評も可有御座御家中の人望も附可申候其節に相成り御學政之義被仰出右御用向被仰付被下置候はゞ諸般之義當節より十倍手易く相調可申候左候ば私出府後暫之内質問等仕候門人十數輩迷惑仕候得共素讀指南は誰にても無差支段前に申上候是は誠に聊之義向來御治本之相立候大事に比較仕候得ば本より數ふるにも不足義と奉存候右之次第に御座候得ば乍恐御上にて暫之内御用をも不被仰付御内々御手充等被成下被差置事私へ御私惠を御施し被成下候

には無御座行々大に御用に御使被成下候半爲めの御事にて又私義之暫之内御用を不相勤御手充等頂戴仕罷在候義私一己の榮利を貪には無御座行々乍不及大に御用相勤度志願に御座候左候得ば此度之修行出府願一條上下に於て聊にても私事に渉候事無御座誠に公明正大事理明白之義と奉存候何卒右之所御了察被成下早速願筋被仰付被下置候樣御執成奉賴候此段御內々申上候以上

十二月二日　　佐久間啓之助

書添奉申上候已に如本書申上置又々箇樣申上候ば內實は私欲之爲かと被思召候半も恐入候得共先一通申上候私祖々父三左衞門浪人仕罷在候處新知百石被下置被召出候然る所同人孫岩之進幼少にて死去仕候付家斷絶仕候其節隱居仕罷在候右三左衞門老年迄長く御奉公仕候付御不便に被思召五人御扶持隱居へ被下置候是へ私之祖父彥兵衞を養子仕家名を相續爲仕候此彥兵衞代に御切米金五兩頂戴仕候御家中御宛行私か小給之者も御座候に右樣申上候は如何之義に御座候得共百年前迄は世の中質素にて諸物價も甚下直に御座候得ば小給にても家內扶助出來候事と奉存候其後追々世上事多に罷成物價も何に不寄高直に相成候故最早小給之者は文武を廢し四ッ手釣竿等に日を送り又は傘を張候とか笠を縫候とか申樣內職不仕候ては家內衣食仕候事だに出來兼候樣相成候然る處私義父一學之敎育を以成長仕候得共從來四ッ手釣等は不案內にて外內職等何一つ出來候義無之右故家督後も種々之手談を以只今迄取續き候事に御座候此以後之處唯便々子供之素讀指南劍槍之敎授等仕罷在候ては行々手詰に罷成御奉公筋等も難相勤躰に成行候半も難計又妻等迎扶助仕候手充も無御座假令妻等扶助仕行末子孫御座候ても樣々之內職等に被追文武に不鍛鍊之ゑせ者のみにては子孫御座候共難申又其間稀に才智ある者出候ても大抵祿を以御用をも被仰付候御振合に御座候得ば其才智を顯し候事不叶亡父一學始め才力之處格段卓絶と申に有御座間敷候得共又尋常之人にても無御座其表裏內外一徹にて無僞之所に至り候ては有名古人にも劣り申間敷と奉存候依て老年に及び御側御祐筆等被仰付候得共亦格段之御用をも不被仰付遂に世に大功をも不遺相果候是皆小給之不幸と申ものに御座候有斐錄中にて覺へ申候或人備前少將へ官位の御望御座候てはと申候所官位には望無之高ならば少しも多く頂戴

致し夫れ丈之御奉公を公儀へ申度と御申被成候よし私に於候ても毛頭一己の安逸之爲に望候には無御座只何卒子孫迄一騎前之御奉公出來候樣罷成度志願御座候得共是亦當節不容易併格別之勤苦を以天下之人に被數候樣罷成候者又御上之御明鑒も被爲在候義遂には內願相叶候事も可有御座や但當節之場冤角申上候は却て恐多き事に御座候得ば此義は暫不奉申上候併當節小給貧困之故を以當惑仕候義に御座候此度之願筋不被仰付候ては彌以當惑仕候義に御座候午去此又偏に私之爲にては無御座御上へ奉對當惑仕候義に御座候其子細は私之住宅祖父之代大風にて吹倒候以來其倒屋取崩候材木を以至て手狹に暫小屋掛に致置其內普請も仕度心底之處小給之御宛行には罷成其義も不相叶其儘七十ヶ年も居住仕候に付最早手の入樣も無之曲りゆがみ風雨之節は布物を上げ置候體に御座候右之處へ御近領は勿論遠國之者も追々賤名を承傳へ月々の如く相尋候餘り見惡敷底を見せ候も氣の毒至極に御座候私民間之者にて御厚恩をも頂戴不仕事に御座候得ば貧は士の常却て面白御座候得共御奉公を仕候自分且少々も御家中文學の世話をも仕候者にて右樣之次第にては御上を辱しめ奉り候義と奉存候是當惑之一つに御座候其上上田松本御家中ゟも內弟子被相賴候得共住宅見惡敷のみならず手狹に御座候得ば兩人と差置候事難仕其上先達て鳥渡御耳にも入置候美濃ゟ隨身仕度と申參候書生抔も扶持方等餘力無御座候故無餘岐玄道門人と申ものに仕同人塾に差置私方に通ひに參候仕合右樣遠方ゟ當御家中へ參候と申は御上の御外聞にも御座候得ば永く無御座候ても暫之內は差置候樣に無御座候ては十萬石之御上を奉辱候義と奉存候是當惑之二つに御座候右之次第にて御座候得ば世間ゟ見受候所私之貧困に差詰り修行出府等奉願候樣に御座候得共深く推究候得ば御上之御委合にも私之出府仕候方宜敷可有御座と奉存候此等之所も何分共御亮察被成下願筋被仰付被下置候樣御執成之程奉賴候以上

十二月二日

天保八年十二月三十日

〔三〕八田嘉右衞門に贈る

松代町　八田彥次郎氏藏

御事多之御中昨日も蒙尊來今朝も亦去年末御賑粥之義に付微力有之付此度御

褒奨御蒙被成候御喜悦之餘自何之品御投與被成被下千萬忝仕合幾久敷拜受仕候併歳杪御紛冗之御中箇樣被懸御念頭候段奉痛入候義に御座候都て永陽登館御禮可申盡候先奉謝而已匆々不宣

除日

嘉右衞門樣

〔三三〕山寺源大夫に贈る

天保九年四月六日　　東京市　鹽野季彦氏藏

首文蠹蝕不明不堪仕合所を深御咎も不被下早春は懇々之御手書被成下御事多之御中歳敬を賜り其上又精製之珍品御投□被成下誠に感愧兼集候義唯心謝仕而已御座候早速右御禮も可申上之處例之疎懶而已ならず兎角朝暮童輩之爲に能被煩閑日も稀に御座候故又々不法を重ね慚悚仕候偖先漸々暖氣相成候尊家總而御多祥御座候や丙郎も定て長大に御成候半と奉存候母抔も時々御想像いたし候事御座候弊門幸に無事乍憚御降念被成下度候扨只今迄闕打過候得共鎌先生靜山等之許にて毎々御樣子承候所不相替公務も御繁劇之御中に能御看書御著作等も不被廢候よし流石之御事と竊に欽歎仕候不佞も碌々と只今之儘にて老死致候半も殘念之至候故御耳に入候通舊冬中ゟ東遊を謀候所今以不得允當惑仕罷在候鼎力を以所願を得候樣之事御座候得者誠萬幸御座候御機會も御座候はゞ又何分宜敷奉希候其表格別之俊傑に御出會被成候義は無御座候や草堂へもよく折々遊歷之書生來問致し候得共別ても遊歷生抔は未熟者に多分御座候近日惠明寺へ長崎之僧と稱し一人參候號は末山と申候所擧藩頗賞賛致候不佞も最初其風聞承候得共方外之事には有之其上甚之大言家の樣に聞へ候故當節流行之まやかし物と存面會も不致居候所矢澤大熊二公も風聞にては餘程之英邁之樣候間達て逢候樣に御座候故其日直に相訪候所果して案の通りに御座候唯詩のみは頗達者に作り申候夫を恃み俗輩を呵し候故文盲之愚物はだまされ候事と見へ申候靜山熊三抔は度々致參會候我輩へ對候ては大言は出で不申却て此方より大に占附遣候事御座候出會之節は必詩有之候一兩首錄し電矚を瀆し候御一粲所希御座候

舊冬中より東遊を謀候所今以不得允

近日惠明寺へ長崎の僧と稱し一人參候號は末山と申候

我輩へ對候ては大言は出で不申

般若寺逢長崎僧末山

宿痾新愈心特澄。醉餘吟興晩堪乘。溪邊偶此過蕭寺。松裏不圖逢異僧。

春夜殊憐花影重。巖房最好月明昇。茲情方外能無厭。他日攜琴更一登。啓

目擊道存心自澄。夜遊秉燭興堪乘。彈琴偶對杏墳客。衣納愧非蓮社僧。

駿骨千金風外晒。蚌珠數顆月明昇。淹留幾日耐岑寂。山舍重期謝屐登。末山

再訪末山用元韻二首

暮春天氣亦清澄。行樂悠悠風耐乘。素手浴蠶溪畔女。龐眉語客石橋僧。

數峯晴日潭光動。一徑花林香霧昇。忽憶山門曾結約。松閒拖杖此重登。

境幽溪淀與神澄。顧眄徘徊興自乘。長嘯已驚巢上鶴。朗吟復起定中僧。

雲階蘭臭隨風遠。石竈茶煙隔竹昇。半日清閑吾事足。曹谿勝地未思登。啓

此兩首は次韻無之候

巴調にて不勝赧顏候近日承候得ば群盲ども種々浮說を造し此度之和尙は誠之豪傑にて唐山へも內々參り候よしにて佐久間抔大に被取占音も出し不得抔紛々申觸し候よし承り不覺失唆致候が是にて不俟群小に未被信所合點仕大に益を得申候最初東都再遊之含も去夏中申立候御學政も不如意其御學政之立兼候根元は不俟の衆人に不被信之所致候得ば何卒五七年都下に外宅いたし世の公評を以衆の信向も付候場にて御學政をも成就仕度唯今之所にては鎌先生と尊兄を除候ては不俟の學術文章ごの位のものやら一向に存じ吳候もの無御座候右之所にては御上御執政衆方にも申立候御學政之義抔御不安心に被思召候も至極之御尤と奉存候左樣なれば公私共暫東遊仕候方便利不過之奉存候御學政も不相立候所にては五七年不俟不罷在候ても左迄事も欠不申候公評も宜敷信向も付候所にて事を計ひ候はゞ五七年の債は暫時に償可申候得ば何卒一つ御勘辨被成下良策も御座候はゞ尊諭を蒙度奉冀候何共被仰付も餘りに御延引にて最早五ヶ月に及ぬ誠に迷惑仕候何分一御手談所冀御座候昨夜之成澤抔之出立をも時晝後に承り書狀認度存候所此節劍槍門人も七八人爲申合半日宛參候ては稽古仕候昨日も其日にて取込候故遂書簡も認不得成澤の休息中も鳥渡相尋尊兄之御樣子始め承度心得之所兔角世話敷不得一面發足に相成殘念奉存候御面話之次同氏へも宜奉希候今日得少閑此帋認候所へ又々質問之生兩三輩見へ候間不盡所欲言惟爲國時氣折角御厭可被成候頓首

四月六日

山寺尊兄　足下

再白王母君尊嫂前乍憚宜敷御致意奉希候桑皮紙三刀送上仕候莞存爲幸

啓　再拜

〔二三〕山寺源大夫に贈る

天保九年六月

（山寺は天保八年五月より同十一年まで定府）

盛暑之時節闔府倍御多祥奉扑賀候然者先達は相願候筆墨共酒代等御送被成下千萬難有奉感謝候定めて御承知も可被下候小生も閏四月中御内御用を帶し北越へ罷越し存外手間取れ漸先月小盡著右故早速御禮も不申上失儀致候御諒恕所祈御座候扨北越何も格別可致以聞事も無之唯新發田御内諸事手厚には致感心候就中學政之樣子も略承候所純精之程朱學にて聊も致背反候ものは異學之徒と致し夫に罰も御座候よし誠に不堪感嘆事御座候扨又此度越地は大抵東西を極めと候得共是と申豪傑に出會不申是には力を落し申候取唉のため途中之作一兩首瀆電矚候

漸先月小盡著

越地は大抵東西を極めと候得共是と申豪傑に出會不申

自二村松濱一至二乙寺一道傍盡松林。得二三絶句一

青松億萬株。十里結二條枚一。不レ識林中樹。幾是棟梁材。

青松億萬株。十里垂二清蔭一。縱有二棟梁材一。工師不レ勝レ任。

青松億萬株。工師點檢過。點檢誠云至。奈レ無二良材一何。

先如此御座候乍然御他見被下候ては迷惑御覽後直に御炒捨被下度候此二枚は新潟邊にて筆草と申もの候て書家のよく用ひ候物に御座候御慰に入御覽候今晚菅沼出立に付兼ての御禮暑中拜候旁呈亂毫候伏惟爲國千萬保重

啓　拜呈

常山老兄　梧右

小白折角御苦惱被下候を左樣申候も如何に候得共協和墨は七兩なれば幾丁にても善光寺にて被調候聊之事には候得共私の用候にも無御座候に付御都合に相成候はゞ御返し被成下度候尤御不都合に御座候はゞ如何にても宜敷御座候

〔二四〕山寺源大夫に贈る

天保九年六月廿八日

書簡　浦町時代　(二四)山寺源大夫宛

藩主の松代城着をさす　山寺は此時江戸に在り

廿六日益御機嫌克御歸城御同前奉恭賀候菅沼生來得芳翰就て不順之時候候得共彌御佳勝之狀詳之不堪欣慰候北遊紀行之義蒙御尋多謝乍然近來世間一統紀行ばやりにて犬も猿もよく書出し候事誠に無益殊に開雕等致し候事は唯棗梨之災と笑止に存候右故此度抔も紀行は頓と無之唯折に觸致發出候蕪詩三四十首御座候尊囑に供するには足不申候得共五六首錄し呈覽仕候宜敷御雌黃可被成下候澡泉錄航湖紀勝梓行之趣被仰下候澡泉錄は未見紀勝は先達靜山之許にて見懸候て六七頁看過候所是と申警策も見當り不申長孺之序に至りては大不調ひ散々と存候長野生題詞之方は此ゟよし乍去讀候節は靜山共所々不滿を申候樣覺へ候が經程候故失念仕候但君不見之三字全く剩了にて不當法刪去儘可と申事は致記得居候故申上候高明不識何似

筆墨賣約歸納御落手奉冀候

呻吟語摘理學全書中には無之右は此度御購得御座候や不勝欽美候純然たる朱學にて讀書錄ゟ些と氣力御座候樣御評判被仰下頗大眼と歎服仕候僕も愛日樓寓居之節語錄をば倉々讀過粗覺へ居候事も御座候が隨分着實なるものには候得共僕に於ては純粹之字は下し兼不申候人品に於ても薛敬軒には上座を讓り可申存候尙乞敎

(本ノマヽ)

曖翁月次講義始り御聽聞洒候は大心服老兄は依舊是亦嘆服にて扨章句□句之說ゟ外新說無之異學之弊も先無之樣相見へ候付放念可致段被仰下奉謝候乍然如此なれば彌不滿仕候蓋彼翁之得處は徐姚にて程朱之說には不甚深(もし深ければ異學には流れ不申)依之天下を易んと欲する所は徐姚之學也而して藩邸にては朱義のみにて講義候事所謂以所賤事親也是僕之不滿なる所以に御座候御序も御座候はゞ啓之助は適樣申候と曖翁へ御質被下度候翁其以爲如何

彼翁之得處は餘姚にて程朱之說には不甚深

言行錄御會讀きつく妙

言行錄御會讀きつく妙不相成樣專一也と是近日之致自省處に御座候

貴號懼堂と被成度よしにて拙文を被徵候得共

貴號懼堂と被成度よしにて拙文を被徵候得共久敷作文相廢し候故奉辭度候得共老兄之命也何とか致起草敎を乞可申候先は貴酬而已布字如此唯折角時候御厭可被成候王母君尊嫂前乍憚宜敷御致意奉希候頓首

廿八日認

啓　再拜

書簡　浦町時代　（二五）八田嘉助宛

懼堂老兄　梧下

松代町　八田彦次郎氏藏

〔二五〕　八田嘉助に贈る

天保九年九月十日か

朶雲拜見仕候如來教追日冷氣相增候得共倍御平康奉賀候扨御珍藏之御品長々拜借難有奉謝候依命乃返璧仕候御落手可被成下候近日も心を用ひ手を入候に付調子も大抵に調ひ申候右にて音も初よりは餘程高く相聞候今夕松山町（松山町は八田氏の親戚岡野氏を指す）御飾付至極面白御事と奉存候命も御座候はゞ其節一曲可仕候先奉復迄如此布字不謹

調子も大抵に調ひ申候

十日

嘉助　様

啓之助

〔二六〕　山寺源大夫に贈る

天保九年十月廿一日

長野市　和田榮二氏藏

其後者御疎闊悚惕之至御座候近日本月六日發の御手書忽然落座難有拜見仕候處御誨問御稠重感愧兼集候殊に母方へ何〻の佳味御垂惠被成下千萬難有感銘之深何日忘之乍然奉痛入候義母も宜敷御禮申上候扨又寒氣之節官況御淸裕貴眷御安和欣慰不過之候小生義も不相替奉母健在仕候間幸御降心可被成下候

近來琴書一部致浙著候

黃氏の琴事に係り候一篇御抄出御示下是亦多感近來琴書一部致拙著候が早速其内に補入可仕難有奉存候御承知之通琴家は彼我共風韻を專と致し候事故蕭散閑遠之致を宗とし音律の事は多分粗略に致候今之世古樂之彷彿を可窺もの琴に踰候は無之候所夫を唯風流家の玩物に致置候事遺憾に候故管子之絃度淮南子司馬氏之樂書等祖述致し原體聲律度調理致訣記之十門を分ち編次仕候得共僻境書に乏敷意に不滿事勝に御座候併校正之上淨寫いたし候はゞ可供電矚候此節宗岳李文謝黃諸子之集御揃のよし可羨々々定て右等に仍て眞實之御得處可有御座奉存候

朋黨の說

朋黨之說云々御說破之趣被仰下御卓見と感心仕候しかし朋黨之起るは君之不明に有りとの高論に御座候得共愚見には左樣而已には無之朋黨之故に君を不明に致し候事も往々其例不少候左候得ば實に歐公所謂君子眞朋之外小人之僞朋をば打破仕度事と奉存候愚見如此尙俟高論

書　簡　浦町時代　（二六）山寺源大夫宛

言行錄御會業不絕御座候由其時々名論も不少候半と不堪企仰候矢恩兩公會業之義御尋御座候が恩氏にも其後暫く中絕矢氏には從來會業は無之候此節も大學或問幷周子之大極圖說を差越置候大學或問は治道之大體を益合點被致候爲め大極圖說は佛學之末弊を追々拂盡し天理之本原を愷に被見付候爲の手談也想に迂闊至極と致失笑候人も可有之候夫は意とする所にあらず

（矢恩は藩老矢澤監物同恩田頼母）

息惰を興起の論申上候樣御座候得共是亦吾同病に御座候近來熟々左樣存候息惰も忠信ならざる所より起ると右に付候ても傳習以忠信爲本之說極めて妙と奉存候乍然忠信と不忠信とは自己の疾痛自己知他人之如何共すべからざる事と奉存候

牛渚先生幷諸友へ之御致意畏候先生不相替勉強家にて近日孫子類腴國字解管子弟子職國字解致出來候吾輩愧入事に御座候

（牛渚先生は鎌原桐山を指す）

劍槍御覽候ひしかごも試翦三組可也出來申候此節御尋人數は厘々拾餘人にて候不斷八九輩哺時より出掛申候手開潰れ迷惑には存候得共先無由斷出張候義に御座候其表亦何分開暇には常田兄抔御談じ少々宛も被行候樣奉望候北澤兄も

不斷八九輩哺時より出掛申候

志御座候て小生在府中形等も被覺候間何卒御相談御一振被下度候欲言處多々有之候得共書不盡意餘は後信可申上候追日向寒千萬爲國保重

常山盟兄　梧右

十月念一

〔二七〕金子丈助中俣左吉に贈る

丈助は雪庵と號し書に巧なり當時郡奉行を勤む

左吉は砲術家當時側役を勤む望月甚三郎は劍道師範家此の事により十二月に至り藩より咎めを受けたり

龍田は立田樂水

天保九年十一月廿九日

再白過月は墨價御擲返慥に落手仕候御手數之義奉多謝候右御挨拶遲延之譯は龍田よりも可申上候が大過失無痛咎是幸也

啓　拜復

松代町　中俣兼雄氏藏

寒中之名而已不例之嫩寒に御座候彌御多祥被成御起居候耶奉伺候然ば小生義も散々不快罷在四五日籠居仕候其間薄々承候得ば兼て風聞仕候望月甚三理不盡之願筋一條にて（此は定て御兩所樣にも御聞及被成候半例之御覽一覽之節私共方々先に出度と申事也）武藝掛木工殿差扣被相伺右之願通に御沙汰御座候哉之よし其樣子を承候得ば唯今迄御覽一覽之節御目付より之伺狀に

と御座候所亡父死去後は矢島先生をば名面書にも除き候て差出候是は亡父之
致し來りにて亡父存命中といへどもも亡父出席之節は矢島源二左衞門門弟と認
め出席不致節は矢島先生之名前は無之候其子細は御兩所樣始め從來は矢島の
御門下に御座候得共先生沒後亡父へ御誓詞御座候上は矢張亡父之御門人に相
違無御座候得ば亡父は如此仕候事御座候右之義を承罷在候故亡父沒後は矢島
先生之名認候事無之又亡父之例を用ひ私出席仕候節は一學門弟之一筆を加へ
私出席不仕節は私一人之名を記し候而已御座候然る所此度望月方夫を幸之事
と致し今度矢島源二左衞門行司之申立致し以來者御覽一覽之節私共方より先
と被仰出も御座候哉のよし其根元之起る所を略承候得ば望月方にて申候には
私共方之稽古は矢島之嫡傳には無之候得ば嫡傳に無之
方をば跡に推屈め嫡傳之者先に立候と申主意之由よしや私共方矢島の嫡傳に

佐久間一學
佐久間啓之助
右門弟

無之共三十年前之文化五に御屆に及候師範より假令嫡傳たりとも此程申立候
行司之方先に立と申義は百萬有之間敷又其上望月之嫡傳と申義は唯今迄承も
不及候亡父義に於ては實に寬政九巳之三月矢島先生より門弟中事理比類之者
無之よしを以印可被致當流極祕之日本一之太刀清淨靈劍を授り後進之士を被
令敎授且又卜傳先師より之統々を致手書其末に亡父之姓名を書連ね被傳候一
卷御座候上は亡父矢島の嫡傳たる事天日の如く明白なる義と奉存候小生義も
亡父在命中御同門へ御相談申候所御異議も不被下右極祕皆傳仕亡父沒後及御
屆候上は當流の正統たる事是亦無疑事と奉存候右を如何なる間違にてか風聞
之被仰出御座候や不審至極に御座候兼て亡父より承居候が淸洲町御用屋敷御
造立之砌御兩所樣にて矢島之行司を被仰立右御稽古所御拜借有之御相弟子稽
古御座候所亡父道場を開き候に及び其段御屆御座候て私共方へ御引亡父之御
指南を御受被成候よし彌左樣に御座候ば昔にてすら矢島之行司名目は御兩所
樣之外には有御座間敷乍去唯今と相成私方正統聯綿と致居候所にては假令御
兩所樣並の矢島之直門御座候て矢島之行司申立候共私共方之先に立候事は決

して相成間敷まして矢島先生之顔色之赤いも白いも見知らぬ甚三が其行司申立候も奇怪至極其上私共方之上に立候抔誠に言語道斷之義と奉存候且又亡父義は道場相開き候砌卜傳流既に中絶にも可及之所厚心掛致出精門弟取立稽古相募候由御書付を以て御目錄致拜領候義も御座候是は定て御兩所樣にも逐一御承知之義奉存候如此亡父義は廢を興し絶を繼ぎ流義に取候ても大功有之又嫡傳に相違も無御座候を望月等黑白を混亂致し是非を反覆致し御上を奉欺右等之不法を企て候事以之外之義と奉存候右を其儘に捨置彌望月之跡に就候ては當流正統之瑕疵のみか亡父迄之大恥辱且又太陽之下かゝる魑魅魍魎有之候ては決して不相濟事御座候得ば小生不快快方次第早速御掛りへ相伺否承糺し彌風聞仕候に相違無御座候はゞ再三再四理解及言上可申左樣致候はゞ御上も御英明に被爲在執政大臣も賢能に御座候得ば萬に萬先規之通可相成候得共事には變と申物も有之候得ば小生之主意通兼候時節も可有之候其節は又其覺悟御座候何れにも先條申上候御兩所樣にて矢島之行司御稽古をば私共方へ御引亡父之御指南を御受被成候と申義は亡父之言葉に相違無御座候や果して相違も無御座候ば此段後證にも相成候に付其手續き之所乍御面倒御兩所樣より御連名之御書答被成下度候病中愚意之所荒增申上候尙無御腹藏御敎示可被成下候以上

十一月廿九日

丈助樣

佐吉樣

修理

小啓乍然此義唯風聞而已にて突留候事には無御座候間先極祕に被成下度候

御兩所樣

修理

天保九年か

〔二八〕八田嘉助に贈る

松代町　八田彦次郎氏藏

昨夜者難有奉多謝候扨誠に大醉後半は一向覺不申定て威儀を失し皆樣へ對し失禮等御座候半と恐入候事に御座候貴館に差置候品共早速爲御持被下難有奉存候萬罷出御禮可申上候宿醒中奉謝迄匆々布字

廿日　　啓之助

嘉助様

天保十年正月廿一日

〔二九〕竹村金吾に贈る

長野市　秋野太郎氏藏

昨夜菅沼氏の宴深更迄奉得清話其樂不可言難有奉存候忽又御使被成下近日留別に奉獻候品御丁寧御禮被仰下御擲返を蒙何共奉恐入候左樣申上候も如何御座候得共辱知以來每度御厚情を荷種々之高誼を蒙候義に付此度之拜別何か奉留度存候得共御存知の窶人是と申品も無御座風と存當り候得ば先生從來史學御好被成伺候所此錄は未御藏弃も無之趣候故幸小生に於ては都下へ持參も不仕暫不用にて差置唯白魚の腹を肥し候耳に御座候開拜呈仕候に御座候何も態々に仕候義にも無御座聊微志を表し候計に御座候間何分御却け不被成下御叱存被成下候樣奉冀上候右に付又々尊价を煩候間寸志の所御照察被成下此耳は御留被成下度候千萬望之

一今夕鹿肉拜味に罷出候樣仰を蒙り奉萬謝候然る所今夕は牛渚先生へ被召罷越且又每度厚給を以尊厨を奉煩候も甚以不堪恐惶義に御座候間旁以御訴訟申上候萬拜眉之節御禮可申上先貴酬迄草々頓首

牛渚は鎌原桐山を指す

廿一日　　啓　拜復

竹村先生執事

再白昨日は御用多の御中御尋被成下難有奉鳴謝候乍序先御禮申上候以上

天保十年正月廿八日

〔三〇〕八田嘉右衞門に贈る別紙

松代町　八田彦次郎氏藏

去戌五月御内用に付越後表へ罷越し相談に懸り候人別左之通

水原　　市島治郎吉

此者へは同所三浦菜亭と申醫者を以申込面會之上及掛合候所彌之義は八田樣にても御自身御出張被下候上にて御相談仕度よし申候

新發田　　白瀨瀨兵衞

此者へは同所表具師安田唐十郎と申者を以掛合爲致其上にて致面談候所中々急之御挨拶は難仕と申事に付跡之義右之唐十郎に賴置無由斷申談じ事相

書簡 玉池時代

自天保十年二月
至弘化三年閏五月

調候様子に候得ばいつにても唐十郎より飛脚可差遣約諸にて罷歸候

水原　市島德次郎

此者方へも手を入れ度存候所私逗留中此者他出留守にて終に面會不致尤宿の亭主信濃屋助三郎と申者大分德次郎之氣に入候ものゝよしに承候故此者に大略之所は爲含置候且又自然在所表より役人等出張之節は其方方定宿と可致段申置候間自然御出張等御座候はゞ此信濃屋方に御落付被成候樣奉存候

又新潟に御用有之節は池田佐左衛門と申宿手廣且靜にて宜御座候

新潟にて手先に使ひ候小鳥や市兵衛と申者爲心得其東西八九里之間名に聞へ候大家の名前認遣し候別帳御手扣に差上置候尤名の下に〇印御座候分は彌相談を懸候て可然者共のよしに御座候此段も御心留め被下度候

修理

正月廿八日

天保十年二月廿四日か

〔三一〕 宮下主鈴高野車之助に贈る

上田三宿の外道途無滞十九日致著府

兎角不順之氣候御座候へ共彌御佳勝御勤學欣賀此事に御座候扨發軔前者御蠖儀に預り且又種々煩勞之義御世話被下萬々奉多謝候御情誼を以遠方迄御送被下候に至りては殊に難忘覺申候僕義上田三宿の外道途無滯十九日致著府候間幸に御省念被下度候途中轎裏に致口占候蕪詩少々有之此度鎌先生へ呈し候先生より立田氏へ轉致之趣被申越候故御序も御座候はゞ立田より御取御電覽可被下候道開草々之作唯發一粲耳に御座候先段々奉謝而已匆々申縮候兩甥段々御厚情奉謝候尚無御假借御しかり御敎導所祈に御座候唯冀爲道千萬多愛

（兩甥は北山安世同藤三郎）

此日附恐らくは二月廿四日なるべし

二月十四日

宮下大兄

高野仁友　足下

啓　拜手

天保十年三月

〔三二〕 高野車之助に贈る

書簡　玉池時代　（三一）宮下主鈴高野車之助宛

本月初五日の御狀早速相達致拜見候春暖彌御健福奉賀候藤政北安清書御遣被成候に付點正御返し申候安世の方段々よく御世話被下候と相見大に筆力出候様に存じ千萬辱存候尚又宜敷御督責被下度候藤政の方字形は大抵に候得共兎角筆力弱く候て不宜存候字認候節懸腕は勿論の事何卒筆の毛筋の通り候處御指南被下度候左様致し候はゞ筆力急度出候事に御座候

（藤政は藤岡、伊織、北安は北山安世）

懸腕は勿論の事何卒筆の毛筋の通り候處御指南被下度

蟻川小學卒業の由當人の才發感心の至に候得共畢竟御敎導御精力の所致と一段に存候四書に可進や小學之反を懸候やの義何れ小學の反を懸候方尤の事に御座候小學書中何れと申皆喫緊の事には候得共敬身篇に至りては殊に簡要に候間是は足下より御始め諳記御座候樣に致度候藤三郎只今迄の通手本賴度候よし被仰越候得共此表へ出候ても甚世話敷且又諸方斷候て藤三郎を引受候は不條理に候間先づ御斷被下度候忙中用事のみ匆々頓首

敬身篇に至りては殊に簡要

三省子如何の樣子にて居候や

高野益友足下　　啓拜復

猶三省子如何の樣子にて居候や多忙にて發書も致兼候御序も御座候はゞ出

立前の禮可然御致意可被下何分御賴申候當人上京は如何や發軔も無程事と推察致候都て宜敷御賴申候其外小幡兄弟綿貫兄弟草間等早速書狀呉候得共繁冗今以復書も裁し不申候此亦御序に可然御致意被下度候萬祈

松代町　八田彦次郎氏藏

〔三三〕八田嘉助に贈る

天保十年三月四日

此壹封何分願上候

御大切之拜借物等仕（大小借用）

追日春暖益御清裕奉賀候扨出立前は段々御厚志殊に御手重之御餞別頂戴其上御大切之拜借物等仕萬々難有筆謝難盡奉存候私事も上田にて遂三宿被留十九日に漸著都仕候其後も甚多忙にて早速段々之御禮も不申上背本意不堪慚恐候拜借物は外之方今以出來不上候に付今暫御寬借被成下度候尤時々拂拭仕鏽等不出樣心掛候將又御餞別之品兩所ゟ土產に遣候所御坐候處孰れも珍品と稱し其出來を致感心候偏に御厚志と吳々も難有奉謝候今夕成澤氏出立に付唯先段々之御禮而已匆々申上候尚期後鴻此度は別段尊大人ゟは不申上候間乍憚可然御致意可被成下候御母堂樣御新造樣へも宜敷奉希候唯折角時候御厭可被成候

以上

上巳後一日

嘉助様

修理

（三四）高野車之助に贈る

天保十年三月四日

松代町　赤澤光太郎氏藏

（政次郎は蟻川、政之助は藤岡）

愈御安寧奉賀候書物之義段々御手數辱次第御坐候近日之御聽各よく出來候よし是偏に足下並宮下等之御精力と不堪喜躍候扨兼て御賴申置候四書集註孟子一同白文論語は今以不相知候耶何分嚴敷銘々御詮鑿被下度候其段宮下へも御話し御雙方にて毎朝の如く御尋ね被下候はゞ必ず相分り可申候始終端本に相成候のみならず平常不自由に御座候間御諒察被下何分少しも早く御尋出し被下度希候萬々所祈御座候愚甥共何分御叱り御引立可被下候政次郎政之助様子如何や是亦御勵し被下度候緊要のみ匆々

上巳後一日

佐久間修理

高野車之助様

（三五）藩老某に贈る

天保十年四月廿七日

御在所へ立歸早速出立候様

私著府後御屋敷内に罷在候得共

捨藏講義之節抔も唯御脇見耳被遊

昨廿六日圖書殿より御用有之御在所へ立歸早速出立候様被仰付候趣爲知到來仕甚以不堪不審右に付少々愚意も有之兼て御懇命を蒙候義も御座候に付極密申上候私著府後御屋敷内に罷在候得ども心腹を明し候人も無之右故其御地に罷在候より却て南部坂様之御動靜等は一切耳に入不申源大夫共時々只今迄之通り往來は仕候得共文字上之話のみにて世子之御上抔申談候事一切無御座秀軒とも屢々參會仕候得共是又同様にて御座候秀軒之孟子に君心之非を格す又吾君不能とす是を賊と云ふと有之候得共只理窟のみにて實事に難行と申事毎度申候義は何やらん心に掛り候事と竊に奉存候其上捨藏講義之節抔も唯御脇見耳被遊候御様子奉窺候ては毎度痛心仕候義何卒御根本を被爲立候様にと奉望候得共所謂牀下之力士其詮も無御座唯遠見仕候而已に御座候然る處源大夫も表一際之所は甚懇意之如く内心には甚忌み畏れ候事と被存候既に此間私拜借之御長屋御用にて移り場所そこかしこと御普請方にても申候得共塾生も御

立歸の義抔其所謂を不奉存

座候得ば餘り狹き所へも參りかね候内南部坂に一軒大抵廣き御不用之御長屋有之夫へと申評議も御座候所源大夫差支之趣を以て堅く拒み候よし右に付候ても去年か眞田殿の御長屋無之とか申候ことも存合せ候何様正士を嬶ひ清議を脈ひ候て遷徹之術を專一と致し候事何か子細可有之義と奉存候　右樣之場故此度圖書殿より立歸の義抔一向其所謂を存じ不奉唯愚意奉存候には御家老職にて屋の間に多勢を引連れ反覆往來御座候事御外聞御外見に於て甚不可然御國體御時宜に於ても亦甚不宜義と奉存候去年來御重役之御方不時度々御往來有之殊に此度は聞も無之兩度往來御座候事何か御國許に異事御座候とか御屋敷に變事御座候とか申樣外形之見方餘り如何敷定めて道中筋にても區々の異評可仕苦々敷事と奉存候得共夫は隨者抔之所見家國に係り候ことの候議論には無御座候其上右にては御上より御大臣を被敬候御筋合にも外れ又大臣鎭定之體に相戻り候義と奉存候一體大臣は衆士之上に居鎭定を第一と致し中々自餘之吏人同樣輕々敷道路に奔走致し候譯の者には有御座間敷殊に世子之御儀として出府被致候て輕忽纔之間に再應御在所へ立歸等御座候ては何樣御家中御領内之人氣も穩に有御座間敷散々之義と奉存候右之義は其表にて御上再々御一席樣御

御參府も無程事

御大臣の御本分御死力を御出し被成候御時節

評議御座候義にて圖書殿出府之上時宜に依り又立歸可被仰付と申御含み御座候義や又圖書殿出府後何か異事出來に付早急立歸被仰付候義や右は冤も角も事體餘り不穩當義と奉存候然る處事體等に一向不被爲拘被仰出候事は定て右に引替候御大事御座候事かと奉存候爲在候故御上にも十年も御精勤被遊候半御約定被遊候よしの所世子追々表向之御樣子は御快方之御姿に御座候故萬々一當年御參府之上頓て御讓國抔と申御含にても　是は有間敷義に御座候得共左樣疑付候義も有之候乍然事煩敷候故其義は不申上候　其以前御大政之御整頓にても御座候御義や無左して唯一通り之義に御座候はゞ御參府も無程事に御座候を如此火急に立歸不被仰付候共宜義と奉存候又御參府之上云々之御樣子にも御座候はゞ是は誠に大變と奉存候御大臣之御本分御死力を御出し被成候御時節と奉存候又其外之義に御座候はゞ鳥渡御樣子奉伺安心仕度奉願候將又四五日以前密に或人　是は金吾にては無御座別人に御座候其者之義追て可申上候　御在所にても大動き可有之樣子と申義鳥渡話し候もの御座候兼て奉伺居候例之御役人御變革之義と推し候得共少々次第も御座候義に付無左體にて打過候　職奉行御郡奉行職掌御引合之見込別紙申上　又源大夫義事宜次第其表

へ御戻しにも可相成や共薄々承候彌左様之御含にも御座候はゞ是れは尤も不可然と奉存候そこ此之話之廉を以推察仕候處此節世子源大夫之御用表際無事之様に御座候得共中々しつくりと不參趣にて八丁堀様へ源大夫の義被仰遣候御書を於御前無理に封切候等之事御座候故御手弱候て御自身之御力にては不被遊御叶先其儘に被差置候得共御内心には随分相應に御憤も可被爲入候得ば行々彼に大權を御假し御委任御座候程の處へは決して不參候得ば此節今一兩年只今之處に被差置候共根を堅く仕候程には難參勢に御座候得ば暫只今之儘可然奉存候扨又其内に失義御座候はゞ其隙を御覽御座候て御取退被成候事御心安き義と奉存候將源大夫義は内實は兎ても力不及と覺悟致し候やにも被相察候得ば功利家之常若しくは又別に手品を替へ羽をのし候隱謀を企て候やも難計右に付愚意に奉存候には彌以其儘に被差置候方可然又無御餘岐御筋合にて萬一御戻しに相成り御役替等被仰付候共只今之御役兼帶と申義無之様仕度必當人よりは可奉望候得共名と器とは不可假是は決して不可然必後之災害を引出し可申候間此一條は何分共御親切に御含置被成下度奉存候源大夫近頃前

世子と源大夫の御間中々しつくりと不參趣

暫只今之儘可然

町田源左衛門抔も甚隙居（町田は曲事ありて天保九年出奔十年七月召捕となる）

齒二枚之間見惡敷程にすき申候前齒二枚をば相法に忠信學堂と名付聊すき間無之をよしとし多くすき候者は奸詐之小人にて必忠信ならぬ者と致し甚嫌ひ候事に御座候已に町田源左衛門抔も甚隙居申候右故兵家に大將を擇み候にも必前齒之不隙者を擇み候趣兵書にも往々見へ申候右を御大用御座候はゞ甚御國家之御爲不宜事御座候半と恐懼仕候源大夫只今迄之處一々詐術のみに御座候得ば以前を以て以後を推し候に必ず權詐は停め申間敷候得ば權を御假し被成候義も御座候はゞ必ず御後悔可有御座候かく朋友之惡を稱し候事不忍義には御座候得共彼は私義此は公義御國家之御爲奉存候故不得已事奉申上候心事御諒察可被成下候乍然可否得失は宜敷御取捨被成下度奉願候以上

四月二十七日

猶々金吾より却て源大夫之義善惡共話し仕候義も御座候得共私よりは例之通り一向惡敷は不申程合を謀り候間是義乍憚御安心可被成下候

九兵衞誓詞差出候義源大夫よく存知居候よしに御座候眞田殿と御協同御座候共黨の一字はよく御失念無御座様仕度奉存候

〔三六〕綿貫新兵衛に贈る

天保十年四月廿九日

兩度之御手書一々難有領訖先以向暑之時節彌御清勝殊に御出勤御願之通被蒙仰芽出度奉拜賀候右にて此表令弟君にも甚御悦之御樣子に御座候久々にて御出遊大に御弱り被成候よし成程左も可有御座候乍然御門外御出掛被成候方御體氣之御爲にも可宜奉存候生在宅にも御座候はゞ御過談も可被下候段被仰下是には實に不堪神飛候此表異學之徒滿邸甚人之心術を害し候事歎敷毎度叔君とも御出會之折柄御同樣に慨歎仕候事に御座候非文辭之學則功利權詐之學本藩のみに無之何方も此節者同樣に被存候何卒賴天之威靈衰微之正學再興いたし候樣心願仕候事に御座候近來竹村氏出都にて少々助を得申候時々出會誠正經濟之事にも及び候事に御座候但盟臺と倶にせざるを恨むる耳先は御出勤御悦芳翰御挨拶旁匆々申上候今便も發書極多に付不盡縷々唯爲御國千萬保重

四月小盡

東陽盟臺

啓　再拜

此表異學の徒滿邸甚人之心術を害し候

近來竹村氏出都にて少々助を得申候

又白先頃より令郎達御打續御不快散々に御座候長君は如何や最早御腹痛も御平癒候や相伺候

春暮にも懇々御細答被成下奉萬謝候兎角多忙に而御座候故早速御挨拶も不申上失敬之段御海涵蒙度希候

淵源錄も叔君より相達し慥に落手仕候此節は叔君へ上置申候よく隙々には御覽御重候樣に御座候盟臺御兄弟之如きは篤志誠に世に難有覺え申候

又白此度御出勤之御悦尊嫂前令郎衆へも乍憚よろしく御致意奉希候

天保十年

〔三七〕高野車之助に贈る

書生手本近日相認今信發送

長野市　小宮山信人氏藏

御近況如何彌御清勝被成御起居候耶書生手本匆忙中致延引御待遠と存候近日相認今信相送候宜敷御配當可被下候政之助生久敷其後は淸書も不見へ候一番御振策被下度候安世藤三郎如何や朝々致出精候や否宜敷御督責所祈御座候兎角取込緊要耳草々頓首

高野賢友足下

啓　拜

又白烏海生はよく不斷出精致し候や先便書狀遣し呉候が未だ答書に不及候
先御序も御座候はゞ宜敷御致意被下度候
廣馬生遠方よく早く朝々出精之趣一段致感心候僕かも賞遣し候樣是又御序
に御申可被下候以上

廣馬生よく朝々出精之趣致感心候

天保十年六月

〔三八〕片岡此面(？)に贈る

長野市　和田榮二氏藏

啓白赫暑之候に御座候得共闔府被成御揃御多祥に被成御座候や扨早法外之御無沙汰實に申譯も無御座候出都以前は段々難有不堪陳謝右を全く忘失仕候譯には無御座候今信菅沼君迄申越候心事に御座候間何分不悪被思召多罪之段御海容被成下度奉禱候生義も著都後相替候事も無御座候本月一日お玉ヶ池へ外宅仕候都下珍重之勝地にて南庭垂柳五株頗る佳景に御座候ト居の作五首御座候てやゝ其概略を寫し候間今便扇上に錄し呈覽仕り候御一粲可被成下候菅沼君迄差出置候間御序に兩本御見合せ其指を御領し被成下度候其外も少々宛は申上度事も御座候得共兔角取込不得暇隙乍去餘り之御疎闊に付先暑中御見舞

本月一日お玉ヶ池へ外宅仕候

を鹽に段々之御禮申譯一同奉申上候當年は殊の外の暑威に御座候折角爲御國家御自重御座候樣所望御座候乍憚御内政樣へも御序に宜敷奉禱候餘期後鴻

片岡老盟臺梧右

尙々何か此表應身之御用も御座候はゞ仰被下度候

啓　頓首拜

天保十年七月八日

〔三九〕宮下主鈴に贈る

東京市　宮下幹氏藏

甚暑之候益御清穆に御侍養可有御座奉遙祝候當夏は土用に入り候迄は殊の外冷氣にて候ひしが夫より一旦に酷暑に相成例年よりも尙苦熱に御座候乍然學堂は南庭の五柳樹綠蔭稠密に候故よく日景を遮候て外出だに仕候はねば先々凌よく一家幸に健在仕候間乍憚御省念奉希候さて先頃は相願置候兩書御手數に御固封便風に御附被下慥に相屆き千萬難有不堪感謝候右御禮暑候拜問旁如此御座候爲道折角御多愛所禱御座候乍憚尊大人へも宜敷暑中御見舞之義被仰上被下度候餘在後音

南庭の五柳樹綠蔭稠密に候故

書簡　玉池時代　(三九)宮下主鈴宛

七月八日

君毅道兄　梧下

啓　再拜

附白北山愚甥之義何分にも御督責を奉煩候其外舊門人いづれも御啓發被下候樣奉萬祈候

〔四〇〕竹村金吾に贈る

天保十年九月十四日

過夕者不相替種々荷高給恐入難有奉萬感候□□□拜話を貪及長坐重て悚懼を□候義に御座候此程失念之筆呈上仕候御笑存可被成下候拜借之袱兒並籠子返璧仕候群玉論衡は近日拜訪の節迄御寬借奉希候彼鬼神問答漸雙方共□寫出來仕候に付供高覽候御閑時御一過可被成下候御覽後御序に山兄へ御回し被成下度山兄より又澁谷子へ轉じ被吳候樣是又乍御面倒御致意被成下度奉冀候扨此程御誨喩被成下候飯米之義高誨の通御隣家へ懇願可仕心得之處此程既に遲延致し候得共例之失火□亂中故遂失念不及其義候然る處僕之報を承候得ば今日切のよし餘に御煩瑣を奉掛恐入候得共何卒可然御隣家へ御一話被成下承知候はゞ其通帳を以今日直

彼鬼神問答

天保十年九月十八日か

先一人分も受取候樣仕度此段何分共宜敷奉萬祈候至々懇々

十四日

昨夕良夜山兄へにても御訪被成候や定て御吟詠等も可有御座奉存候可相成は御□□被成下度候

〔四一〕竹村金吾に贈る

來敎云士夫之文武、醫師之醫業之差別等之義は聢と申事も無之候醫者は醫者、諸士は諸士是迄之御振合無之其上御暇相願ひ候へば御許容被成下其內も勤仕候も同樣御知行も被下候間右にて御手充筋は事足り候と申角にて御願立之趣十に九つ出來申まじく於私は承服も不仕候得共又強て是非不相濟と申程にも不存云々

士夫之文武、醫師之醫業之差別之義申事無之候と御座候得ば士夫に於ては文武を以てし醫者に於ては醫業を以てして上に事へ候事その業とする所は品替り候得共上に事ふる道理は同樣也と申趣意既に明白に相分り候事と被存候左候

はゞ士夫之文武、醫師之醫業に就き候事は上之御取扱ひも御同樣に無之候ては濟かね可申殊に本文にも均しからぬを患ふるとも御座候かに候をそれらの道理も一切不顧彼を厚くし此を薄うすると申樣にては恐ながら御政道の御瑕瑾にも候べく候夫にても相濟候と申べきか其上醫者は醫者、諸士は諸士是れまでの御振合無之と申事に御座候より殊に不審不晴奉存候其子細は本藩に於て文事の修業に多年の御暇を奉願出府之上外宅等仕居候事小生より以前絶て其例無御座候然る處御許容御座候上は是迄御振合無之筋は一切成かね候と申こと には有御座まじく候且只今迄絶て無之條々を奉願候に何故に是を御許容被成下候や是全其道理あればこそ御許容も被成下候に御座候然らば醫者之醫業と諸士の文武とに均しからぬ御取扱にては濟かね候と申道理相分り候はゞ假令是迄御振合は無御座候ともその道理を以て彼是同樣と相成可然事と奉存候況や是迄御振合に無之義を願ひ起し候て御許容被成下候其事に就ての義に候得ば御振合無之事は申迄も無之とくに知れたる事に御座候然るを更に御振合之有無を以て押付候事所謂近所劫にたゝぬの論とも可申候且又御暇相願ひ候得

ば御許容被成下其內も勤仕候も同樣御知行も被下候間右にて御手充筋は事足り候と申事更に一圓合點參りかね候御役人には其御暇を願ひ候事畢竟何之爲に願ひ候義と被思候事やらん士夫の文武も醫師の醫業も己が身の榮耀を計り候爲に無之第一には御上の御爲御家中のため御封內の爲めに相成り可申身と相成候て忠義をも全くし候半爲めにて候得ばこそ御上にても御許容も御座候なれ左候得ば下よりこそは願の通被仰付難有仕合共申候へ上より申候得ば其願御許容候迚格別之御恩惠に可被思召筋も有御座間敷候右を何かわが榮耀を許り候を枉げて許容にても候樣に格外之恩分らしく被申候は如何なる事にて候や殊に勤め仕候も同樣御知行も被下候間右にて御手充筋は事足り候樣被仰候事以の外之義と奉存候成程世祿にても無之年替りの奉公人か日前を取り候て被倩候ものにも候はゞ何に致せ手前の願にて暫外へ出で候て尙其日前を貰ひ候はゞ格別の厚き次第にも御座候べけれども夫とは違ひ先祖の勤功に依り て頂戴仕候俸祿に候得ば御覽之通り今目前に幼少家督にて勤めの出來ぬも老ぼけて勤を引候も長病にて多年引籠候も唯無役金を出し候迄にて俸祿は依然

と仕居候事に御座候午去是は御家中一統之事にて修業奉願候人のみ奉受候御異恩には無御座候且況や修業罷出候小生抔も矢張無役金をばそれらの人と一同に差出し置候をや凡その人は勤不仕候得ば俸祿も減じ候所を修業中故に俸も減じ候はずと申にも御座候はゞそれが御手充筋にて事足り候とも可申候得ごも只今申上候如き次第に候得ば右にて御手充筋に事足り候と申角いづくに御座候義や尤不審之至に奉存候當節上に明君賢相御座候て御供に文武之義を御引立被遊度種々御苦勞も被成下候時に當りかゝる不當之筋をもつて御上之御恩路をも塞ぎ夫のみならず貧窮の輩抔は中心にはやたけに人に立越ゑ文武之修業を遂げ候て一角之御奉公をも致し候半と存候者も自然と出かね候樣に仕候事愚意に於ては是にても濟み候はゞ世に濟候はぬと申ことは有御座まじくと申程に奉存候故不審之條々認め取り申上候午去本書にも申上候通手前之事に候得ば拂ひ除け候ても拂ひ除け候ても私意も雜り候べく奉存候故唯其段々御講究を奉願度如此御座候御隙之節いつにても宜敷候間御批答被成下候はゞ是可爲萬幸候以上

九月十八日

竹村先生案下

修理

天保十年九月十九日

〔四二〕綿貫新兵衞に贈る

八月十九日御認之教墨本月初旬相達欣然拜披仕候先以秋冷之時節尊家被爲揃御多祥之狀浣慰之極不堪拜賀奉存候小生義も如舊輕健罷在候間乍憚御降心可被成下候扨先便申上候義共縷々御細答被成下篤と反覆仕候所右にて御趣意もよく相分り又疑候所も一々氷釋仕候扨々盟臺御昆季御懇到御下交被下候事誠に古人之所謂益友是事にて今に不始義ながら不堪感謝就中程伯子二十年被愼候好臘之意風と被存出候御喩誠に切當之義後來迄愼而服膺仕御屬望被下候萬一にも奉副度奉存候尙御耳に觸れ御心下に掛り候義は乍御煩冗時々蒙仰度候但し子路夫子に被哂候意思昔年此弊御座候故今も尙此癖有之樣衆人冤角相聞候趣被仰下是は不覺失笑仕候子路と小生輩とは其地位實に遙に隔絶も致し候事に御座候得共時勢を以論之候得ば却て又孔門の子路共違ひ候樣存候如何と

なれば子路道を行ひ候に其勇有餘候得共其學之所到を論じ候得ば顔子曾子閔子冉子有子皆其上列に御座候其上志を申述候節も曾點抔の長者も有之候に卒爾に差出候事成程不可然事と奉存候然る處當今之時勢夫とは事替り眼中可讓人も無之右故不顧謬劣立論仕候義も御座候此度出都以來も正學再興之爲め所を不嫌聞人さて相尋ね見候所都下廣しと雖も屈服可致人も今以見當り不申左候得者此一大事と申候得共終に誰に讓り可申き乍然朝暮自省仕自己の不及勝之義をも能承知仕候得共外に其人無之候節は孟子所謂彼も一時是も一時と奉存候箇樣の義言に發し候事既に謙虛を失し候と蒙命候得ば一言も無御座候得共是亦謙道と竝び行れ不相悖義かと奉存候左候得ば昔子路之夫子に被哂候は彼の一時小生の人に不讓候は此の一時と存候事には讓るべき事と讓り申間敷筋と御座候樣覺悟致し居候便利を讓り名譽を讓り貨財を讓り候之類は可讓事勿論に候得共又仁に當り候節は師にも不讓と御座候得ば讓りも事に依り時に依り申候右を一概子路の意思を以御糺し被下候は乍憚未だ其當を不得義と奉存候鄙意如此不知尊意以爲如何○居室之義云々御奬美被成下候得共何にも御

都下廣しと雖も屈服可致人も今以見當り不申

仁に當り候節は師にも不讓

奬譽に預り候筋には無之甚慚愧不少子細は申上候迄に無御座候定て御承知之事と奉存候此類は皆時勢之所使然不得已事仕合せ全體ならば山林へ也共引籠り自己の德業を成就致し夫にて自然と令聞廣譽御座候事に候はば御贅辭を蒙候ても宜敷候得共兼て高聽をも瀆し候實已事なしの一策中心には甚快からぬ事に御座候得共是も又彼此の一時無餘岐箇樣仕候而已所謂我を知る者は我心憂ふと謂ひ我を不知者我何を求むと云ふ此心事は實に盟臺御昆季にても無御座候得ば知る者更になしと奉存候早速右之御返書をも呈上可仕之所此表依舊俗務も不少乍存延引簡慢之罪幸に御海容可被成下候時氣彌冷折角御自愛所祈御座候萬般不申上候間尊妹前へも乍憚宜敷奉願候令郎達へも是又御序に御致意相願候頓首

九月十九日

東陽盟臺梧右

啓　再拜

再白近日山口貞一郎と鬼神來格之義を論じ候事有之今信命をも蒙り候義に付雙方之書牘錄し呈覽仕度存居候所竹村氏既に一覽之砌寫取高覽に供し呉

山口貞一郎と鬼神來格之義を論じ候事有之

候様に昨今其話御座候間別段小生よりは呈し不申候御電覧の上高論竹村氏迄にても御申越被成下度候愚意尊意に不叶處御座候はゞ是は痛く御指摘を蒙度候千萬

天保十年九月廿二日

〔四三〕竹村金吾に贈る

曩夕は不相替種々荷御高誼感佩不淺奉多謝候廿日にも御風□可被下と申御事故前日迄相樂罷在候處當日風邪□惡寒甚敷痰喘相攻め衝氣殊に強く迷惑仕候得共山寺氏も勸に應じ出席も御座候に付別けても罷出度押てと存候所（一體同氏御覽に出席は有之間敷且つ業も久敷廢絕にて無覺束も不仕候所不圖稽古場へ見え候に付形勢に付尊邸にて面晤の節も一向に勸めより一兩合相試候所豈意はむや前年不斷出精の頃じ强て御覽出席をも相勸候事に御座候）中々步行出來かね候に付既に駕籠迄用意仕候所夫以衝氣强く乘候事不叶無餘岐出席も相斷御風□も頂戴不仕大殘念奉存候此度は大弱りにて今朝迄頓と頭を擧候事不叶大迷惑仕候乍然今朝來少々宜敷此分にては隨分不遠拜訪も出來可申と奉存候間必御過念被成下間敷候山寺へも大に信を違へ候樣にて甚痛心仕候間御序も御座候はゞ痛心之次第御話し可被成下候扨早過日御取替被成下候飯米も使切候よしに御座候廿四日には如何手段仕候て可然や乍御煩瑣黑澤迄御口喩被成下度千萬奉冀上候臥蓐上執筆不能多書早々不謹

九月廿二日

竹村先生　梧下

天保十年九月廿日

〔四四〕高野車之助に贈る

長野市　小宮山信人氏藏

蟻川生着にて廿三日付の御手帖拜接致し候兎角尊大人御體氣不被成御勝候段御心痛致推察候追々寒冷に向候御保護專一と奉存候

一宮下白井と漢書御會業之よし可然事と存候左傳論語會之外春中より詩國風再遍御研究殊に數書を併せ被治候條御篤志致感心候將又諸儒之說全く萬葉集之歌を後世家にて解し候に類し候と申御論至極御尤も之事と存候しかし歐陽公本義呂子約讀詩記嚴粲詩緝抔に至り候ては又多く詩人の旨意をよく得候處も御座候へば一概には立論も出來申間敷乍去文公の集傳は實如高意

平易穩當是は別段の事と被存候

一藤保生之義既に承知致候

一曖翁之書も其内便に附し可申大抵帋恰好御申越可被成候

一武衡と御改名被成度よしにて衡の字は一體外を守り候字義にて衡の字内より守り候意に御考への趣是は足下の杜撰に御座候衡の字は一體外を守り候字義にて許愼之說に據候得ば圍市行に從ひ候字にて六書中會意に屬し候圍は外をかこみて守る也市は匝と訓じ周徧する事夫に行の義加り候故王宮抔を晝夜取り守り候意にて書經禹貢にも武衡を奮ふの語も見へ申候禹貢……に熟し候文字に候得ば名に命じあながち不宜と申にも無之候へども思召之通にては大に誤り申候よく御勘辨可被成候

戒詞並に鬼神說も委細致承知候鬼神往復書既に淨寫致候得共轉覽の人多く今以て鎌先生へも上げ不申候御屋敷内にても竹金子山源子兢れも寫し留申候今時多くは澁谷氏方に可有之是より返り候はゞ早速相送り可申候

御書尾の六書後便迄に代料相尋可申候乍六種皆刑書也何故是等御詮議候や

不審之事に御座候扨蟻川生講讀共相試候御苦勞故か春中ゟ文義をば解し候樣に御座候得共字を讀候力は却て思の外上り不申畢竟は御病人等にて何と申候とても御手の不屆所も可有之と御察申候乍去古文眞寶抔を御讀せ候等は餘り雜の事と存候眞寶抔は坊間之俗選にて文雅の士の用ひ候ものに無御座候又淵源錄等も少々計御讀せ候よし此錄抔は必讀の書に候得共幼學童子の課に致し候品には無之候兼て御附囑申候通四書終候はゞ本經を爲讀本經濟候はゞ三禮三傳爾雅小學近思課し可申已上の書十五歲前に濟候はゞ三史五子を爲讀候も可然候其他文章軌範三體詩等の約なるものを授け申度其人格別に異才に御座候はゞ文選等を爲讀候も亦可に御座候淵源錄言行錄抔爲讀候事古文眞寶には勝り候得共矢張不可然候僕の此言私說に無之皆古人の成法に候間兎ても御苦勞の序によく御守り被下度足下御一箇にて諸後生の幸不幸に係り候間容易の事に無之候拜書の序に愚蠹の荒增申進候御暇日御熟慮被下度候先は貴酬而已草々以上

九月卅日

啓拜

高野賢友足下

二愚甥如何様にも御督責所祈御座候千萬切懇
草閒生此閒少々怠慢之様子に致傳聞候可惜之甚事彼も又難多得好秀才萬一
廢學にも至り候得ば朝廷之御爲にも不便に御座候閒よく〳〵御善導候て當
然之義と存候奈何春中も鳥渡便閒致直言候通り書札も又人閒必用之事に候
得ば今少々意を被留候ては如何や僕之外爲足下箇様申候ものも有之閒敷候
閒何分是は御舊習御變被成候様存候左なきだに俗吏抔は讀書家を慢り候も
のに御座候況や此方に缺欠御座候ては先第一自己之恥と存候何似々々

天保十年

（本文を逸す）

〔四五〕　鎌原桐山に贈る　附文

松代町　鎌原重正氏藏

俗稱山口貞一郎と申候

再白菅山之義御尋に御座候が是は先達申上候様に心得候故前便不奉申上候右
之者は小濱藩之老儒にて（一齋と同庚のよし）代々山崎學を唱へ候此節崎學にては都下第
一と稱し候事にて其藩にても至て重く被用老職次席かにて秩祿も二百五十石
かの様子に御座候俗稱山口貞一郎と申候私方へも折々相尋ね候人物も隨分宜

敷御座候竝のものにては無御座候

天保十年

（本文を逸す）

〔四六〕　鎌原桐山に贈る　附文

松代町　鎌原重正氏藏

再啓拙文御改竄之所一々服膺仕候尚奉質仕度筋も御座候に付左に申上候御序
に御批誨奉冀候

小生第一書

無可疑者四字删去眞佳と感服仕候

不仰敢三字同前

下文程の字下朱字を不加候義は或先其易者或先其難者と申語全く程子に出
候故也

第二書

若又曰の又字前節若曰と御座候故又の字を加へ候也

其理之虛而其勢之逆この九字元來文公の成語ゆへに其下不在于彼而在于此
と認め申候

素無師授の四字一齋門下にも乍入左樣申候ては未妥當趣蒙仰候得共矢張是にて妥當奉存候其子細如何曰難言

第三書

非の字脫文に相違無御座候

程子發之の發の字依原書

嘗字下不字誤て脫之

誠下加僕字成程可然奉存候しかし無僕字例折々御座候が如何可仕や何か一字之事には候得共口に溜り候樣被存候尙御敎諭奉仰候

菅山第一答書

鬚の字訛誤高按之通

賢者原書も如之

第二答書

容竊成程倒置に相違有御座間敷乍去原書にも箇樣に御座候

尙翁は晦翁の訛ならず三宅尙齋の事也此人鬼神來格說を作る其卷首前波後

波の譬あり

議の字駁議の事也擬の誤には無之

程子發堯夫發の字警發の發と被存候

鮮の字誤尊按之通に御座候

〔四七〕藤岡甚右衞門に贈る

天保十年十一月廿日

（政之助は甚右衞門の次男後の宮嶋嘉織）

當十五日御屋敷御學問所會讀定日にて出席仕罷在候所夕刻に及びはからず政之助殿小幡御母堂君御一同御著と承り會讀濟より小幡氏へ御尋ね申久々にて御目に掛り候處暫の間に見忘れ申候程御丈も御のび扠又御應對萬端も彌御もの〳〵しく御成り大慶不過之奉存候承候得ば御道中も飛乘にて御出候よし御修行がてらの御道中にて候得ば本より斯こそあり度事ながら扠々感心仕候義に御座候當日は蟻川をも同道仕居候故是も一同御目に掛り候て御互に大悅の樣子にて御座候ひき私方へも早速御尋被下且又品々御土產に預り何共痛入候御事萬々奉感謝候塾生四人のものへも銘々御丁寧に何より重寶之品御惠み被

下皆々難有がり宜しく御禮申上候私方御尋被下候日は幸天氣も宜しく候故蟻川をも同道いたし御一同淺草より向島兩國邊一ト巡り仕候久しぶりにて御同行致し大に相樂み申候彌の御入塾は明日頃と被仰下候間塾も餘り手狹之上に政殿も御出又和合院も參り候よし故少々手を入申候この方明日ならでは方付不申候得ば明後日に被成被下候樣明朝小幡氏迄申進じ候はんと奉存候是迄御優福に御そだち候て急に手狹之所へ御出何かと御不自由にも候半と奉存候乍去夫も御修行の一つにて候得ば先如何樣にも御忍び候がよろしく御座候但御案じ申候事には私方塾法頗る嚴敷候故日々の課業等も外並方に責め申候はゞもしくはその苦勞なる所より文學を御厭ひ候樣には相成申まじきやかねても申上候通り政殿御事は御顏色も常ていならず始終は事を遂げ名をなし候程の豪傑にも御成り候べき御生質とも存じ候故何とぞ御自身より御好み候處の出で候樣に仕度ものに御座候御自身にてもすら〳〵御讀め候程に御成り候得ば例の御生質故必ず人の下には御立ち候間敷候右に一ト工夫御座候間御望みの書物をば其時々可申上候間御調へ被進被下候樣奉希候尤も此節の御幼年の所

にては平常の所にて格段卷數御座候もの等は入り不申事に御座候先は政殿御著御悅のみに申上候猶又要助歸藩之節可申上候乍憚奥樣へも可然被仰上可被下候今日此方も初雪右に準じ寒氣も一しほに御座候其御地猶更の義と奉存候折角御自愛所祈御座候以上

十一月二十日

修理

藤岡樣

再白九日付華簡難有拜見仕候政殿御出府之義に付委細被入御念被仰下一々敬諾仕候御在府中之義は乍不及如何樣にも注意及び候丈は御世話可仕候間御過念被進まじく候御他行萬端の義につき候ては家塾之法餘り嚴し過ぎ候樣にも可被思召候得ごも各々大事の人を預り申候上にては嚴しく仕らず候ては叶ひ不申候政殿御見物あり度と申所は必ず私御同道申候半と存候事に御座候塾法ゆるやかにて少年の人をあやまり候もの見懲仕候故かくは心を用ひ候事に御座候此所幸に御安心可被成下候以上

〔四八〕　八田嘉助に贈る

天保十年十二月二日か

松代町　八田彦次郎氏藏

其後者打絶御疎音申上候甚寒之砌御座候得共皆々様御揃被成御萬祥被爲入奉遙壽候私義も幸無事罷在候間乍憚御休意可被成下候扨彼無盡之義段々御厚情を以手堅く相成難有奉存候乍去私在府之義色々御厄介に罷成可申候兎ても之御高誼何分可然奉希候木町へも大御無沙汰御序も御座候はゞ乍憚宜敷御傳意可被成下候何か近日珍敷御品御手に入候義は無御座候や先達ても申候通私隣家河上渭白と申茶家有之頗る盛に御座候何か鑒識抔之御用も御座候はゞ無御隔意被仰下度候私近日交趾製之花瓶一つ見付申候雞卵形にて口至てちいさく異樣之品にて尤も大家抔には御覽に可入品にも無御座候得共賤家常用には頗適用之ものに御座候火急之事にては御用達兼候得共御注文物抔長き御用に御座候はゞ無御遠慮被仰置度候先は時氣伺御無沙汰申譯旁如此御座候寒氣折角御厭可被成候餘期後鴻候不乙

十二月二日

茶家河上渭白

修　理

〔四九〕　八田嘉右衞門に贈る

天保十年十二月六日

松代町　八田彦次郎氏藏

良久敷御左右も不奉伺簡忽之罪難逭奉存候時下嚴寒之候に御座候得共尊家被爲揃御多祥可被爲入奉賀候小生義もお玉池卜居以來甚無異罷在候間乍憚御省慮可被成下候最初之考にては卜居後一兩年之間は門人等も付申間敷覺悟に御座候所外宅以來直樣打續き月々一兩人兩三人宛入門之生も御座候て此節塾生三人之外外より通に參り候もの十四五人も御座候此樣子にては來年にも及び候はゞ追々多分にも相成可申左樣御座候得ば最初見込より却て早く門戶を成し可申奉存候兼々厚く御配慮も被成下候に付此段も鳥渡御風聽申上候偖此品餘り如何敷御座候得共寒中御左右相伺候印迄拜呈仕候御笑味被成下候はゞ本懷之至御座候寒威も尙次第相募可申候折角御自重御座候樣奉禱候尙後信可申上匆々頓首

十二月六日

修　理

嘉右衞門　樣

天保十年十二月六日か

〔五〇〕　八田嘉助に贈る

無盡の儀も

再白無盡之儀も御手數には可有御座候得ごも何分可然奉希候千萬々々所祈

御座候

近來多忙

先頃は相願置候長物之義竹村氏迄御差出し被成下早速同氏より相廻り早天に

雨を得候よりも尚御惠澤に浴し候て千萬難有奉鳴謝候早速右御禮をば申上候

が定て無間違相達し候半と奉存候時下嚴寒に御座候得ごも彌御清福御揃可被

成奉賀上候私義も幸無異義罷在候間乍憚御省念可被成下候然ば此品菲薄之至

愧入候得共聊か寒中御左右伺候印迄呈覽仕候御莞存可被成下候私義も近來は

殊之外多忙に罷成目を廻し候てのみ罷在候得ばもはや年内は呈書も仕かね候

べく候寒威折角御自重御座候て芽出度御迎陽御座候樣所禱御座候乍憚御新造

樣へも宜敷願上候頓首

十二月六日

松代町　八田彦次郎氏藏

天保十年十二月十七日か

〔五一〕　八田嘉助に贈る

牛肉は珍品

本月九日出之御墜簡相達難有拜見仕候如來敎寒威甚敷御座候得共尊家被成御

揃益御萬祥被爲入浣慰之極奉存候扨又被爲掛尊意遠路之所牛肉一樽胡桃仁一

箱御送被成下千萬感荷奉多謝候乍然甚以恐入候義に御座候殊に牛肉は誠に珍

品此表容易難得候所何共難有奉存候近日有名大家相尋候筈に御座候が先早速

是に差出し申度吳々も多感奉存候乍憚尊大人へも右之御禮宜敷奉希候先右御

禮而已匆々申上候最早餘日無御座候總て來陽可申上候頓首

十二月十七日

修　理

嘉　助　樣

無盡の義

河上會席付

再白無盡之義被仰下難有奉存候何分乍此上奉願候河上會席付早速貰受今信

差上候御入手可被成下候何も別段之趣向も無之樣に御座候が是にても面白

き事や如何其内尊意相伺度候以上

〔五二〕八田嘉右衞門に贈る

松代町　八田彦次郎氏藏

天保十一年正月五日

新春之御慶不可有盡期御座候尊家被爲揃彌御多祥被成御超歲連日御祝可被成芽出度御事奉珍賀候隨て生義無異犬馬齒を加へ候間乍憚御降心被成下度候扨客冬は御細書を以寒中御尋被成下萬々難有奉多謝候多忙罷在右尊酬も早速不申上惶恐不少奉存候且一統豐熟之樣子御領內にても手踊等相催し四十餘歲之老男お牢にばけ候よし被仰下誠に不覺噴飯仕候扨々世上は希代なるものに御座候先年段々御苦勞御座候頃は中々容易に其痛み立直し候事無覺束樣に被存候所暫時に左樣相復し候事誠に天幸畢竟は德川家之御高運と乍恐奉存候殊に奉伺候得ば今春古稀之御齡に被爲成候よしかゝる太平之御代に又如此御高壽と申も是又畢竟御陰德等之天意に被爲叶候の所致と奉賀上候定て嘉助君より御賀をも可被進奉存候いつ頃の御含や略前廣に伺度左樣仕候得ば何か文友共に爲認呈上可仕候先は年頭御祝詞申上度如此御座候尙期永日候恐惶謹言

正月五日

佐久間修理

一統豐熟之樣子御領內にても手踊等相催し

今春古稀之御齡に被爲成

〔五三〕高田幾太に贈る

松代町　原淳造氏藏

天保十一年正月五日

新年之御慶不可有盡期御座候貴家被爲揃彌御萬祥被成御超歲連日御機嫌克可被成御祝奉拜賀候隨て小生義も何事無御座犬馬齒を加へ候間乍憚御省念可被成下候右年頭御祝辭申上度如此御座候恐惶謹言

正月五日

佐久間修理

啓　迪

高田幾太樣

人々御中

猶々乍憚御母堂樣御內政樣へも宜敷御祝詞之御致意奉希候扨客歲拜別之砌

八田嘉右衞門樣

人々御中

猶々御惣容樣へ乍憚御祝詞可然御致意可被成下候

啓　迪

早速御墜簡被成下難有奉謝候右之御挨拶も多忙に取紛れ不申上誠不本意之段幾重にも御海涵奉冀候毎々玉詠竹村氏にて拝吟奉感歎候定て春來も御秀調可有御座奉存候何分御示及被成下度希上候令姉君も定て妙調可有御座候御序に宜敷奉希候餘は期永日候頓首

（令姉は八十子といひ才媛にして又女丈夫なり原氏に嫁す）

天保十一年二月五日

長野市　飯島正一氏藏

〔五四〕藤岡甚右衞門に贈る

御内々御披見可被成下候

別帋申上候政殿御事私方へ御出候以來何も〳〵私の申候通よく御出精有之尤も久々御懈怠にも承り候故一旦に重荷を負せ申候ては却て御退屈も候半と存候に付大抵に程を計り晝は復讀を專らに夜分は小學の講義を習はせ申すきすきには楷書の影寫をさせ申候所皆怠慢なく御勤め候て手習の方は慰がてら日々二枚にても三枚にても勝手次第に被成候樣申置候所日に依よく御出來候節は五六枚位も御認め被成候夫にては頓て退屈致し候ていやに成候とあしく候間少し宛無懈怠御認め候へと申候ても御進み候ては日々四五枚は必ず御認被成候故先便御目にかけられ候樣の本其後又二冊出來申候右故か御手も上り候樣相見へ申候小學の講義も次第によく御分り近頃は大抵一度圖樣と申候得ば夫にてよく御呑込候て輪講之節急度立派に御申取覺之進抔が苦學を致し覺え候よりははるかに御出來候故加藤生和合院始め皆致感心候て此通にて暫らく此表に御出候はゞ必ず一廉御出來候はんとて深く望みを掛居候先頃極密被仰越候御内含等の義は政殿は勿論其外へも深く祕し候て一切にほひもきかせ不申候得ども舊臘も加藤和合兩人にて私へ申聞け候には政殿事は外々の童子と違ひ氣質も正直にて學業もよく被勤行々必ず非常の人にも被成候はんと被存候得ば一體は來春は被歸候樣子に候得ども何分暫らく御引留候ては如何や近日政殿ひそかに御申候を承候所此表へ參り候ても先生には御家來も多く有之掃除取次其外雨戸を引候類も皆人が致し候て只手前に致し候事は外出候節自身の衣類を始末致し候位と存候所其番に當り候得ば掃除も取次も客對も致し候夫は猶よろしく候得ども其番の節雨戸の明けたてを致し又先生の御用にて家來の外へ出候節は外に人もなく候得ば又順番に食事の用意をも致し候事何

分迷惑なるものと御申候が段々承候御話之様にて御そだち候ては實にそれ等苦勞に被思候も尤の事に候得ば夫らの所私共兩人にて助候てくるしからず唯々あまりによき御生質故此儘にて御歸り候ては誠に惜むべき事其上御在所へ歸り候ては中々此表に御出候半分にも御出精も有之まじく左様にては折角のよき生質も只一通りのよき人物と申位にて御仕舞候事に候得ば私共は少し餘計に身を勞し候とても少しもくるしからず候間何分左様取計らひ候ては如何と深切に申出候大によくも申出候とは存じながら被仰越候御内含の義政殿御耳へはいり候てはよろしからず候故私兩人のものへ挨拶仕候には夫は至極さる事ながらまだ弱年にて自身の存念もかたまらぬ所にては何分他人の中に居候事はいとはしき物に候その上に是迄致しもつけぬ事共も候得ば迷惑も尤に候その助を致し遣はすはよく候得ども夫を以此表に永く引留度と申はやはりよろしくも有之まじく候但花の咲候頃迄暫の内にても此方に居候へば其居られ候規模の有之様に致し遣し度心得に候間必ず〳〵政殿へ對し候て是非此表に永く居れとは申まじくと申候ひし事も御座候然る所舊臘廿五日御酒被下に

て蟻川を同道致し御屋敷へ出掛候留守にて何を御思ひ出し候か頻に御在所へ歸り度由を御申候よし暮方私罷歸候所私へも今日は誠に宅へ歸り度候てこまり候と御申候故今は如何と申候所今少し前程から少々よくなり候と御申候右故夫は私も留守蟻川も留守にてさびしく候故にその様に歸り度も候ひつらんと申仕舞候が其後は兎角御歸りあり度御存念御座候よしにて昨日加藤生を以て御申聞候には先生段々厚く御引立被下候所を左様申候は如何に候得ども何分宅へ歸り候て見度なり候故其段を私へ願ひくれ候様にと御申候よしに付加藤も色々御勸め申初め花を見て御歸りの御つもりなれば今暫らく御こらひ候へとも申候所只今にては花も見たくも無之只御宅へさへ御歸り候得ばよしと御申候よし右に付昨夜ひそかに其御存念の出候わけをも御尋ね申何ぞ此方に居候て心にかゝり候事も候か又同塾の内にて何か氣にすまぬとにても有之候か何樣の申難き事にてもつゝまず御申候へとてしづかに承り候所此方に何も是と申義もなく御迷惑の筋は前條の數ケ條に御座候所夫ともに御自身からは夫程迷惑にも思はぬと御申候得ども何分その義も御苦勞に御思ひ第一に是迄御不

自由なく大きく御成候所にてには
は存じ候得ごも相成候事に候はゞ御生れつきも御生れ付に候得ば何卒御志を
高大に御立させ申行々千百人に勝れ候御人に致し候て御上之御爲めにも御成
り候樣仕度常々御話を申候にも大きなるはなしを致しものかゝせ申候にも強
くいさましき詞などゐらみ候ては書せ申候樣仕候故昨夜もたとへ抔取候て申
候には同じ馬にても種類樣々有之小荷駄に生れつき候もあり乘馬に生れつき
候もありその乘馬の中にも勝れてよきは大名の召馬に成申候もとより駑馬に
て小荷駄より外はいか樣乘たて候てもいかぬ馬ならば馬のりも夫にいかう骨
をも折るまじく又その馬も生れつきての小荷駄ならば小荷駄に成候ても恨も
なく候然るを乘馬の中にても腕爪よろしくかんもよく候て行々大名の乘料に
も成り百金貳百金のあたひにもなり候はん馬を小荷駄に致し仕舞候はおしき
ものに候はずや馬の乘たても駒より致さず候てはやくに立不申人も夫と同樣
よく成るべき人も早くその料見にて仕立ず候ては思ふ樣に參らぬものに候年
を多く致し候て自身にて心づき候頃はもはや勤め等もあり候て脩行の暇なく

候得ば殘念と思ひ候のみにて矢張並の人と肩を並べ居候ゟ外は無之候夫も人
並ゟ上の出來ぬ生れつきならば惜むにたらず候得ごもおまへに於ては馬なら
ば大名の乘料にも成るべき生れに候を駒より乘たてず候てゆく〳〵小荷駄の
列に入候半事甚だ殘念に存候事に候又おまへに於ても往々名馬になるべきも
のを自身よりあたひを下し候は惜しとはおもはず候歟生れつきたる名馬の才
を出し度候はゞ身の苦勞をいとはれ候てはならず候駒を乘たて候を御覽候へ
首綱を引き繩回しを乘中はみをもかけ角はみをもはませくつをも打乘回し候
も出色に致し仕付候事に候其節は馬の身と成候はゞ嘸大儀にも苦勞にも候は
んなれごもその苦勞大儀を致さず候ては乘馬には成り不申候人も夫と同樣人
にまし候苦勞を不致候ては人にまさり候人には成られ不申候なごゝさま〴〵
申候が兎角御子供心には御兩親樣の御側を久しく御離れ候がつらく御思ひ候
事と被思候其上政殿御申候には歸り度成候はゞ年內に也とも歸り候樣にと申
事に候得ば一先づ歸り候て又參り度樣御申被成候私申候には今暫待候て今春
は必ず立歸りをも可致候間其節一同歸り候ては如何や夫迄一出精致しもらひ

度と申候得ば此方に是非居れと御座候得ば夫にそむきは不致候得ども相成べくは一時も早く歸り候て見たしと御申被成候私に於ても政殿御事には左樣申は如何に候得ごもかねゝ〳〵申上候義も有之頗る工夫を仕り何分心面白く御脩行候樣にと希候所思ひ通に參り候はず奉愧入候乍去先頃之御書中御氣遣ひ御座候文學を苦勞に御思ひ御厭ひ候にては決して無之御樣子に御座候但御宅に御出被成度所より此方の諸事も御迷惑に御思ひ候樣御察し申候餘り御歸りあり度御樣子に候故左樣ならば私なも可申上候間小幡へも御出其譯を御話し申被成候へとて今日は晝後なから小幡へ御出に御座候定めて同氏なも可被申上候彌御歸りなれば又御家來の內御迎に御遣し被成候樣に政殿御申被成候如何とも御裁斷奉希候先頃の御內狀の趣は本なから命を蒙り候義に付政殿へは御沙汰なしに仕置候乍去一體右之思召に御座候はゞ政殿迄御申越被成方は無御座候や夫とても實に文學御嫌に候とか御骨折られ候ても御出來かね候とか左なく候とも御不快にても御座候とかにて候得ば論もなく御歸り候が御家內樣にても御當人にても御安堵の譯に候得ごも此度のは左樣には無之但其表を御慕はしく

御思ひ候のみに候得ば御申越され次第御存念の替り候事の有之間敷にも無御座候得ば奥樣ともよく〳〵御相談御座候て何とか御申越被成候ものか又一先御戻り候て其內一御修行ありたき御存念御出候所にて又候御出府候が可然歟乍去此度一月兩月の所をも御迷惑に御思ひ候て其鼻に御歸り候はゞ暫らく御出少々御狎れ候て御迷惑の薄らぎ候所にて御歸り候とは違ひ御懲り候て中々當分其御存念は出で申まじくと奉存候其表宮下抔も有之御兩親樣にて御世話やかれ候はゞ此方に無之とも大抵には御成候べく候得ごも其事專らに修行とて朝夕其內に御出候とは大なる相違も御座候事に御座候其上承り候得ば其表には御同年位の人に志の御座候人もなく寄り合候ても實のある話等致し候者とては一向無之樣承候左候得ば其內にてもぬけ候人に成候事は餘程六ケしく被存候此表にては自身にてその事計りにたづさはり候のみならず寄つき候もの皆義理の詮議のみを致し古今の人物の評論をも致し治亂の事跡をも談じ候樣の事にて候得ば傍に居候ても自然と聞見も廣く成り候事に御座候得ば何分政殿御生れのよきにつけ候ても此度此表へ御出候を幸に唐本の點のなきもの

すら〳〵と御讀め候て四書の一通りよく御分り候程に早く御成候様致し度政殿の御生れにては夫位文學御力御座候と行々御役等御勤候上に如何程かの御益を被得候事と奉存候其上之所は御存念次第如何様にも御上達可有御座候但ものゝ讀候て御分り候迄は外ゟ力をつけ候はずしては叶ひ不申候御内狀にも御まかせを蒙り御進みのつき候様にと工夫をも仕候様仰も被下候義に付如此申上候此上私ゟ尚深く申候ては御親みの情も離れ候とあしく候故深くは申さぬ心得に御座候御養子一條にも他人を本の親とは思はれず抔御申又此度も御膝本のみを慕はしく御思ひ候様の所御親子の御間勝れてよき様に被存候得ば又その仰せ進せられ候事をもよく御守り候はんと奉存候先頃も仰せ被下候通り御次男にて候得ば必ず外へ御出候べく外へ御出候得ば御苦勞なる事も無て叶はぬ事又養子はいや也とて御自身にて一家を御興し候も格別の御辛苦無御座候ては御存念も立ぬ事に候得ば御次男にてはわけてもものゝ脩行等には苦勞をせずしてはすまぬとと申義を何分よく御知らせ申度候鳥渡可申上と存じつゐ又長文言に罷成候御覽も御面倒に可有御座候が何分一

此上私ゟ尚深く申候ては御親みの情も離れ候とあしく候故

御手段所禱御座候箇様私ゟ委細に申上候と申義は却て政殿へもれ候てはよろしくも有御座まじく候間其段も御含可被成下候以上

五　日

天保十一年二月八日

(賢郎は甚右衞門の次男政之助を指す後の宮島嘉織なり)

〔五五〕藤岡甚右衞門に贈る

只今に餘寒去かね候得ども愈御揃御萬福奉拜賀候此表賢郎至極御健にて御修行御座候間御過念被遊まじく奉存候さて近日も申上候通り外稽古等に御出候ても何致せ御歸り被成度御存念は御止兼候御様子に御座候得共先頃少々御風邪氣之節御腹狀をも按察致し候所衆人に珍らしき程によき御腹狀に御座候あの御様子に候得ばよしや讀書少々無理に御勸め申候とても夫にて御不快に相成候等の義は決して有御座まじく是は隨分御受合申候その上段々の御様子を熟察仕候に少々御隣家の保之丞子の様なる所御出候是は私の其表に罷在候頃は一向に無之御様子に御座候が御隣家之事平日親しく御つき合候故に自然と御移り候氣味も御座候かに奉存候兎に角文藝武事ともに人並なればよし格別

少々御無理にも此表に御差置申被成候方御爲と始終之御存候奉と

身に苦勞を致し候事は人並より勝り候ても何分時に取り迷惑と申候思召に候故幾度も幾度も其樣のひくき了簡にては私に於ても望を失ひ第一御兩親樣の思召にも不叶候事人の子たるものは自身の存念をたてず只々親の心を以て心と致候が當然の事御兩親樣の此表に少々も長く御置き修行せさせ申度被思召候を自身の苦勞がいやに候とて其思召に御戻り候ては所謂不順の子と申もの也とて申候得ばその道理は御分り候得共それにても何分苦勞之事は迷惑也と御申候等の御口氣少しく私意を御張り候氣味御座候て其所保之丞子樣の臭氣御座候かに被存候右に付て近日之愚意には矢張少々御無理にも暫く此表に御差置申被成候方始終之御爲と奉存候かねて奥樣にもよく文武の事には御世話も被爲屆候御樣子には候得ども御宅にては何と申候ても御我儘も出候事に候得ば御存じ被切此表に秋迄とか來春迄とか是非夫迄は御出候樣に被仰越候方何れにも可然奉存候是は少々見所御座候事に候故如此手強なる事申上候に御座候右も御腹狀等を見候て決して御不快等には御成候まじくと申所迄見すき候故如此申上候に御座候乍去萬一見損ひ候て左樣御申越され候上にて自然其

事御屈託に相成御不快の御樣子にも御座候はゞ其節は早速に御返し可申候私文事の御世話申候とても何も儒者に御成候樣に御仕立申候と申には無之候只往々御役人にでも御成候節修業おろそかに候ては何分本手の事御出來候はず御自身人の下に御立候のみならず他所等の掛合に及び候ては御國の御恥辱に相成候樣の事もまゝは御座候事故其樣の事無之事の上に於て慥かなる道理の早く御見え候樣に仕度存念に御座候右故に何分四書の講義は御差支なく御出來又無點之書すら〳〵と御讀め候位に仕度ものに御座候此事も容易ならぬ樣にも候得ごも賢郎は御才も有之又その御勤め候事はよく御懈怠もなき御性質に御座候故一年か一年半には御仕つけ候半と存候事に御座候賢郎此程も御在所へ歸り候ても必ず人並には精を出し候と御申候が段々の御樣子を見候に其表に御出候ては何分右之箇條の事も徐程御六ヶしく候半と奉存候右前文之愚意をも申上候に御座候奥樣抔には右にては必ず荒療治の樣にも被思召候半なれごも藥めんけんせざれば其病いえずとも書經にも御座候又書初にも御書せ申候虎の穴に入らざれば虎の首は得られ不申候得ば其段は御勘辨に可有御座

候義と奉存候今晩御近習之衆出立に付此狀小幡君にて急に相認め差上申候前條之義御熟慮之程所祈御座候時候折角御自愛可被成候奥樣へも乍憚宜しく奉願候以上

二月八日　　修理

甚右衞門樣

（五六）高野車之助に贈る

天保十一年二月十日

貴札致拜見候如來示新歲之御慶不可有盡期御座候彌御障無御座御超歲之條目出度奉賀候爲年頭御祝詞預御帋面不淺辱次第御座候恐惶謹言

二月十日　　佐久間修理

高野車之助樣　貴報

尙々御再書之趣にては尊大人舊臘は兎角御不快勝に御出のよし御心配察入候事に御座候春來は如何の御樣子や暖氣に向ひ少々宛は御快方に御座候や承度候折角御衞養專一と奉存候

一近年俗事繁多に成行終身何の成業もなく御果候はんかと御嘆息に候得共君父等の爲に致奔走所勞に代り候事臣子の當然此外に無學問此外に無事業若又是を外に致し候事有之候得ば卽此異端卽是邪道に御座候是は大切の事に御座候間能御覺悟御座候樣禱候近來左樣存候俗人雅事を爲す皆是俗事雅人俗事を成す皆是雅事と人眞似に足下抔實學に志しながら俗事繁多抔御申立候事散々不可然尊大人も兎角御不快勝也最早是より內外之御引受如何樣にも力を被盡候事簡要事と奉存候陸象山異學には候得共勝手之出入を蒙り夫より學問上り候趣も語錄に見え候得ば只是等は其人之著眼に依候事なり意を被留候樣所祈御座候

實學に志しながら俗事繁多抔御申立候事散々不可然

一北山之兩人段々御世話被下千萬辱次第乍此上あしき事は何分にも御叱り御引立被下候樣希候藤岡、小幡兄弟、草間抔は如何の樣子や少々宛は上達と存候三澤、金井兄弟は如何やよく折々書狀遣吳候得共此方よりは誠に不沙汰に御座候御序も候はゞ是等宜敷希候

（北山の兩人とは象山の甥北山安世同藤三郎をいふ）

一先日早速可申進之所種々取込之筋も有之致延引候別之事にも無之其表政

御政務の批判を被致候よし如何敷事に候

府より此表之竹村迄内々申来り僕へ申通じ僕より足下へ内々心付候様にと申事に御座候が何か足下折々門人を集め會讀輪講之席かは知らず御政務の批判を被致候よし如何敷事に候間以來右等之事無之様被愼候様にと申事に御座候當今之利病をも己と研究致し候は讀書家當然之事に候得ども御政道を引き候ての論は決して有間敷事に御座候殊に幼年之者抔へ對候ては尤も不宜候間よく御心付可被成候其邦之大夫を不誹共申又明朝之學規にも第一之禁制に御座候間返々も又と無之様所望御座候苟子子道篇に子路之魯大夫諫而狀す事禮かと伺候節孔子御答無之子貢之只諫而狀する禮かと伺候には非禮也と御答御座候事御座候が誠に人之邦に居候にはかく有度事と存候一毎度申候事に御座候が書簡向抔は世俗通に有之度存候足下之才を以人並の事出來ぬと申事は決して無之事但心を不被用候故之事に御座候餘り屢致し候様に候得共切々偲々不得不如此又前言を申ね候右之手本には白石書簡抔宜候乍去取捨無之候ては不叶候

白石書簡抔宜候

一鬼神論書鎌原先生寫し被取窪田へ參り居候とか承候御一覽は如何綿貫氏

鬼神論

天保十一年二月廿三日

も見度と申居候が此方には副本無之候故御廻申兼候今度被歸候竹村氏も一本被寫申候未だ御覽無之候はゞ是よりなり共御借寄御覽之上御論も御座候はゞ被仰被下度候以上

〔五七〕藤岡夫人に贈る

政どの御事に付申上候

追々のどかに相成候彌御きげんさまと承り御めで度存上候政どの御事もよくいつも御健にて御出で候間御安心に可被思召候さて此程小幡にて承知仕候へば政殿御外出の節私方にては小遣ひ御あてがひ不申候に付御不自由に候はんとて金子御送り小幡より外へ御出候節は何程にても御懷に被成私方へ御歸り候時は小幡に御あづけ御戻り候様に被仰越候よしいかさま世上並方の人の母親抔のりやうけんにも候はゞ左様の事御座候てもあやしむにたらぬ事に候へごも御前様御事は前年其表に罷在候間折から罷り出候て御様子をも相伺ひ御見識の所をも毎度承はり候に世上なみ〳〵の婦人方とは格別に御違ひ候ても

のゝ道理を御見つけ候にも大ていのわれは顔に存じ候男子も及び候はぬ程に御座候故是迄實に珍らしき御方と存じ居候然る所前文の御次第にては乍恐世上並方の御ふるまひと奉存候御平生の御様子にてはかゝる御まちがひは有御座まじき御筈に御座候がいかなる事にて御座候や乍去外の事に無之是迄御ひざもとにのみ御おき候御愛子を一たん御手をはなされ遠方へ御出し又私方の様子をも御聞被成いか斗不自由なる事に候らんと御恩愛のあまりにかやうなる義も思召つかれ候事と奉存候昔よりも人の親の心のやみとも申候へば隨分御まへ様にも御尤もとは存候へどもしかし是は全く思召ちがひと奉存候政殿御身に御くらうのなく御ふじゆうのなき様にと被思召候はば御手元にさし置れ候共又小幡、樋口抔に御頼み御置き申被成候方可然候讀書の御修行許に無之此表に御出候てもあしき方の御案事のなく御わがまゝの御出來候はぬ事を御見込にて暫にても私方へ御遣はし申被成候事に候へば何分私の左様きびしく仕候存念をも一應御聞届け被下度候私事も不肖には候へども是迄數年此表に罷在此表の様子をもつぶさに存じ申候諸國より藝術の修行

とで諸方の師匠元へ參り居り候年わかき人をもいく百人と見候が兎角それ迄そだちの不自由なく候て此表へ罷出金錢にさし支なき様なるものは多分は修行の事も上達致さずまゝ放蕩ぶらいのものと成候事毎度親しく見る所に御座候是等も皆その師匠のなほざりより起り候事故私に於ては宅に居候人々をば何とぞ其様の事のなき様に暫らくにても居候ならばそれ丈の甲斐は御座候様にと存候事に御座候幸に蟻川にても林にてもみな貧家の子に御座候故先々何事も仕よく候乍去それにてだに中には餘りに不自由にも候はんと氣の毒に存候事も御座候わけて政殿御事は是迄ゆたかに御おひたち世の不自由など申こと何事か御存知もなく候位に候を御外出の節にも小遣ひ御預け不申候事は實に御氣の毒とは存じ候へどもこれも見込の御座候事に御座候政殿最初私方へ御出のなき間大木才治とか一同書畫會見に御出の節才治が御指南を申候とてみち中にて何か御とゝのへあるきながら御上り候と蟻川へ御はなし候由承り候此様の事よくまゝ有之事に御座候あしき友のあしき方にみちびき候はこれ計の事には無御座候右故是迄塾生には金圓をば預け不申候又政殿御事も獨に

て外へ御出候事は氣遣はしく候と申上候事は此わけに御座候右の所故に御外出候節も金錢をば御預け不申候事に御座候御屋敷へ御出候節なども途中にて萬一はきものゝをきれ候はゞ懷中紙にて御たて候がよろしく又雨のふりさうに候へば傘をば持せ申候へどもし自然も急雨にて候せつはやはり御ぬれ候がよしと奉存候御小遣のなき害はその位の事に御座候へども其害のなく御不自由のなきがよしとて御懷中に金錢御座候ては思はぬあしき事など御見習ひ候とき候あかならばたとひうるしのやうにくろみ居候とも一度よく湯に入候へば是迄御生れのよきをも散々に致し實に取返しの出來ぬ大害と奉存候外よりつ隨分きれいに落も致し候へどもあしき事の心につき候は中々よういに洗ひ候ても落ちぬものに御座候右等の事も私には隨分心を用ひ候て仕度義も御恩愛に御溺れ候て私へは一向御沙汰なしに右の通被仰越候ては御まちがひには無御座候や孟子にも一日あたゝめて十日ひやし候へば生じやすき物にても芽をばふきかね候と御座候私方に御出候節のみ御世話を申上候ても外へ御出候御氣隨が出來候ては孟子のたとへの如く何分御ためになるまじく候へば不安心の事御座候て御預り申候よりは一向に御そしやう申候方に仕度候其表にても御座候はゞ御懷中に常に何か御座候とも何も害も無御座候へどもこの表の義をその表と同樣と被思召候てはちがひ申候此義は何分よく〳〵御勘辨の上早速被仰下度候此表に御出候て御益の無御座候よりは其表へ御歸り其御損の無之方却て可然候先日甚右衞門樣迄申上候義も御座候間尙よく御內談所祈に御座候かしく

二月二十三日

藤をかおくさま

〔五八〕山寺源大夫に贈る

長野市　和田榮二氏藏

天保十一年二月廿七日

御囑託の板下

朶雲薰誦仕候如下敎可怪春雪右故乎氣候も不順に御座候所倍御淸超奉淀慰候竹村氏昨日之著此程之雨天にて途中差支等は無之やと不安心存居候が御一席之御交代も昨夕無撓に相濟候由に御座候得ば彌相違も有御座間敷候扨此程御囑託之板下萩原方へ遣候所此節遊歷中留守にて事相辨兼候乍然右に似寄候板

下認候ものも御座候由に承候故星巖並に雕工抔共相談之上可申上と存今日迄延引仕居候所御催促にて大に悚惕仕候早速一二行も爲認可入御覽候又萩原にて無之候得ばいつその事序文は御自筆にても可然や共奉存候晦日には藩邸近邊迄用事御座候間何れ其節登堂得拜面可受命候

二月廿七日

懼堂大兄座前

天保十一年三月十日

〔五九〕　八田嘉助に贈る

啓拜復

追日暖和の氣候に相成候倍被成御揃御清勝奉拜賀候小生義も甚輕健に罷在候間乍憚御省慮可被成下候然ば尊大人御壽筵はいつ頃に被爲在候や此品如何敷

松代町　八田彦次郎氏藏

候得共壽幣之名も御座候に付聊拜賀之印迄呈上仕候御叱留被成下度候外に兼ても申上候通此表諸名士之詩畫取集入御覽度既に先日靄崖と申（此節都下にてよく被用申候）畫工に喬松拱壽の圖と申もの爲相認其跡に諸家の詩文を附け差上度處々頼み置候處今便の間に逢兼候に付是は跡より送上可仕候小生も近來は文章致廢絕候得共尊家之義は又格別之事に候間兩三日前拙文一篇相認候然る處引續き少々取込候義有之淨寫に暇無之是も又今便の間に逢兼候何れ乍兩方近便に相附し可申候先は御壽筵之御祝右之延引申譯旁匆々申上候餘は期後信

天保十一年三月廿七日

靄崖と申畫工に喬松拱壽の圖と申もの爲相認

三月十日

修・理

嘉助様

尙々今信は別段尊大人へは不奉申上候間乍憚宜敷奉願候總て御家内様へ可然御致意被成下度候以上

〔六〇〕　高野車之助に贈る

本月十二日付之貴答致拝見候尊翁之御病容兎角いつも御同様の由扨々不堪懸念義御心事御察申候先便密々申進候政府内沙汰之義云々御細答右にて平素之御用意も一々可然甚安心且又不勝歓喜候彌以無詮事は成丈御晦韜有之可然候自己さへ完然に御座候得ば凡そ世間之榮辱炎涼は實以狂風沛雨之落葉にて芥滞とするに不足事に御座候御細答致拝見誠に致安心候早速右之段可申遣候

成丈御晦韜

北山二甥之義段々辱

一北山二甥之義段々辱安世事は被仰下候趣にては又不一方御世話に御座候右之浮躁は從來之病に御座候間唯々沈實に無之ては叶ひ不申様懇々御申被下童穉之心にも成程と申存念出候様に致懇禱候何分所禱御座候宮下氏云々之話世間衰颯之風義斯人迄に及び候事かと致嘆息候乍去此方に右を取候もの有之やこゝの所反省の場と存候姉の方へも御宅へ懈怠無之様に申遣候間御宅にては何分復讀專一に希候何れ不遠此表へ引取可申候

（專精老住は東禪寺村禪寺の住持空山を訪ふ詩象山の二月友にて二月廿九日自殺せり）

一專精老住之義傳聞驚入候事誠に致悼惜候事に御座候何故の義や的說御聞認御座候はゞ何分被仰下度奉賴候

一和合院歸山此間僕へも書狀相送候書は大に上り申候折節御集會候や奥山鳳鳴も御同前致追悼候是も薄命漢追々南都にて志を得かゝり候處劇痢を受沒し候趣に御座候氣之毒千萬に御座候

一白虹之義被仰下候が未だ草間氏抔へも不承候乍去是迄白虹之事は見も聞も致し候が其歳何の障も無之候左候得ば此度のも何も案じ候事には有之間敷と存候

一御約束之舊文先日漸一日の閑を得認め申候乍例不出來に候得共先是にて責を塞度候何も御返事迄匆々以上

三月念七日

高野賢友

猶々此一封關口生へ御屆被下度候

啓拜復

〔六一〕八田嘉右衞門に贈る

天保十一年三月廿七日

松代町　八田彦次郎氏藏

其後者御左右も不奉伺候漸長閑之氣候相成候益御康寧被爲入奉抃賀候然ば先達て奉伺候御賀筵は最早被爲濟候御事と奉存候兼て申上置候諸友之詩篇取集

拙文漸認候に付呈上仕候

め是非共其御慶筵に呈し度處々促し候得共文人は誰も冤角づるけ候ものにて存外大延引に罷成候故是は押付竹村氏も交代に相成候得ば夫に託し差上可申奉存候先私拙文漸認候に付呈上仕候御唉覧可被成下候兼てより先子之多年御厚情を蒙候義と彼凶歳に御精力御座候義とをば閑時記し置後代へも傳へ度存居候所幸此度御壽筵に付右之荒增を相認遙に觴を捧げ候義に御座候此表一齋翁始め諸友へも此文見せ候所いづれも皆御徳誼を感服致し候事に御座候先は緊要而已申上候餘期後信

三月廿七日　　修理

嘉右衛門　様

再白恣水園の御額之義も記憶仕候得共文人の字何さま好字面に無御座候故先子之詩中に御座候養井亭之字を以養井翁と奉稱候事に御座候此段も鳥渡申上候今便取急ぎ候故別段嘉助君へは不申上候間乍憚御序可然御致聲奉願候又云御近所の事也拙文をば立田氏御招き爲御讀被下度私も此人へは見せ度奉存候

〔六二〕山寺源大夫に贈る

天保十一年春か

（錫命師は竹内八十五郎なり）

松代町　丸山熊男氏藏

又拜此程之御禮乍憚皆様へ可然奉冀候

御手敎難有薫披仕候冤角氣候も不定候所愈御輕健浣喜不過之扨過日は登堂不存寄御款待に預り十分醉飽且夜に入御提灯迄御借與被下萬々難有奉心感候扨蒙命候徠翁之書一體昨日相尋可申含之所無餘岐來客抔にて遂刻限遅く相成不果其意今日も晝前に相索し見候半と存候所又々賤幹終高价之參候節迄出廬來かね候に付先高价をば本郷迄相廻し返りに立寄り呉候様申置柳原丁寧に詮鑿仕候得共見當り不申候尤其中閒之者之よしにて壹圓三方の軸物と申義をば申聞候もの御座候今日は此天氣合故か大分店を開き不申所幾ヶ所も御座候得ば必其等の内にても可有御座や覚れ一兩日之内又々相索し見可申候相分次第自是可申上候白紙十張生絹一幅高命之趣奉畏候御易き事に御座候扨又廿九日頃には天氣次第御來過も可被成下哉に仰を蒙り難有御待申上候此程錫命師も御一同に被訪候様に被申候間御同伴なれば尤も妙に御座候何分好天氣に致し

度ものに御座候先は此間之拝謝旁匆々奉復候都容面悉

廿六日

再白雪庵の書御垂恵難有奉多謝候御提灯も兼ての命に従ひ高価に相頼返璧仕候御納させ可被成下候昨日慎七郎一寸入御電矚候一刀遂先取入申候少々手前かも品物差遣し壹圓半餘にて手に入候如何可有御座や拝眉之節尊意相伺度候以上

山寺仁兄　座下

啓　拝復

（六三）鎌原桐山に贈る

天保十一年春

（此書簡桐山漫筆より摘錄前文後文は省略せられて無し）

今春板行之江戸名家一覧と申小冊到來仕候所其内既に賤名をも錄し有之候不勝一唉風と出來仕候御一粲に奉供候痛く御斧正奉禱候尤此小冊儒家而已を集め候には無御座詩歌連俳書畫技藝之類迄到て廣く集め候故總計にては千餘名之人數に御座候詩中萬餘指と申候は此義にて御座候有レ人。惠。今春所レ刷印レ記都下諸名家字號冊子。閱レ之賤名亦收在二其中一。戲題二三詩一

都門稅駕未二周歲一。好事小書傳二姓名一。堪レ唉撰人籠絡廣。不レ分二燕石與一レ連レ城。
一張清琴萬卷書。從容自適見二眞腴一。假饒流俗唉二迂闊一。不レ害二人閒一丈夫。
不レ好二功名一不レ近レ財。吟レ風弄レ月號二生涯一。卷中英俊萬餘指。誰與二象山一同二此懷一。

（六四）三省に贈る

天保十一年五月四日

（三省は姓不詳）

曩者は御墜簡辱殊に被懸高意京師かの之御土産として重寶之兩種御貶與被下珍感不淺奉多謝候乍去御多事之御中何共痛入候次第に御座候金子壹圓御送り慥に落手令兄への御贈り物も卽日御屆申候右之御禮御挨拶早速得貴意度存候所乍例種々紛沓不得暇隙心外之簡忽悚息不少候又佐竹周藏出府に付同人かも貴簡遞致乃致拝見候先以夏氣漸熱に向ひ候所法躰彌御安和之條不堪欣慰且縷々御懇切令兄之義御囑託致承知候御謝辭も厚く被仰下是は却て痛入候又壹圓御送り慥に御預申候右之義も色々御心配之御樣子に候が夫には及び不申候先便鳥渡得貴意候子細はもし御手之御都合に出來候ならば簡樣に候と申候のみ何にても市情を襲ひ兎角申候筋にては毛頭無之候得ば決して御心配は御無

令兄の義御囑託

用に希候又御取替に相成候迚も又聊の事に候得ば是以御配慮には及び不申段々被仰下候御歸山御雜費等にて此節も御不都合之よし別して其御中兎や角御心配に預候ては却て僕の心事共且吾致し候得ば向後は何事も御配慮被下間敷候此度之壹圓にて貳方の御預と相成申候命に任せ春に成候ての始末紙尾に錄し懸御目候間是にて御安堵可被下候小費之乘と申處御承知被下於僕も甚大慶此度の御屆物一々早速御渡し申候其上にて右三朱之義左樣申候所令兄にも可也御悅之樣子に御座候都ての事僕なの申處にて萬端御當人にても御引詰の容子に御座候最早八月迄と申三四ヶ月の事に候得ば無事其期に御歸省御座候樣所祈御座候扨又胡桃肉澤山御惠投（御贈物は向後は平に御斷申候）被下何共々々毎度痛入申候高情厚く感謝乍憚北堂前へも宜敷御謝辭被仰上可被下候先は緊要耳匆々及裁復候前書御卽答に不及段は仁者御寬宥被下度候惟望珍重

端午前一日　　啓　拜復

三省仁友足下

再白濂洛關閩書朱文公節要兩書之價御問合に候が節要之方は如何か濂洛關閩書は張伯行刊行之外板本有之間敷と存候何れ書肆に相尋ね後信報知可致候猶又其外何也共此表の御用向無御遠慮可被仰下候

又白翰墨如何さま燦然と美事之事毎度愼七郎抔にも見せ致感心申候令兄之御話には御在京中國歌も御修行御座候とか其内御示及被下度希候

（塾生長谷川愼七郎）

天保十一年五月十七日

〔六五〕高田幾太に贈る

松代町　原淳造氏藏

打絕御無音簡忽之至申上譯方も無御座奉恐惶候追日暑色罷成候得共御擧家御壹是に彌御佳勝可爲入と奉遙祝候隨而拙生義も不相替健在仕候間乍憚御放念被成下度候扨春初には縷々御細答殊に御繁劇之御中北海產の海老澤山御寵貺被成下御懇情不知所謝難有奉存乍然何共懼入候次第に御座候折節年頭來賓御座候て早速調味差出し候處何れも珍しがり甚饗應に罷成吳々も難有奉多謝候然る處右之御請も多忙且懶放にて大延引今日と罷成重ねて悚惕仕候義に御座候惟幸に御宥恕可被成下候山寺氏も存外之御役替明十八日出立右に付段々申譯拜謝旁御左右相伺候此品如何しながら令愛君之御慰に拜呈仕候御叱留是祈

山寺氏も存外の御役替明十八日出立

書簡　玉池時代　（六五）高田幾太宛　　一三七

追々炎暑惟爲衆千萬御自重奉冀候頓首

五月十七日　　啓　拜手

高田盟臺　座前

猶々乍憚皆様ゟ宜敷御致意奉希候令弟いつも諸藝御出精に御座候や當春の素讀の調にも大分よく御出來のよし珍重之至に御座候乍憚よろしく希候

〔六六〕　矢澤監物に贈る

松代町　矢澤賴道氏藏

以上蠹蝕不明迄罷越風と承り候義に付唯呆果て候て嘆息不堪の餘りに極密申上候□□近頃下谷御徒士町邊に住居仕候何の亨（とほる）姓氏は覺とか申試剪なしの形劍術を指南仕候もの御座候所此もの氣合を數字不明御信向被爲在嘉兵衞清記兵助にても最初被遣候かにてつゐ右の融へ（融とは此字を用ひ候や否未詳）被遊御入門候に御相違無御座候由誠に膽の刻れ候御事と嘆息仕候愚意に奉存候には右之者定めて上手名人にも可有之候如何樣の□□□昔之佐々木吉岡抔の如きものにも仕れ一人に敵し候小藝に御座候右を只今諸侯方之御内にても天下之御人望の被爲在候

天保十一年か

右の融へ被遊御入門

御身に乍被爲入輕々敷右等の御振まひ被遊御座候御事乍恐さりとはけしからぬ御義とのみ奉存候夫共に未だ御少年にても被爲入候はゞそれは夫にも相成可申候得共最早知命の御年にも被爲向候て乍被爲入末藝之小伎に御門入御座候は乍懼何事に御座候や其樣の御隙も被爲入候半には大道之上に何程も何程も御研究被遊候御事も御座候半に夫等の事は一向御沙汰も無之候若又御眞實に御大政に御心被爲止候とか文武之御教導にも御身を被爲入候□□□ものにも御座候はゞ決して右等の義に御顧みは有御座間敷御事と奉存候夫共に御大政にも御心懸御厚く文武御教導も誠に被爲行屆候て總ての御事に恐ながら外ゟ何共申上樣も無之程に被遊候ての御上に候はゞ夫も又一道共可被申上候得共近來に至り候ては申上候も恐多く候得共何事も何事も御等閑の樣にのみなりゆかせられ候ての御上に御座候得ば益々御委之上にもいなものに御座候頓て世間に聞へ候ても唯々愧ケしき事に奉存候夫と申も畢竟御側に無學無識のものゝみ居候所よりの事と被存候併是ゟ論じ詰め候と乍憚御一席樣之御責は免れさせられ難き御事と奉存候最早此度之御事は既往と相成候得ば御取返し

末藝の小伎に御門入御座候は何事

には相成かね候唯此上に右様之御振まひ不被在候様の御計策奉願度恐入候得
共極密申上候事に御座候何分にも御國家之御爲に御座候得ば幾重にも御熟慮
御座候て此後を御認被爲在候様仕度奉願候緊要耳申上縮候唯折角時氣御厭被
遊候様奉祈上候恐惶頓首

不染老臺閣下

啓頓首再拜

尚申上候右之義北澤叔藏方にて承候に付御側向抔のものは何と心得居候や
と存じひそかに一兩輩を探り見候所皆内心には嘲り候様子に御座候左様致
し上へ向き候てはふつと口をつぐみ候事と被存候君臣の間も箇様にては實
に恃まれぬ事と奉存候何事も唯嘆息のみに御座候以上

又申上候過日賤母が蕗薹の苗献じ候節何が之御品戴き候とて深く難有が
り申遣候此段乍序御禮申上候

天保十一年
七月

（桐山漫筆

〔六七〕　鎌原桐山に贈る

近頃大阪が勤番に此表へ參り居候銅座野村乾一郎と申者金銀座は皆此表に居住掌り候故大阪住にて此表へは年々勤仕り候

より摘錄す前文後文省略せられて無し）

近付に相成時々往來仕候此表至て古器物を好候癖御座候て種々
之珍物を藏有仕候勤番の此表へも數種持參罷在候上に近比無類の名品を此表
にて手に入申候四五日已前態々參り一覽仕候所是は誠に珍品にて成程外に類
も有之間敷被存候爵と申古代の酒杯に御座候其形狀大略右の如きものに御座
候質は銅にて御座候所其色青綠に變じていかにも光澤御座候て陶器の樣に相
見へ申候時代を承り候所殷の代の物のよし如何にして三千年を經候て形質虧
損仕らで吾國の今に傳はり候やらん不思議の事に御座候模樣の樣子萬端博古
圖に出候所と少しも相違無御座中々贋物抔の手の及び候所に無之唯々感心仕
候外兩漢の品も有之永平寺の開山道元禪師宋より持歸りし端溪の硯抔も妙品
には候得共此爵には寄付も不仕候

（圖は略す）

天保十一年
七月廿六日

〔六八〕　山寺源大夫に贈る

松代町　丸山熊男氏藏

本月十日之御一函昨廿五日上邸へ罷越北澤君にて拜接難有薰展仕候先以炎暑
中彌御淸穆被成御揃候御便奉伺欣幸不過之奉拜賀候扨拜別以後は方外之御疎

潤惭悚不少候尤北澤君にて時々御容子をば詳悉仕御歸路折悪敷雨天勝にて既に御逗留數字不明が却て御□□御不得手の御□様方には結句御爲□□宜しく候ひし抔迄も承候事に數字不明速に御榮歸之御悦をば申上度存數字不明つゐ彼此と多忙に取紛れ以之外之御無音申上思召之程も如何と奉存候所に縷々不相替御懇□被成下今に始めぬ事數字不明之御量深く嘆服仕候義に御座候北堂前大御安心之御樣子外數字不明冤もあれ角もあれ此御一事のみは誠に御數字不明に不勝事にて第一尊兒之御大幸と數字不明候義に御座候

一家母姉姪輩も健在之由蒙仰何ゟ降心之義千萬奉多謝候扨又御歸着之節も品々母方へ御垂惠被成下候よし何共御□□御中に奉痛入候御事深く難有奉感戴候宜敷御禮辭申上候樣にと母ゟも申遣候事に御座候千萬心謝

一母心躰認諸事恐懼戒愼候樣御誨喩多々奉謝候心付候得ば心付候程是等の工夫難く相成候には困りはて申候心付候はぬ以□は總身麻木之如きもの□□其身に切なる疾痛痾癢を數字不明なきかの覺へも數字不明候所心付候て纔かに麻木を免かれ候得ば唯今迄存じもつかぬ場所に堪へ難き疾痛之□□候事を覺へ候樣に奉存候冤角吾輩之當務は誠意之事と被存候事に御座候

一歐陽□□之義委細辱命難有奉存候□□も折角岡村へも□□仕候義に付成候義に御座候はゞ何卒□便之節北澤君迄御送被成下度尤も寫し取に相成候□□庫中之蠹を飽しめ候程には有御座まじき歟數字不明何分所願御座候

一白井□とか申劍客之事御怪み被仰遣候が是等の事私底何共か共申上べきやうも無御座候

一旭齋御訪數字不明て云々被仰下是は隔地といへども御□□に御座候子習子存東陽諸君時々御往來數字不明座候半と神飛に不堪候御名論御韻事も數字不明處不少と奉存候御序も候はゞ御洩し聞へ被成下まじきや奉願候

一方望溪集涉獵仕候所□□□の逸事一道見當申候定めて御承知之事共奉存候得共曩者拜借も仕候年譜之内數字不明不申候故一寸抄出兼てゟ御尸祝も御座候數字不明呈覽仕候是全く始にも申上候誠□工夫成□之所と深く感服仕候事にて此一關を□□不仕候ては畢竟小□の歸を免れ難き事と奉存候

一近來陣元□の草書長幅風と見當り先づ手數字不明頗奇品と各評し候事に候

が□無奈難□□□耳是のみ慨事に御座候
一御發□以前差上置候武經說□大全の吳子一本慥か御擲返被成下候事と心得
罷在候所近來曝書仕候節右の一本のみ見へ兼候自然も御藏書中に紛れ御行李
中に入り其表へ參り候義には無御座候や自然も左樣に御座候數字不明宜敷候
が便風に御附し被成下度奉願候千萬□□に御座候
一兩三日中便も御座候やに承り明日は又洒侯の方へ被招候て罷越候數字不明
御返事申譯旁匆々裁此紙候尙申上度事も御座候得共認ものも少々有之旁申殘
し候尙待後信數字不明暑爲衆千萬祈珍愛

懼堂盟臺座□　　啓　拜復

七月廿六日

再啓乍憚皆々樣へ宜敷御致意可被成下候御數字不明之御詫言も可然奉願候
以上

天保十一年
七月廿七日

〔六九〕綿貫新兵衛に贈る

久々打絶御左右も不奉伺簡忽之罪難遁存候乍然時々□□君にて御容子承候處
先以彌御淸適被爲在珍重不過之奉遙祝候□□君にても當年は大に御出來にて
麟兒御誕生盟臺にも嘸々御滿悅と存上候其以前旣に端午之儀幟迄も御送り候
よし御前知之程いかにも感服仕候義に御座候扨過月初句は御懇書其後又何よ
り好物之香煎御惠投被成下御芳情厚く難有不知所謝候不打置賞玩塾生輩にも
配分仕候事にて家內中誂れも膏澤に潤ひ候事に御座候乍憚右之御禮辭尊嫂前
へも可然奉希上候□□轉役之御見當至極左樣と奉存候□□子又々出府にてそ
れ丈の策略ありや否御よめかね候よし是又至極御同意にて此上の處も入らざ
る事ながら杞國之憂に堪へず罷在候鬼神論も鎌原先生より御借受御讀過被成
候よし御過譽は甚恐入赧顏之至に候得ども右は少々愚者之一得にて左樣申候
得ば大言之樣にて恐入候得共近年來程朱純粹之學に歸し候て纔かに程朱を
翼仕候は彼文に御座候樣奉存候易萃渙二卦誠に鬼神を論候斷案と被存候此二
卦無之候ては右之論は出かね申候右に就候ても易こそは誠に神明不測の經典
と奉存候近來邵子之經世書全本を得候て性理大全中に收り候は全本にては無之候研究仕候所又希代

近年來程朱純粹之學に歸し候て纔かに程朱を羽翼仕候は彼文に御座候

に面白きものに御座候其外大學格致之訓に於て舊に比すれば大に力を得候事
御座候て近頃手に取り候如く見出し候物理數百に下り候はゞそれをその儘詩
に作り候も最早五十餘篇に罷成候兎ても御面話は出來不申候得ば近便右之詩
にても錄し入御覽可申候文章も何か呈覽仕候樣に蒙仰候得ごも手錄仕候隙無
御座候間手隙御座候迄御訴訟申度候廣き都下格別之君子者有之や御尋に候が
成程廣き場所に候得ばありもこそし候はめご是と申人も承り不及候從來學校
の敎も無之候得ばにやいづ方も〳〵傑出のものは拂底にて嘆息此事に御座候
餘り御無音恐入候故多忙中ながら過月の御返報戴物の御禮御左右伺旁申上候
尙折角時氣御厭可被成候□□達へも乍憚可然御致意奉禱候以上

天保十一年七月廿七日か

七月廿七日　　東陽盟臺　梧右　　啓　拜手

〔七〇〕　水野瀨兵衞に贈る

打絕御疎濶背本意候今以秋暑退兼候得共尊大人御始め彌御淸穆に御座候や承
度候琴事は其後は如何に候や定めて不斷御玩と存候去年來又々御打立ても候
や何ぞ御新得は無之候や御文通こそ致し候はね琴取出し候度には必ずいかに
御出候やらん抔存じ出さぬ事もなく候何ぞ御考も候はゞ被仰下度候扨此頃風
と承候所此節宅の稽古甚衰廢にて貴君始め御出席も無之候よし其子細はいつ
の頃にや金兒氏と八田氏と何か申合候事候て夫〻互に相募り金兒殿も遂出ら
れぬ樣に相成候やのよし定めて御承知之事と存候乍去尊大人の御事は先子〻
之御古老にて候得ば稽古之義に付不爲め之事も候はゞ御異見も可被仰又私へ
も仰も可被下候の所左も無之候得ば全く唯風說のみの事にや何れにも氣遣は
しく候故貴君迄御問合せ申候自然實に右等の事御座候はゞ最初〻の始末を乍
御面倒被仰下度候夫により中を取り候て雙方を和熟致させ只今迄の如く出精
致させ度候事に御座候此段何分御賴申候乍憚尊大人へも宜敷被仰上被下度候
殘暑折角御凌可被成候多忙中用事のみ匆々以上

琴取出し候度には必ず御出いかに候やらん抔存じ出さぬ事もなく候

水野賢友　梧右

七月廿七日

啓　再拜

〔七二〕　三省に贈る

天保十一年七月廿七日か

松代町　三井圓二郎氏藏

是は則第一之學問

久敷御安否も不承朝よひに琴取出し候にもいかに御出候やらん抔存じ出さぬ事も無之候處に本月八日の御一函佐竹氏ゟ相達し欣然致拜展候然る處御歸山後□御腹狀御失調のよし扨々驚嘆之御事に御座候いかなる事にや候と佐竹に承候所兎角御氣分御塞ぎ候よし散々之次第何分にも性命は萬事之根本に候間御心胸をいかにもくわらりと御放開候て御養生候にしくべからず候邵堯夫先生之梧桐月白懷中照楊柳風來面上吹抔の胸懷を御學び候はゞ何にても我とわが心を苦しめ候樣の事は有之間じくと奉存候何分此の所御修行候樣所禱御座候是は則第一之學問此外に學問は無之と小子は相心得候事に御座候

一乾杏肉澤山御惠投被下千萬辱次第殊に嗜好之品にて吳々も不堪感謝候

一令兄之御事に付縷々之御懇辭委細致承知候私方へも御出候て去月晦日頃出立致候間兼て約束之通り支度致し候金子借しくれ候樣にと御申被成候に付來る八月迄御見合せ候ては如何と申候所中々御承引無之達て御歸り被成度御申候に付佐竹共內話仕候所御宅にても只今迄珍らしき御長逗留に付もはや御歸り候てもよき樣に御覺悟候と申候に付夫々金子も御渡し申候て都合貳兩貳分貳朱に相成候て御路用は御出立の節上げ可申と申候所其後承り候得ば先又暫く御逗留御座候御含之よし察し候所兎角に御小費等をも筋合を申候ては御引つめ申候故に右等の御計策も御座候やらんと被察候乍去精々貳兩金之出入に御座候得ば聊の事に御座候夫にても又暫く此表にて御修行と申せば所謂一失の一得とか申ものと奉存候其上も尙御つり出しも被成度御注文も御座候ひしが佐竹に申含め其謀略をば打破り申候得ば先夫は夫切に相成申候御取替之分前に申候如く貳兩貳分貳朱に御座候此度御送り之壹兩貳分慥に落手尙壹兩貳朱殘りに相成居候左樣御承知被下度候毎度御母樣御伯母樣ゟも御懇切に御傳言被下奉謝候尙又宜敷御致意被下度候多忙中奉復迄に如此御座候唯折角御保重所祈御座候以上

三省賢友足下

七月廿七日

啓拜復

再白本書に申進候通何分にも心上之御工夫専一と存候御病中は書物も御多讀は入らざるものに御座候四書小學近思之類一日に兩三章づつ寛々と御讀候方可然候如此候得ば格別心思を勞し候事も候はずして自然と心を維持するの妙御座候ものに御座候何分如此に兩三日も御試可被成候此度御作御見せ被下感吟致し候御草稿は其儘御貰申候御句調之所別段存念も無御座候但恨むらくは悽惋に過ぎ候歟是は舊作に候が烏渡錄し御目に掛候

倦來抛二書帙一。物理靜此窮。游魚自潑剌。啼鳥亦冲融。欄角嘯二梧月一。庭陰吟二柳風一。世無二邵夫子一。茲懷誰與同。

たとひ御病中たり共如此襟懷に御成り候へかしと禱候〻外他事も無御座候以上

尚々毎度ながら御手筆はけしからず美事之事と感嘆不淺候

天保十一年八月廿四日　嘉助樣弊廬へ御著

〔七三〕八田嘉右衞門に贈る

松代町　八田彦次郎氏藏

此十九日朝嘉助樣御途中甚御安勝にて弊廬へ御著先以目出度奉拜賀候右に付此秋暑にも彌御淸適に被爲入候狀委敷奉伺歡喜不過之雀躍仕候將又嘉助樣御出府に付御細書を以御懇命を蒙り恐入候乍不及如何底にも不苦筋は御相談も可申上候扨又能こそ御落付被下候事故乍手狹其都合仕奥の書齋をば嘉助樣に差上御家來の衆は箇樣々々に屛風にてしきり差置可申御道具共は是に御收め可然抔一々手筈仕成程始終は何廉御窮屈にも候べく候得ば此近邊遠からぬ程之所に借り座敷抔御借りも可然候得共先御心長に是をも御詮鑿候へばいくらも御隨意の所可有御座且又此邊にて候へば時々の御面話も自由なるのみならず此度出訴に御使ひ被成候者共の宿所にも不遠八丁堀への御通路も程近く其外の御遊覽にも何れへの都合も宜敷候得ば御借座敷抔被成候にもいづれ此近邊に御定め被成候方可然但兩御屋敷へ少々手遠之樣に候得共是も只壹里にすぎぬ程に候得ば格別之御差支も有御座まじく且又餘りに御屋敷へ近過ぎ候ていらぬ人迄も時々相伺候と申よりは少々手遠と申位の處却て御都合にも可宜候はん抔申上候て先今日は段々の御疲れも候半ずれば篤と御休息候て明日南部坂會所抔へは御出候ても可然又早速御話も候はゞ御手紙にても可被遣とも

此度出訴に御使ひ被成候者共の宿所にも不遠

申上候所達て今日會所の者とも面會不致候ては差支御座候とて十九日晝頃に
直に私方より南部坂へ御出尤も今晩いかう遲く相成候得ば明朝早く御戻りに
可相成御家來衆をば其夜も私方へ御返し可被成樣御申御出掛被成候に付御家
來戻り候はゞ箇樣可致抔用意と申程には無之候得共其都合仕置候所其夜一向
に沙汰も無之翌朝四ツ時頃に相成候ても御音信無御座候故如何被成候事やと
無覺束存居候所へ與兵衞罷越申聞候には今日南部坂會所の御人の御世話にて
赤坂裏傳馬丁に御借宅を被成候て今晩其方へ御引移りに相成候に付御駕籠幷
御道具共取りに參り候と申候故大いに膽を刻し候て與兵衞へ挨拶仕候には夫
はけしからぬ事に候昨日も吳々申候事も御座候に一向御相談なしに右樣樣
を御替へ候事全く會所兩人の御勸めより出候とゝ被存候先第一赤坂邊にては
御屋敷への最寄はよくも候得共出入懸りの者共の宿所へも甚御手遠くあまつ
さへ此度御内狀にて被仰遣候何かに付見込を申候にも甚不便にて其上にも猶
申にくき御案事を申候次第も候得ば今より直に御屋敷へ罷越し御面話を以内
存をも可申上候得ば其方は先被仰付候通り御道具を爲運可申とて夫より直樣

私は南部坂へ罷越候御目にかけ候て無人境にて御内話申度由を申候所會所も
手狹故中々存意通りに參りかね候に付竹内八十五郎氏の二階にてなり共御は
なしを申度由を申候所昨夜中御内々にて御門内へ御入被成候故晝の内外へ御
出候事は御迷惑と申事にて實當惑仕候其内松澤外へ出かけ候て佐竹も傍に居
り不申候故烏渡存念を申候所右も無餘岐次第にて家をも借り候が今日は話し
も出來兼候間何れ明日參り候て委細之樣子をもはなし可申と御申被成候故其
日は參り候甲斐も無之空敷戻り候所翌日は雨天に付御出も不被下其翌廿二日
朝より御出被下候に付段々の存念をも委細申上候所公事懸りの者共始めも只
今の所は甚不便と申且十九日に御内話御座候大阪一條も（是は御着日に此度御出
内意有之大阪邊迄御出向に相成候事も（府之節御勝手方より御
樣被成度と申御内話も御座候に付私申候には夫は幸此節大阪方勤番之銅座に野村乾一
郎と申者懇志にて折々宅へ參り候間私方に御休息之間なれば尙幸左なく共此御近所に
御出候得ば手安く御引合せも可致候最初は事もなく御出逢被成候て其内に御注文の御
手懸りを御拵へ被成候はゞ必ず御内談のつき候事も可有御座と申事を御内話申候事に御座候　埒明かね候得ば十日計にて會所引
合せものも方付可申候得ば其節早速此邊へ參り度と被仰候が御内意を探り候
所會所兩人の氣向を損じ不申樣に御取計ひ被成度思召之樣被存候是も至極御

鐵様御同道の御含に御座候ひし處

尤もの事に候得共大抵にて可然か且最初與兵衞へ申にくき御案事の筋有之と申義は會所兩人と申もの才覺も人に勝れ候かはり又人にすぐれ由斷の出來ぬと申内松澤と申者尤も怖ろしき所御座候得ば何かに付御案事を申筋のみ多く候得ば餘り其近邊に御出不被成方よろしかるべく候私近邊にて候へばとて私の力量格別之御爲に相成候事も有御座まじく候得共從來格別の御中に候得ば私心力に及候丈は何に不寄御爲を存じ候譯に候得ば旁以一日も早く此近邊へ御置申度候重平歸り候節御懇書幷多助よりの御書添御挨拶御着御悦を申上度烏渡立寄候樣申置候所廿二日御目にかけ御内話不仕候内には餘り不詰り千萬之事に候得ば申上樣も無御座且又重平義も急に廿一日歸り候よし右故御悦び等餘り延引に罷成候其段は御海容可被成下候嘉助樣只今迄御他行も無之處にて御案事も被進候事御道理には候得共本より御如才も無御座候得ば御掛念被爲過まじく候又命を蒙り候迄も無御座候存付候事は乍不及如何底にも可申上候得ば是又御省慮被成下度候一體此度鐵樣御同道之御含に御座候ひし處左樣無御座是は大に殘念に奉存候大分御氣象のよしに候得ば御出御座候ても何の

當年は作毛も取わき宜敷樣子

此後のかくる所を此節の滿ちに候場にて其補ひを致し置申度ものに御座候

御氣遣ひも有御座間敷候處に御出御延引候事吳々無本意事に奉存候扨此程承り候得ばをば樣久しく御不例にて被爲入候よし散々之御事に御座候尤も格別之御義には無之よしには候得共大に御案事申上候嘉助樣御立後何の御障り候御事は無御座候や奉伺候追々凉氣にも相成候少しも御早く御平善御座候樣奉祈候御前樣いつも御輕健に被爲入候て先何より重疊之御事に御座候何分萬端御保嗇御座候て御遐算を被重候へかしと奉禱候外無御座候扨又當年は作毛も取わき宜敷樣子にて祭禮抔も賑やかに仕候由仰之通り先年御骨折御座候時分はいつ其樣のごかに相成可申やと存候所格別年もへだてず右等の樣子誠に天地變作之妙先第一御國家の御爲に奉恭悦候事に御座候乍去天地の間は缺ればひを致し置申度ものに御座候既に先達て中極密右之義に付御勝手方幷に御勘定吟味迄見込を申候義も御座候所嘉助樣御内話にては少々右等の御含みも御座候やのよし乍然下々末社の了簡も加り候故やいつも〳〵大作用に無之皆小智術のみにはいひがひなく奉存候事に御座候乍去右等の義は申上候迄も無御

座御他言は御訴訟申上候此紙面をも御覧後御火中可被成下候先は御懇書之御挨拶旁匆々申上候尚又御耳に入べき義も御座候はゞ後便可申上候乍憚御總容様へ可然御致意奉希候不悉

伊勢町　様　　修理

八月廿四日認

〔七三〕　鎌原桐山に贈る

天保十一年九月十八日

（此書簡桐山漫筆より摘錄前文後文省略せられて無し）

其御地は如何に御座候ひしやらん此十日此表先年八朔大荒御座候ひし後始ての大風雨にて弊廬の板屋大半吹破り五株の柳の内第一株の大枝を吹折り圍ひの垣を吹倒し候所數箇所有之誠に意外之剩費大に迷惑仕候其風雨最中には目も口も開き候はぬ位に候故中々外へ出て其防ぎを仕候事もあぶなく候故出來兼只其なりゆき候まゝに致し置衣類調度書物等をぬらさぬ様にと手當仕候事に候へども中々盆を傾け候より甚敷雨に候故吹卷きし屋根の穴より瀑布の様に水落候故大半疊をも上げ取片付候事にて先大抵火事に逢候半分位の騒ぎにて漸一兩日前所々修復も出來候と申仕合一躰屋根も先達而風雨之節に少々破られ候故其修復序に所々手を入させ先來年迄は勞も有之間敷存居候所大なる祟をくひ候て大迷惑を仕候乍去都下一統の事に候へば繰言も不用之事に御座候詩人の五山抔は又小生よりは甚敷風破の由板屋殘らず吹さられ門も吹倒し候由都下一統に右の次第に御座候故立入候事に候得共職人手間抔も其賃平日に殆ど三倍も致し平日四匁五分のもの十匁又は三朱抔と相成り右に准じ竹木共に大半價倍し申候其中にても外向は大抵に取繕ひ候はずしては不叶候故其始末仕り先漸事をば了し候得共此跡の所一苦み苦み候べくと奉存候

九月十八日

御屋敷板塀大方吹倒し南部坂御物見半潰れ氷川本多樣御長屋吹潰し右に付少し烟立候得共火事には相成り不申谷町大水腰迄程の深水に而半日程は往來止り候由

〔七四〕　宮下圭鈴に贈る

天保十一年十月九日

打絶御疎濶背本意候近日冬冷相加候得共尊家御揃倍御清祥可被成御與居奉拜賀候扨先達ては御佳稿を被得六禮も御首尾よく御整候由傳聞仕候嘸々嚴慈二大人にも御滿悅と奉察竊に遙祝仕候事に御座候多忙中右之御悅も遂に夫なり因循稽緩重ね〳〵背本意愧悚不少奉存候唯仁者宜しく御海容被下度候將又北山愚甥も不斷可蒙御敎授多々奉謝候何分幾重にも御督責之程奉仰候兎角渠は浮薄の方に流れやすき資質に見受氣遣はしく候間そこ所も御含置き宜敷樣御訓導奉願候然ば東遊之節奉貸仕置候韓柳文近來塾生にも勉めて作文に心留候者御座候に付一過も致させ且校字も致し置度候間乍御面倒荷物便の節此表へ御擲返被下度奉冀候尤も脚錢は此方にて遣し可申候間其段幸領の者へ被仰含可被下候千萬所祈御座候其後御文字は如何や鎌先生よりも繁々の御文通に候が尊兄の御噂は一向無御座乍去定て折々御著作も御座候半と奉想像候御近製一兩首御序に御示及被下候はゞ可爲萬幸候維時倍冷折角以御自重御座候樣所禱御座候乍憚二大人へも宜敷御致意奉希候冗次不盡所欲言

初冬九日　　啓　拜手

宮下長兄　斐几

小白近日之拙作呈覽仕候いつも〳〵無取飾蕪篇想當發一笑耳

郊行

散步愛秋晴。平郊窮遐矚。稻田已垂黃。楓塢猶雜綠。征雁聯時分。閒雲斷復續。觸目理妙存。相羊悟悅足。

象山　啓

〔七五〕綿貫新兵衞に贈る

天保十一年十一月二十日

先達て九月十九日之芳翰拜接其後早速右奉復も申上度奉存候所に打續き種々之賤幹蝟集乍存御無音に打過悚息無已候に又々御棄絶も不被成下本月初六御認めの御手帖御投下扨々難有恐入候次第に御座候先以寒威相募候得ごも貴家被成御揃倍御多祥浣慰之至奉扑賀候小生義も幸いつも頑健に罷在候間乍憚御過念被成下まじく候偖此度之御手帖急用と御題し被下候故何かといそぎ拜披仕候所御傳聞被成下候清人へ差贈り候詩集の序文認め候ことにつき皇朝の御

梁川星巖と申詩人詩集を只今まで數篇致彫刻

（雪庵は藩士金子丈助の號なり書を能くす）

威稜の落ち候はぬ樣心付候樣御垂誨被成下今に初めぬ義ながら御懇情之程厚難有且御卓見之義歎感仕候但尊書には何か皇朝の詩を小生の取り集め候樣に被仰下候が左樣之事にては無御座候隣家にて御座候梁川星巖と申詩人（是は頗る詩學には骨折候て其詩律の細密は此都下第一等の人にて候半か）詩集を只今まで數篇致彫刻此度五編にも及び候事ゆゑ清人へも贈り度（是にはよき手より有之此節淸國に顧祿と申もの有之頗る文才の候て本邦の詩人の和韻を求め候よし此便に遣し候積りなり）右に付序文認め吳候へと申賴にて認め候に御座候故少々心を用ひ却て麗靡浮華をば一切脫に見え申候その國へ遣し候に御座候得どもその心にて仕候ゆゑ先は落只義理を以て勝り候樣起稿仕候事に御座候得どもその心にて仕候ゆゑ先は彼邦へ遣し候てもいかうは恥候はぬ積に御座候いづれ草稿電覽之上御一笑可被成下候

夫を申せば公家の事にも及び候故その段は不申上候

一近日御物好に御詩作御始め被成候よしにて兩篇御示及被成下難有拜見仕候殊に末の御作は小生之不逮御針砭被成下候て不堪感激奉心謝候右之義に付ては先便も蒙仰候義に候故かねてより心事を吐露仕申上度存罷在候所に候得ば此度の高作御寄示不被成下候ても申上候筈に御座候まして又々御誨諭を蒙り候上は聊も御隱し申度無御座候成程御外見被成下候所にては最早七十に近き老母を離れ候て此表に卜居等致し永住の姿をなし候得ば御不審を蒙り候も當然之事に御座候然る處右には深き譯も有之且存念も御座候ことにて中々紙筆の及び候事には無御座候只紙筆の及びかね候のみに無之夫を申せば公家の事にも及び候故その段は不申上候但老母と致離居孝子の情に於て安きかと申御尋ねのみを申上候高察の如くもはや母も老年に候得ば此表に罷在候て一二宿外へ出候ても心にかゝり候事のみに候へば歸路は必らずいそがれ候位の所形の如く五十里外隔居仕最早兩年にも及び候故朝暮雨暘風雲月露につき候ても慕はしく且心元なくも存じ候へば此表へ引取も致し度候所北山の姉並に甥姪にひかされ何分思ひ切此表へ參り候事出來かね候樣子にて私へ申遣し候に

孟子に心志を養ふと口體を養ふとの辨も御座候へば

は是非とならば老て子に從ふ身に候へば參りも可致候得ごも自然不快等の節
姉甥姪に逢度存候ても叶ひ不申又男子の身にては往來も易き事に候得ば若不
快等の節は申遣せば宜しく候間やはり箇樣致し居候が心も氣も安しと申し候
此表へ引取候得ば瑣細の事ながら寔も二ツに分れず候故作活の爲にもよろし
く且は口體の養も手元なれば何とかも可仕候得ば夫らの所を以て謀り候得ば
彌此方へ呼寄候がよき樣にも候へごも孟子に心志を養ふと口體を養ふとの辨
も御座候へば假令少々作活の爲にあしく又たべさせ候もの意に不任候とも只
今の所にて心安しと申を强て此方へは引取かね候次第又姉にて御座候ものも
男子とても無之よく義理をわきまへ候て母の取扱も殘る所もなきやうに致し
くれ候故そこに安心仕候場も有之且男子生れて桑弓蓬矢天地四方を射候こと
は四方に志あるを示し候義たゞ膝下に居候のみが孝子にも有御座まじく衰頽
の家名をも振ひ不及ながら父母の名の不朽に殘り候樣に心掛候はゞ不孝の罪
をば免れ候はずやと奉存候事に御座候愚意如此御座候猶理にあたらざる所御
座候はゞ御提誨被成下度奉願候扨又御詩作の事にて御座候が曖翁へ御贈り被

(懼堂は藩士山寺源大夫の號)

成候は先御延引の方可然奉存候御和歌なれば至極妙と奉存候被下候御和韻を
ば申上度候所此度も急の便殊更發書も多分に候得ば次便まで御日延相願候近
日感ずる所あり一詩を壁に題し候が不出來ながら供高矚候御一粲可被成下候
惡影却趨徒自苦。竊鈴掩耳更堪悲。多方裝飾爲何事。識破金鍮已幾時。
扨先便の御挨拶も此度乍略義一同申上候來敎云當時一般の樣子國を憂民を憂
事抔と申迂遠の義は致拂地迚も下愚の力に及び候はぬ事無餘岐不忠とは存居
候得ごも唯々隱遁閑靜而已暮居候是は御同樣浩歎に附し候より外は無御座候
右に付候ても小生抔は先づ謀を得候つもりに御座候是も國恩と時々難有事に
奉存候小生出都以來一統の文學相衰候よし被仰下候得共是は左樣には有御座
まじく懼堂抔も要地とは申ものゝ先閑職に候得ば後輩の鼓舞振作も出來可申
候得ば何にても右樣の事は有御座まじく候唯何分にも申上候までには無御座
候へごも賢胤達の御懈怠御座候はぬ樣御督責專一と乍憚奉存候尙其餘に種々
申上度事のみに候得ごも紙筆に難盡先兩度の御答乍簡略一同申上候次第寒氣
も可烈候折角御自重御座候樣所祈御座候以上

十一月廿日　　啓　拜復

東陽盟臺座右

毎度家母健在之趣安心仕候被仰下高意奉感謝候將乍憚御序に尊嫂前へも可然御致意可被成下候

天保十一年十一月廿日

〔七六〕山寺源大夫に贈る

（文公像賛を揮毫）

（前文切れてなし）

同父の賛語相認め差上候様にと仰を蒙り候義には御座候得ども小生從來同父の學問は餘り好ましからず只管尊奉仕候所は此先生之外□□無御座右故先生之像賛今日に至り候迄數多御座候得ども先生之自賛に過ぎ候は有之まじくと愚眼には奉存候事に御座候其第一等之文字□□□□第二第三の言語をその尊奉仕候所に施し候事何か意を扞げ候様にも相成如何に付命に背き候て態と先生之自賛を認め申候是も拘儒の常態と御破顔可被成下筆畫之拙劣是は申上候迄も無御座候呵々

烏山老侯

（津藩の家老藤堂多門の事）

一　烏山老侯之事御尋に御座候が近日中深川邊にて御同席申緩々得拜話候事に御座候扇橋之邸へも罷出候様に命をも蒙り候得ども遠方ゆゑに存じ餘しつゐ于今御尋ね不申候□書をば其内雪老へ送り候約束致し置候事に御座候

一　竹沙には其後逢不申候暑時に一夕尋ねくれ候て人定頃迄話し候事に御座候ひしが其後は甚契闊に御座候先頃林氏之會上にて田邊新次郎に面晤之節承り候處老人いつもよく健のよしに御座候

一　藤堂多門の事被仰下候が只今迄承りも及び不申候乍然不被成御逢候とて今に御懸念程之事に候得ば定て豪傑之士にても御座候べく候其人により逢ひも仕度候得ども御聞知之所御序之節御示喩被成下度候

一　對州御用之義一々仰の如くに御座候北澤君迄被仰越候には何か小生既に林氏の命をも得候やの様に御傳聞も御座候ひしよし是は申候ものゝ誤に御座候但小生には少々見解御座候に付假令賴まれ候ても參らぬ心得に御座候其次第も申上度候得ごも執臂ならでは申上にくき事共に御座候乍去不申上候ても尊兄之御聰明にては必御推察も可被下と奉存候近日も日光遊記を樫宇公かも

朱學管闚

らひ候て一覽致し候ても唯嘆息のみに御座候少々存念御座候につき曖翁へ申述度候其後度々參り候が折あしくいつも逢不申候世間靈骨の御座候もの幾希にて眞珠と魚目との辨別も無之樣子是にはあやまり申候畢竟自ら見る事暗く候故人を見るも又暗き樣に被存候其內右遊記をば御廻し可申候是御一覽御座候はゞこの謎語のやうに申上候事もおのづから相分り可申候

近日安積艮齋朱學管闚と申著述致し草稿にて相談に遣し候ゆゑ夫を論じ遣し候書も御座候是も御覽に入候て又御評論をも相伺度候が此節外へ差出し置候間右遊記一同跡より差上可申候明朝八田歸藩之よし暇乞に參り候につき的便に任せ乍略義兩度之奉復一同に申上候尙申上殘し候事多々御座候が外にも發書多分御座候故匆々如此次第寒威も募り可申候折角御多愛所祈御座候王母君久しぶりにて信中之嚴寒定て御迷惑に可被思召候是又折角御保護專一と奉存候御喘息之御氣味は如何に御座候や母の方迄奇方を得候て申遣置候自然御なやみ被成候事も御座候はゞ御尋可被成下候自ら試み候所實奇驗御座候藥に御座候令郎樣も寒氣には御弱り可被成候乍去雪と申よき御慰みも有之定て御世話のやけ候程に御玩びも候べく奉存候此帋相認め候にも御同前雪をつかね山を成し候事抔存出し候得ばもはや二十年外之事恍然如夢に御座候不謹

澁谷氏の長女を聘し候つもりに內談は既に調ひ申候

天保十一年十二月九日　　懼堂尊兄皐比

十一月廿日　　啓拜復

小白伉儷之義も段々御心勞に被成下候が先頃中子孝錫命兩氏の勸めにて澁谷氏の長女を聘し候つもりに內談は既に調ひ申候愚意にては願ひ通被仰付候て年內に引取申度奉存候段々御勞念も被下候義につき此段尊聽を瀆し候事に御座候以上

〔七七〕竹村金吾に贈る

（前文切斷）

奉萬謝候殊に風破修復の六圓は全く君相之御恩惠に御座候得ごも偏に先生御周旋之御力に依候事と誠に不堪感激拜謝にも詞無御座候先々御庇蔭を以今歲も何とか凌ぎ可申候乍去段々御手段をも奉勞仰を蒙り候蟻川等之事も御座候得ば如何可參や氣遣は敷被存候併矢公も御出之義いづれ何とか越歲も可仕候

（矢公は藩老矢澤監物）

はゞと安心仕居候事に御座候しかし仰之次第にては蟻川事誠に驚嘆之至りに御座候小生之方も御熟知の通切詰候上の事に候得ば行々の處乍心外行屆きかね可申候去月末著のまゝ一錢之仕送りも無之候を日々の賄ひ紙筆の費其外調度衣類の洗繕に至る迄致し遣し候事此表にては中々存外に掛り候事に御座候政生は夫等之事も幼年故に不辨候てては書廟がほしく候の何がほしく候のと申候には流石の小生も困り果申候御一咲可被成下候御多務の御中山右等へも御咄し被成下候段何やかや色々の御苦惱を奉掛恐入難有奉存候一家母の方へも御尋ね被成下且俸米折銀之義も御心添被成下此段も大に難有奉多謝候右にて先安心仕候義に御座候今日便のよし昨日承り候につき草々此程之拜謝のみ申上候乍簡忽前兩度の御答も書尾に一同申上候先般の段は何分御宥恕可被成下候維時益寒伏冀爲衆珍愛

（去月末は去年來の誤ならずやと思はるゝ屬く疑を存す）（政生は蟻川政治郎）

嘉平九日　　啓　拜復

子習先生皐比

奉入御覽候女訓の御禮御丁寧に仰を蒙り結句痛入候御事に御座候尊嫂前より

奉入御覽候女訓の御禮

も御懸命何共恐入候御扶持之義は來春拜言之節御教解可被成下との御事難有相樂み罷在候義に御座候申上候條差當當今之急務と被思召呈書之儘矢公迄御差出し被成下候よし不敢當御事に御座候乍去右にて何か御國家之裨補と相成候得ば夫は重疊難有仕合に御座候第に御座候于今よく近邊には騷々敷義も無御座候是は天幸と奉存候御深情御芳問を蒙り千萬奉謝候（巳上十月廿一日御認置の奉復）

當年は大に健に相成候段申上候處御悅び被成下細々蒙仰御深情之程毎度不堪感謝奉存候扨又御下げ金最初五圓之御勘辨と申所宜御序御座候て又々御口上御添被成下候に付六圓と相成候段僅々の一圓聊の樣には御座候得共小生當今之處にては誠に難有奉萬謝候矢公へも近日此段申上候て一咲仕候事に御座候家母平安のよし被仰下難有安心仕候婚儀の義も申上候所御懸詞を蒙り奉多謝候内談は早く調ひ候ひしかごも又々政府の異議にて一體當年中に引取度心構に御座候ひしが兎ても來春に相成候半と奉存候（巳上復月十八日の御答）

年内は誠に日も無之罷在候如高敎來陽の拜謁も程近く相成り是のみ奉待上候

婚儀の義も申上候所御懸詞を蒙り

義に御座候矢公へも近日拜參半時計得拜話候がいつも愉快の御人にて鄙吝を消し候事に御座候以上

天保十一年十二月十七日　嘉助君御榮歸

〔七八〕　八田嘉右衞門に贈る

松代町　八田彦次郎氏藏

嚴寒之節御座候得ごも貴家御揃御清勝に可被爲入奉遙祝候扨先日は嘉助君も御途中御阻撓も無御座御榮歸御座候て重疊目出度奉賀候其後元之進殿御出にて伺候得ば御叔母樣御不快も次第に御爽快に被爲入候よし歡喜之至に奉存候隨て小生義甚無異に罷在候間乍憚御省慮被成下度候此一品餘り如何敷御座候得共寒中御左右伺候印迄奉拜呈候折柄御進杯之一種とも相成候はゞ千萬榮幸之至に御座候もはや年內餘日も無御座候總て來陽を以可申上候唯折角氣候御凌ぎ被爲在目出度御迎陽御座候樣にと奉祈候外無御座候以上

十二月十七日

嘉右衞門樣

脩　理

天保十二年正月十六日　合弟の御手柄　尊藩御學政の事

〔七九〕　加藤彦五郎に贈る

長野市　和田榮二氏藏

改歲之御慶不可有盡期御座候當春は一體に氣候後れ候故歟都下も常歲よりは殊に烈寒に御座候へば其御地は又更に數層之栗烈にも御座候半と存じ料られ候所に貴家御揃倍御多祥に被成御履新珍重不過之奉拜賀候扨今般令弟之御歸省も畢竟不得止に出候事ながら先々芽出度奉存候早春より不意の事にて御心配の筋も御座候ひし由內密承候所全く令弟の御手柄にて其段も一廉は御安堵と相成乍蔭竊に相悅候事に御座候誠に人世折々種々の曲折御座候には每度弱り果申候此度の事抔も實御察し申候事に御座候偖其後も中心には彼是と尊聽を瀆し正を乞度筋も有之書狀をも呈し度存じ候ひしかごも何分多忙勝に罷在心ならず御疏遠に打過候事慚悚不少奉存候其後は定めて御新知も多々御座候半と奉想像候此度幸令弟も御歸省候事御再遊之節は必ず御樣子をも委敷承知可仕と相樂罷在候乍去此度之御歸省に付少々愚意御座候て令弟へは精々致忠告候て心得させ申候其義は別事に無之尊藩御學政之事にて候が一體の所程朱

之學にて御規則も立居候事ながら追々側聞仕候へば大學の起手格致を始めとして衆論統一も仕かね候よし是等の要處既に統一不致候節には其他の異論御座候は怪しむに足らぬ事に御座候さて學術道徳をば一途に致し不申候ては叶ひ難き事ながら又其間に於て時と勢とも御座候ものに候へば此節の御場合令弟抔の口舌を以て爭はれ候とて夫にて事の遂げ候筋も無之先年御書牘にも被仰下候通り却て他を激し意を固くし候事も或は可有之候へば此度御歸省之間は決して誰人とも議論らしき事無之様に致し申度且世の人情と申もの才識の高下に拘はらずたまさかに出逢候ものとは先一番辯論にても致し見たがり候ものに候得ば此方にても遂其客氣に移り候が世の常の事に候得ば此度は格別に心得られ候て人に依り議論を好み候もの有之候とも此方にては頓と其あひ氣をはづし候て辯じ申されざる方所謂不戰して人の兵を屈するにて全勝の良策に候と吳々申候事に候が令弟にも頗る英氣御座候故尚或は此戒を保たれ難き事も候半歟抔竊に御氣遣も致し候事に付此段極密申上候て尊兄にも宜敷御訓誡有御座度奉存候事に御座候是等の事假令不費紙筆候とも本より其御心得も御座候半なれども僕にも生得中和を得ぬ氣質にて往々事を害し候義も有之只今に其病根を拔き候事不能時々慚愧仕候事に御座候乍去以前に比し候へば少々病痛も磷ぎ候故にや只今より往事を反顧仕候へば赧汗の事のみに御座候自己の病弊を推し候て令弟抔の御事も甚按思も致し候事ゆゑ如此御座候伏冀照諒將拙文御覽に入候には足らず候へども近文兩首附呈仕候康節先生集序は客歲の作賦は今春の作に御座候宜しく御指摘御削正被下度奉仰候序の方は少々學術に關係も御座候に付態と掛御目候尊意も御座候はゞ必ず仰を蒙り度候尙申上度事共山々に候へども近日來甚取込の筋も有之且此紙をも少しも早く令弟の御寓居へも遣し申度まゝ總て申殘し候餘は後信可得貴意候惟春寒折角御自玉所禱御座候恐惶謹言

正月十六日

佐久間脩理

啓　迪

加藤彦五郎樣

人々御中

〔八〇〕　八田嘉助に贈る

天保十二年正月廿九日

芳翰拝見仕候如高喩新正之御慶無際限芽出度申納候御家内様御揃彌御勝常被成御迎陽珍重不過之奉拝賀候早速爲年頭御祝詞預御紙表萬々奉感謝候恐惶謹言

正月廿九日　　松代町　八田彦次郎氏藏

八田嘉助様貴報　　佐久間修理

再白尊大人ゟも今般御手答被成下難有奉存候今日も甚取込候義に付別段不申上候間乍憚御序宜敷被仰上被下度奉希候

一御別封御手帖難有拝誦兎角其表は春寒退兼候よし御座候得共益御清寧奉遙祝候母義健在之趣も被仰下難有奉謝候扨又川上席付年始之分も貰受差上可申様奉畏候御安き事に御座候則尊意に従ひ隣家へ申遣候所此節利休師年回之會席御座候よし右を認め遣し候て差上候間御納可被下候先は貴酬耳匆

利休師年回（二百五十回忌）

匆以上　　佐久間脩理

八田嘉助様

〔八一〕　高野車之助に贈る

天保十二年閏正月五日

貴札致拝見候如來示改歳之御慶何方も同様目出度申納候彌御清健御加年御座候狀珍重之至奉存候私事幸無異犬馬歯を加候間乍慮外御降心可被下候早春早速之御祝詞千萬辱次第御座候右御報得貴意度如此御座候恐惶謹言

閏正月五日　　佐久間脩理

高野車之助様　　啓　迪

人々御中

又白廿二日之華墨も辱致拝見候益御清健喜慰此事に御座候家母健在之趣被仰下毎度辱奉謝候段々御安愚甥（御安愚甥は御安町の甥北山安世と其弟藤三郎とを指す）御督責被下當春は兩人とも御褒賞戴き候よし偏に賜ものと感謝に詞なく候扨又當春御參宮之御思ひ立目出度奉賀候私